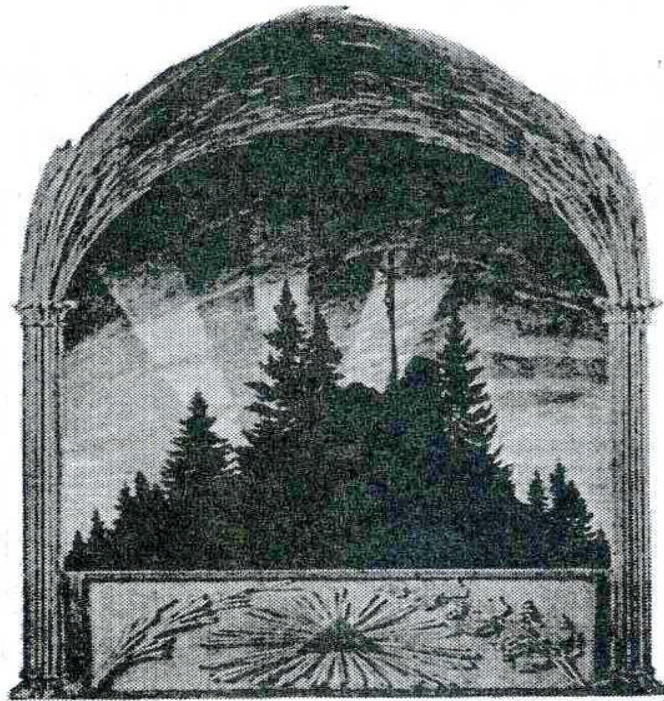


十字架か、杭か

中澤啓介



The Cross

Casper David Friedrich

Keep always in mind that life is what Adam lost and life is what man desires, and that the only way to life God has fore-shadowed in the sacrifice of the passover lamb, which lamb represents his beloved Son. Page 161.

J.F.ラザフォード著『Creation』（1927年）336頁より

再版にあたって

本書が出版されたのは、昨年11月、ちょうど一年前だった。発刊されて数ヶ月の内に、たちまち、初版が売切れてしまった。そして、たくさんの方が、本書を読んで、ものみの塔の教えが聖書の教えとく違っていることに気づき、聖書を改めて読みなおしてみたいと連絡してくださった。そのような声を聞いたときに、本書を発刊したことが無駄ではなかったことを知り、神に感謝した。

そして、多くの方々から再版してほしいとの要望が寄せられたので、かなりの箇所を修正加筆し、再版することにした。むろん、内容はほとんど変わっていないが、かなり読みやすくなったのではないと思う。

初版以来、ものみの塔協会側からも、個々のエホバの証人からも、正式な反論や批判は寄せられていない。本書のような polemical な（論争を主眼とした）書物を出版した著者としては、拍子抜けの感がある。本書の原版を協会本部（海老名市）にもお送りし、コメントを求めたのだから、何らかの応答、批判や反論があってもよさそうなものなのだが、それもない。残念に思っている。

本書のような書物の性格上、執筆者が、論争の起こることを期待するのは当然である。なぜなら、ものみの塔協会が何の反論もしないなら、協会は本書に書かれていることを認めた、と考えるのが一般的常識だからである。

しかし、協会は、本書の陳述を認めたわけではない。否、認めるわけにはいかない、と言うべきだろう。だが、認めないのであれば、反論すべきである。認めないのに反論しない。認めて自らの出版物を訂正することもしない。一切を無視する。これが自らに不都合なことを示されたときの、ものみの塔協会の態度である。このようなスタンスをとる限り、ものみの塔はカルト教団呼ばわりされても、仕方がない。

筆者が、ものみの塔の信仰の反対者であるから協会として反論しない、というのであれば、正しい弁解ではない。筆者は、協会が、ある事柄を間違っているのだから反対しているのである。従って、反対されている人は、「弁明などしない」と開き直るのではなく、指摘された間違いに対して弁明する責任がある。もし、その弁明が説得力を持っていれば、筆者は喜んで、協会の立場を取る。

筆者は、そうすることを、これまでどの書物においても表明してきた。筆者は、ただ、聖書に忠実でありたいと願っているだけである。この点では、個々のエホバの証人の方々も、まったく同感ではないかと思う。もしそうでなければ、本書のような書物を書くことは、時間の無駄である。

筆者は、いつまでも、ものみの塔協会からの反論をお待ちする。協会の本部からでも、個々のエホバの証人からでもよい。それがどのような反論であっても、誠実に対応することをお約束する。

しかし、これまでに、反論がまったくなかった、というわけではない。二人の方が、インターネット上で本書に反論してくださった。実際には、反論と言えほどのものではなかったが、再版には注をつけたので、そこで触れておくことにしたい。特に、匿名で反論してくださった一人の方とは、じっくり話し合ってみたい。連絡先を教えてください、と願っている。

証人の世界では、本書のような書物を読むだけでも勇気がいる。まして、このような書物に反論することは、大変なことであろう。本書に関わりを持つこと自体、組織の方針に反することであるから、匿名で反論せざるを得ないのはやむをえない。従って、筆者は、その匿名の方に心からの敬意を持っている。多分、その匿名の方は、豊かな知性の持ち主で、勇気ある、将来組織を導いていくような証人であるに違いない。そう推察しているので、あえて申し上げたい。一般社会では、本書のような書物に匿名で反論すること自体、許されるべきことではないのだということ。

ところで、証人たちが、年間一億時間以上も伝道に費やしながら、日本では、99年度の伝道者数が減少

してしまったのはどうしてなのだろうか。理由は明白だと思う。日本社会が、ものみの塔という宗教団体をカルト（マインド・コントロールを使っているグループ）と認識しはじめたからである。オウム真理教、統一協会に続いて、ものみの塔をカルト団体と見なしているのは、一部マスコミの世界だけの話ではない。エホバの証人たちが一軒一軒訪問しているその家庭の人々が、カルト教団と認識し始めたのである。

実は、この現実を最もよく認識しているのが、海老名の日本支部のリーダーたちである。ゆえに、支部は、ものみの塔がカルトではないことを日本社会に認知させるため、さまざまな努力を払っている。

しかし、ものみの塔がカルトではないことを社会に分かってもらうのは、実はそれほど難しいことではない。これまで協会は、組織にとって都合な情報を信者たちに触れさせないようにしてきたが、ただそれを止めればよいのである。それは、協会の教理、歴史、実状を批判する意見や書物、あるいは組織の不祥事を知っている人々を排除しないことである。つまり、情報統制を解除することである。

カルトとか、マインド・コントロールと言われるグループには、情報のコントロールがつきものである。信者たちを、外部や内部の批判から守ろうとするからである。もし、それさえ止めるなら、組織の透明性は高くなり、ものみの塔協会も社会的に認知されるようになるはずである。いくら、マスコミや学校、地域社会の人々に、ものみの塔の宣伝をしてみても、それで、カルト呼ばわりされなくなるというのは無理であろう。

もし、ものみの塔協会が社会的に認知されたいと本気で望むのなら、本書なども、海老名ベテルで取り上げ、本格的に反論すればよいのである。

筆者は、本書において、協会を相当厳しく批判している。これほど批判されても、協会が何の反論もしないのは、その批判が当たっているからだ、と考えざるを得ない。もし、筆者がエホバの証人であるなら、自らの名を名乗って、徹底的に本書への反論を試みる。公開討論でも、シンポジウムでも、何にでも応じるだろう。反論の書物も書き始めるだろう。そうすることによって、ものみの塔がカルトであるという一般社会の認識を払拭するため努力するだろう。そうすれば、その風穴をあけるぐらいのことはできると思うからだ。

日本には、22万人以上ものエホバの証人がいる。多くの証人の前で話をする講演者たち、若いエリート二世の証人たち、命懸けで真理を追求している頭脳集団もたくさんいるはずである。なぜ、本書に義憤を感じ、本書の著者に本格的に論争しようとする証人が一人もいないのか？

ぜひ、名乗り出てください。真理を明らかにするため、裸になって論争しようではないか。

むろん、エホバの証人以外の方々からの批判、意見をも期待している。聖書学者であっても、言語学者であっても、歴史学者や考古学者であっても、大歓迎である。

聖書の真理が明らかにされるため、本書が用いられるよう、祈りつつ。

1999年12月

相模原にて

中澤啓介

目次

| | |
|-------------------|----|
| 再販にあたって..... | 1 |
| 前書き..... | 8 |
| インターネット上の論議..... | 8 |
| 問題の所在はどこに..... | 9 |
| 論者の不正確な議論..... | 9 |
| 証人や研究生の方々に..... | 10 |
| 問題にならなかったテーマ..... | 10 |
| 協会からの挑戦..... | 11 |
| 十字架は偶像礼拝か..... | 11 |
| 自分の責任を示されて..... | 12 |

第一章 協会の主張

| | |
|------------------------|----|
| 1. ラッセル時代のシンボルマーク..... | 14 |
| 十字架がシンボルマーク..... | 14 |
| 協会の教えとの矛盾..... | 14 |
| 2. ラザフォードによる変更..... | 15 |
| 十字架だった時代..... | 15 |
| 杭への変更..... | 16 |
| 3. 変更した歴史的事情..... | 16 |
| なぜ神は沈黙しているのか..... | 16 |
| ラッセルたちは知っていた？..... | 17 |
| 変更の背景の出来事..... | 17 |
| 仮説の検証を..... | 18 |
| 4. 協会が展開する論理..... | 19 |
| 変更する真の意図..... | 19 |
| 聖書を勝手に利用して..... | 19 |
| 偶像崇拜者に関する論理..... | 20 |
| 部分的な真理..... | 20 |
| 不確かな真理..... | 21 |

第二章 協会の詭弁

| | |
|-------------------|----|
| 1. スタウロスについて..... | 23 |
| 協会の利用法..... | 23 |
| 間違った論理展開..... | 24 |
| 『新聖書辞典』の引用..... | 24 |
| 悪引用の証拠..... | 25 |
| 許されない引用法..... | 25 |
| 説得力のない弁明..... | 26 |

| | |
|-----------------------------|-----------|
| 証人の方々へ..... | 27 |
| 『国際標準聖書百科事典』の悪引用..... | 28 |
| 悪引用とする根拠..... | 28 |
| 誰に責任があるのか..... | 29 |
| 『インペリアル聖書辞典』の悪引用..... | 29 |
| インペリアル聖書辞典の見解..... | 30 |
| 紹介されていない部分..... | 31 |
| 他には見られない詐欺的な引用..... | 31 |
| 2. クシュロンについて..... | 32 |
| 協会引用..... | 32 |
| どこに問題があるのか..... | 33 |
| クシュロンが使われた理由..... | 33 |
| 3. ラテン語のクルクス..... | 35 |
| 古い論争の記録から..... | 35 |
| ルイスとショートの『ラテン語辞典』..... | 36 |
| リップシスの杭の絵..... | 37 |
| 4 十字架の起源について..... | 39 |
| 古代のいろいろな宗教..... | 39 |
| タイアクの書物の悪引用..... | 40 |
| 何が問題なのか..... | 40 |
| タンムズの神に起源？..... | 41 |
| タンムズ神とは無関係..... | 42 |
| クルクス・アンサータ..... | 43 |
| カットナーの書物の悪引用..... | 44 |
| 悪引用をする理由..... | 45 |
| ガルニア大佐の書物からの悪引用..... | 46 |
| コンスタンチヌス大帝のときに起こったこと..... | 46 |
| コンスタンチヌス大帝と異教の関係..... | 47 |
| コンスタンチヌスに対するおかしな議論..... | 48 |
| ハドソン報告による弁明は有効？..... | 49 |
| 5. バインの辞書について..... | 50 |
| バインの書物に対する一般的評価..... | 50 |
| バインの主張点..... | 50 |
| 6. 十字架を持つことについて..... | 51 |
| 刑具を持ち歩くだろうか..... | 51 |
| 像にされていることの問題..... | 52 |
| シンボルを持つこと自体への批判..... | 53 |
| 7. 組織のリーダーへ..... | 54 |

第三章 初代教会教父の文献から

第三章 初代教会教父の文献から

| | |
|---------------------|----|
| 1. イグナチウス..... | 55 |
| 2. バルナバの手紙..... | 55 |
| 3. 殉教者ユスチヌス..... | 56 |
| 『第一弁明』より..... | 56 |
| 『トリフォンとの対話』より..... | 57 |
| 4. シビュラの託宣..... | 58 |
| 5. ペテロ行伝..... | 59 |
| 6. パウロ行伝..... | 59 |
| 7. トマス行伝..... | 59 |
| 8. テルトゥリアヌス..... | 60 |
| 『護教論』より..... | 60 |
| 『ユダヤ人への答え』より..... | 61 |
| 9. ミヌシウス・フェリクス..... | 61 |
| 10. 3世紀後半の文献..... | 61 |

第四章 考古学の証拠

| | |
|----------------------|----|
| 考古学の証拠に対する協会の発言..... | 64 |
| 考古学上の証拠が少ない理由..... | 64 |
| 1. 二百年祭の家..... | 65 |
| 2. エルサレム近郊の納骨堂..... | 65 |
| 3. 廃墟の壁画..... | 66 |
| 4. 家族の墓..... | 66 |
| 5. 釘の刺さった骨..... | 67 |
| 協会の飛躍した論理..... | 67 |
| 正当な論理による思考を..... | 68 |

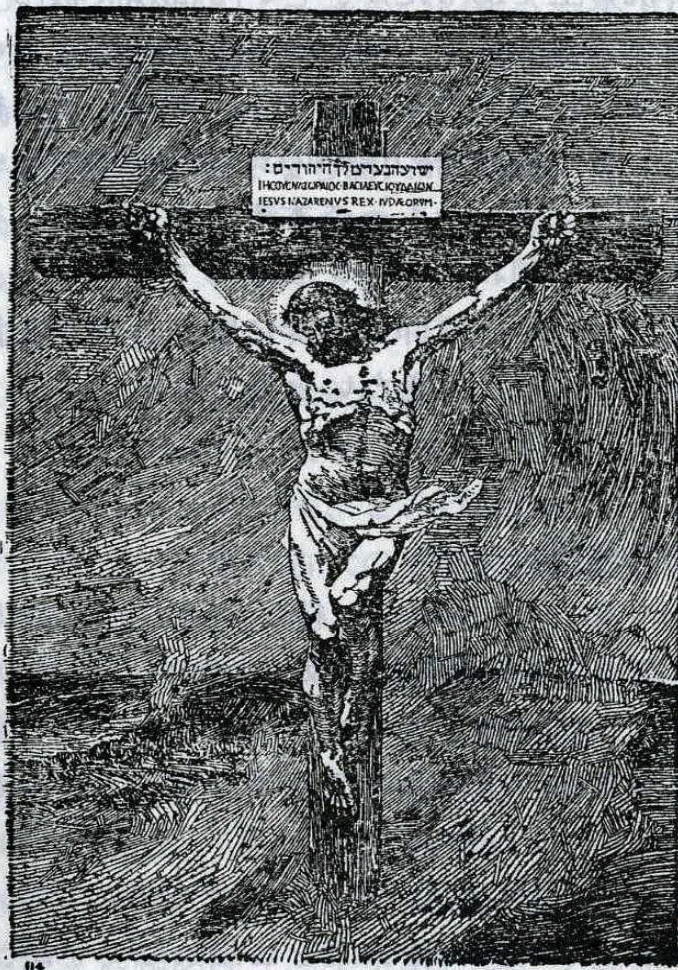
第五章 聖書の証言

| | |
|-----------------|----|
| 1. 釘の数..... | 71 |
| 協会の弁明..... | 71 |
| 2. 罪状書きの位置..... | 72 |
| 3. ペテロの死..... | 72 |
| 4. イエスの例え..... | 73 |
| 5. 担われた横棒..... | 73 |

第六章 十字架についての考察

| | |
|------------------|----|
| 1. ローマ以前の状況..... | 76 |
| ペルシャ帝国以前から..... | 76 |
| 考古学上の発見..... | 76 |
| 2. ローマ世界の状況..... | 77 |

| | |
|---------------------------|-----------|
| フェニキヤに由来する | 77 |
| さまざまな形の十字架 | 77 |
| 奴隷の犯罪者に対する刑具 | 78 |
| 十字架刑の効用 | 78 |
| 3. 処刑方法 | 79 |
| 最も残忍な処刑方法 | 79 |
| 十字架刑のプロセス | 80 |
| 4. ユダヤ世界において | 81 |
| 旧約聖書の事例 | 81 |
| 旧約聖書以降の状況 | 82 |
| 5. 十字架刑の廃止 | 83 |
| 6. スタウロスについて | 83 |
| 7. イエスの死 | 84 |
| イエスの処刑のプロセス | 84 |
| 歴史的事実としての十字架 | 86 |
| 十字架が示す霊的意味 | 87 |
| 結 論 | 87 |
| 終わりに | 88 |
| このテーマはなぜ重要なのか | 88 |
| 執筆の理由 | 88 |
| 協会はどのように応答するのか | 89 |
| 都合が悪い情報に直面すると | 90 |
| 協会の責任 | 90 |
| エホバの証人の方々へ | 91 |



J.ラザフォード著『The Harp of God』(1920年) 114頁より

前 書 き

この書物は、イエスが死なれたのは、十字架上であったか、それとも、一本の杭の上であったかという問題を扱っている。筆者は、その問題を学術的に明らかにすると同時に、その問題を通して、エホバの証人の方々やその研究生、あるいは、彼らと接触している人々に、ものみの塔の信仰の真理性や本質について考えてもらいたい、という願いをもって本書を記した。本書は、聖書の細かな解説や歴史に関わる議論を展開しているのので、難しいと思われるかも知れないが、信仰の根幹に関わる問題を扱っているのので、じっくり考えていただきたいと思う。

インターネット上の論議

本書のタイトルを、「十字架か、杭か」とした。はじめに、なぜ、このようなタイトルの書物を書かねばならなかったのかを説明したいと思う。

実は、以前、筆者は、次のような一通の電子メールを受け取った。

「はじめまして。私は××大学に在籍する者です。

キリストの十字架に関する質問をしたいのですが、よろしいでしょうか。私は今まで『キリストは十字架で磔になった』とと思っていましたが、インターネットで、次のようなエホバの証人と反論者の対話を見つけました。

エホバの証人：

十字架についてですが、古典（ここが大事）ギリシャ語では、スタウロスという語はまっすぐな杭をさしています。十字架（2つの杭を十字にしたもの）の起源は、西暦3世紀の半ばとされています（バイン著『新約聖書用語解説辞典』参照）。つまり、キリストは十字架の上で死んだわけではないので、エホバの証人の本では、十字架は出てきません（「苦しみの杭」と訳されています）。

反論者：

新世界訳の個性としてなら個人的に許容できます。Liddell & Scott のギリシャ語の辞書には、はつきり『cross』と書かれています。

エホバの証人：

恐らくその辞書は、3世紀以降のスタウロスの訳を、当てていると思います。大事なのは、その当時、つまりイエスがおられた当時です。ことばは時代とともに変わります。ギリシャ語も古代の単語を現代の意味で読むのはどうでしょうか？

では、仮に、「スタウロス」に、16世紀ごろ「星型」という意味がついたとします。どこかの翻訳者が、1世紀にも「星型」という意味で使われていたと勘違いし、使徒5章30節を、「あなた方が星型に掛けて殺したその方をよみがえらせました」と訳したら、信じますか？

同様に、3世紀以降の「十字架」という意味で訳したのならどうですか？

新世界訳はできるだけ厳密に訳しているのです。ギリシャ語といっても、プラトンの時代の古典ギリシャ語と、イエスの時代のコイネーと、現代ギリシャ語では意味、スペル、発音が語によっては、全然違うのです。日本語の比ではないと思います（少なくとも発音は全然違う、まったく別の言語に思えます）。

『十字架（クロス）』と『まっすぐな杭（スタウロス）』のどちらが正しいのでしょうか。普通の聖書の訳は間違っているのですか。ご返答をお待ちしております。

お手紙を受け取り、さっそくお返事しなければ、と思った。しかし、簡単な返事では済まされないことが

すぐ分かったのである。

問題の所在はどこに

実は、このエホバの証人の論述は、ものみの塔聖書冊子協会（以下、協会と略す）が主張していることを正確に反映していない。従って、問題を明らかにするには、まず、協会の主張を正確に紹介し、その上で反論しなければならない。

では、協会の主張とはどのようなものか。詳しくは、本書第一章で紹介する。しかし、とりあえず簡単に説明すると、次のようにまとめられるであろう。

「ギリシャ語のスタウロスという言葉は、古典ギリシャ語においても、コイナーのギリシャ語においても、『十字架』という意味はなく、『まっすぐな杭』を指していた。ところが、四世紀になってから、コンスタンチヌス大帝が異教のシンボルであった十字架をキリスト教に持ち込んだので、キリストが十字架につけられたと信じられるようになった。」

ところが、インターネット上で論じているエホバの証人（以下、証人と略す）は、ギリシャ語を、古典、コイナー、現代の三つに分類し、意味、スペル、発音は変化する場合がある、と発言している。

筆者は、古典ギリシャ語の文献を十年以上にわたって、読んできた者である。従って、この証人のギリシャ語に関する発言には反論したいことがたくさんある。しかし、本題からはずれるので、今は、控えておくが。

さて、論者である証人は、ここで、スタウロスの現代ギリシャ語の意味を問題にしているわけではない。とすると、上記の発言は、古典のスタウロスとコイナーのスタウロスとは意味が違う、と言いたいはずである。とすれば、古典は「杭」で、イエス時代のコイナーは「十字架」と言わなければならない。

しかし、論者である証人が、そのようなことを主張したいわけがない。そのように論じたのでは、論者は自分が否定したいことを主張してしまうことになるからである。

筆者は、上記の発言の意味を解せない。

ひょっとすると、この証人は、3世紀半ば以降のギリシャ語を現代ギリシャ語と考えているのだろうか。そして、スタウロスについては、古典とコイナーの間の相違ではなく、古典及びコイナーと、現代ギリシャ語との間の違いを問題にして論じているのだろうか。

それならそれで、話のつじつまは一応合う。しかし、それでは、3世紀のギリシャ語を現代ギリシャ語に含めなければならなくなってしまふ。しかし、いくらなんでも、論者がそのような誤解をしているとは思えない。

論者の不正確な議論

さらに、この論者は『リデルとスコットの辞書』が「スタウロス」に3世紀の訳語を当てていると思う、と推測している。とんでもない。その辞書は、西暦前1世紀のディオドルス・シルクス、ギリシャの伝記作家プルターク（西暦46-120年）、ギリシャの風刺詩人ルキアノス（西暦120-180年）の用例として、「十字架」を紹介しているのである。決して3世紀の訳語ではない。

加えて、この論者は、バインの『新約聖書用語解説辞典』を基にして、「十字架（2つの杭を十字にしたもの）の起源は、西暦3世紀の半ばとされています」と述べている。

ところが、バインはそのようなことを述べてはいない。バインは、十字架は古代カルディア人に始まった、と解説している。それは西暦前7世紀のことで、論者が主張しているときより、およそ千年も前のことになる。

むしろ、バインの著書が述べていることは、3世紀半ば頃までに、さまざまな形態の十字架のシンボルが、キリスト教会の中に入り込んできた、ということである。

協会は、バインの書物のこの箇所をしばしば引用している。だが、正確に言えば、協会は、このバインの見解を採用しているわけでもない。協会の見解は、およそ100年も遅い、4世紀の半ば近くに、太陽神を崇拝していたコンスタンチヌス大帝が、異教のシンボルであった十字架をキリスト教に持ち込んだ、というものだからである。

協会が主張するこのような珍奇な考えを支持している書物は、実際には、存在しない。

エホバの証人と呼ばれる人々は、通常、協会が教えることをそのまま鵜呑みにしている。しかし、インターネットの論者は、協会が教えていることをそのまま受け取っているようには思えない。多分、協会が説いていることを正確に理解していないのであろう。従って、その論者に反論しても、多くの証人にとっては、無意味な議論を展開していることになる。

むしろ、筆者は、この論者を責めているわけではない。むしろ、何をどのように答えたらよいのか、筆者が戸惑ったことを知っていただきたかっただけである。この種の議論は、問題を正確に把握し、論点を明確にして進めなければならないからである。

証人の方々のほとんどは、ギリシャ語の専門家ではない。また、協会の出版物以外の資料に直接当たることもないであろう。協会の教えに批判的な書物を読むことは、大変勇気のいることであり、ましてや、それを客観的に評価することは、ものみの塔の信仰をもっている人（協会が説く聖書の教理体系をそのまま信じている人）にとっては、至難の業である。だから、筆者は、いかなる証人の方であっても非難する気にはなれない。

証人や研究生の方々に

証人や研究生の方々に、一つだけ、お願いしたいことがある。協会の出版物を読んだだけで、協会が教えている教理を弁護しないでいただきたい、ということである。ぜひ、協会以外の出版物をも読んで、協会が教えていることが、ほんとうに真実なことなのかどうか、調べていただきたいのである。

というのは、協会の主張は聖書を正しく解釈していないことが多く、また、歴史的資料を正確に反映していないからである。

さらに、協会出版物は、権威ある学術的な書物から、自分たちにとって都合がよいように、不誠実な引用を繰り返しているからである。それは、学問の世界では、まったく考えられないほどの「悪引用」である。だから、残念ながら、協会の出版物を読むだけでは、事実を正確に認識することはできない。

ある証人の方が、筆者に、「統治体の兄弟たちは、研究に研究を重ね、調べに調べて、私たちにほんとうに必要なものを提供してくださっています。ですから、私たちエホバの証人は、他の書物を読む必要はないのです。」と話してくれた。そう思い込みたい気持ちは痛いほどよく分かる。でも、それは真実ではない。

そのことは、本書を読み進んでいくうちに分かっていただけだと思う。今そう思っている方も、まず、本書を読んでいただきたい。すべてを読み終えてから、同じ言葉を言えるかどうか、自問していただきたいのである。多分、まったく反対のことを言われるようになるのではないかと思う。

問題にならなかったテーマ

話をはじめに戻そう。筆者は、メールをくださった方に、ものみの塔協会の教えに反論する資料を送ろうと考えた。ところが残念なことに、日本語では、この問題を扱った資料は皆無に等しいことが分かった。

それもそのはずである。「十字架か、杭か」などという問いは、キリスト教世界（エホバの証人が正統的なクリスチャンに使う言葉）の人々にとっては、考えもしないテーマだからである。筆者自身、もし証人の方々と話し合う機会がなかったなら、そのような問いが存在することすら知らなかったであろう。

しかも、たとえ、そのような問題が存在していることを知ったとしても、キリスト教世界の人々は、「十字架でも、杭でも、そんなことはどちらでもいいことではないか」と、一笑に付してしまうと思う。筆者自身も、長い間そうしてきた。

イエスは、全人類の身代りとして、罪を背負ってご自身の命を差し出された。その場所が十字架上であろうと、あるいは、杭の上であろうと、その贖いの意味や効果は変わるわけではない。十字架は、贖いの単なるシンボルにすぎないので、杭でも十字架でもどちらでもよい。これが、キリスト教世界の人々の平均的な反応である。

つまり、「十字架か、杭か」という問いそのものがナンセンスであり、真面目に応答する必要を覚えて来なかったのである。従って、そのような問いを扱った書物は、今のところ、日本語では出版されていない。

協会からの挑戦

では、なぜ、筆者は、「十字架か、杭か」などというテーマを論じる気になったのか。それは、次のような『ものみの塔』誌の文章にぶつかったからである¹。

「あなたがキリスト教国の教会に属しておられるなら、十字架が異教の象徴であるということを教会でお聞きになったことがありますか。もしないとすれば、教会は真実を隠しているのです。そして明白な異教の象徴を崇めるようにすすめていることになります。」

筆者は、四十年以上、キリスト教会の牧師をしてきた。その間、ただの一度も、「十字架が異教の象徴である」と話したことはなかった。この『ものみの塔』誌によれば、筆者は「真実を隠している」ことになる。

これは飛躍した論理であり、言いがかりである。キリスト教世界の人々にとっては、十字架は「異教の象徴」なのではなく、「全人類の贖いの象徴」である。真実を隠しているなどと言われるのは、ひどく心外なことである。

十字架は、キリスト教において、贖いのシンボルである。真のクリスチャンは、その十字架に自分の罪が赦された事実を見る。そこに、神と人が和解できる根拠を見出し、平安に満たされる。人と人との間の隔ての中垣さえ、その十字架によって取り除かれた、という経験を持つ。罪と死は、十字架によって滅ぼされ、サタンに対する決定的な勝利がそこにおいて宣言されたのである。

十字架とは、まぎれもなく信仰の中核をなす出来事なのである。

十字架は偶像礼拝か

しかし、証人たちは反論するであろう。筆者の主張は、背教したキリスト教会の考えであって、聖書の教えではない、と。ほんとうは、どうなのか。ものみの塔協会が教える杭と、キリスト教会が教える十字架と、どちらが正しいのか。

筆者は、証人や研究生の方々に、この問題についてどうしても調べてもらいたかった。もし、このテーマを検証するなら、ものみの塔の信仰の本質について自分で考えはじめるきっかけになるであろう。

さらに、本書執筆の背景として、次のようなもう一つの経験がある。実は、筆者は数年前、証人の方か

¹ 『ものみの塔』1968年5月15日号、317頁。

ら、面と向かってこんなことを言われたことがある。

「十字架は異教に由来しています。それを用いることは背教のしるしです。十字架を信じるということは、偶像崇拜をしていることになるのです。」

筆者は、そう言われたとき、その証人がキリスト教のことをよく知らないため、勝手にそう思い込んでいるにすぎないと思い、聞き流していた。

ところが、それからしばらくして、十字架を見て震え出す何人かの証人たちに出会った。彼らは、十字架は悪霊と関係があると思い、恐れ始めたのである。証人たちは、どうして、十字架に対しあのような異常な怯えを見せるのだろうか。筆者は考え込まざるをえなかった。

そして、証人たちの異常な反応は、ものみの塔協会が、十字架を異教の偶像と結び付けたことに基づいていることが分かった。

「サタンが十字架の中に宿っている」とか、「十字架を通して悪霊が働く」などという言葉も、証人たちから聞かされた。「エホバの証人にとっては、十字架が掲げられているキリスト教の会堂は、イスラム教の寺院や仏教のお寺以上に異教的である」という文章にも出くわした。十字架を何よりもすばらしいものと単純に信じてきた筆者にとっては、思いもかけない出来事だった。

自分の責任を示されて

パウロは、十字架が、ユダヤ人にとってつまずきであると述べている（I コリント 1 章 18 節）。しかし十字架は、エホバの証人にとってもつまずきだったのである。

また、パウロは、十字架に敵対する者が多い、とも述べている（ピリピ 3 章 18 節）。意味がよく分かっていないからとはいえ、エホバの証人の方々もまた同じように、十字架に敵対している人々なのだ。そんな思いにとらわれ、筆者の心は痛んだ。

むろん、その責任は、個々のエホバの証人にあるわけではない。協会のリーダーたちが、十字架に関する奇抜なストーリーを作りあげ、証人たちに教えた結果に他ならない。従って、協会のリーダーこそ、証人たちを欺き、真実を隠している人々なのである。

ものみの塔協会のリーダーたちは、何という不誠実な人々であろう。善良な、誠実に生きようとしている証人たちの無知をよいことに、とんでもない教えを吹き込んでいるのである。筆者は、ぶつけようのない怒りを彼らに覚えた。

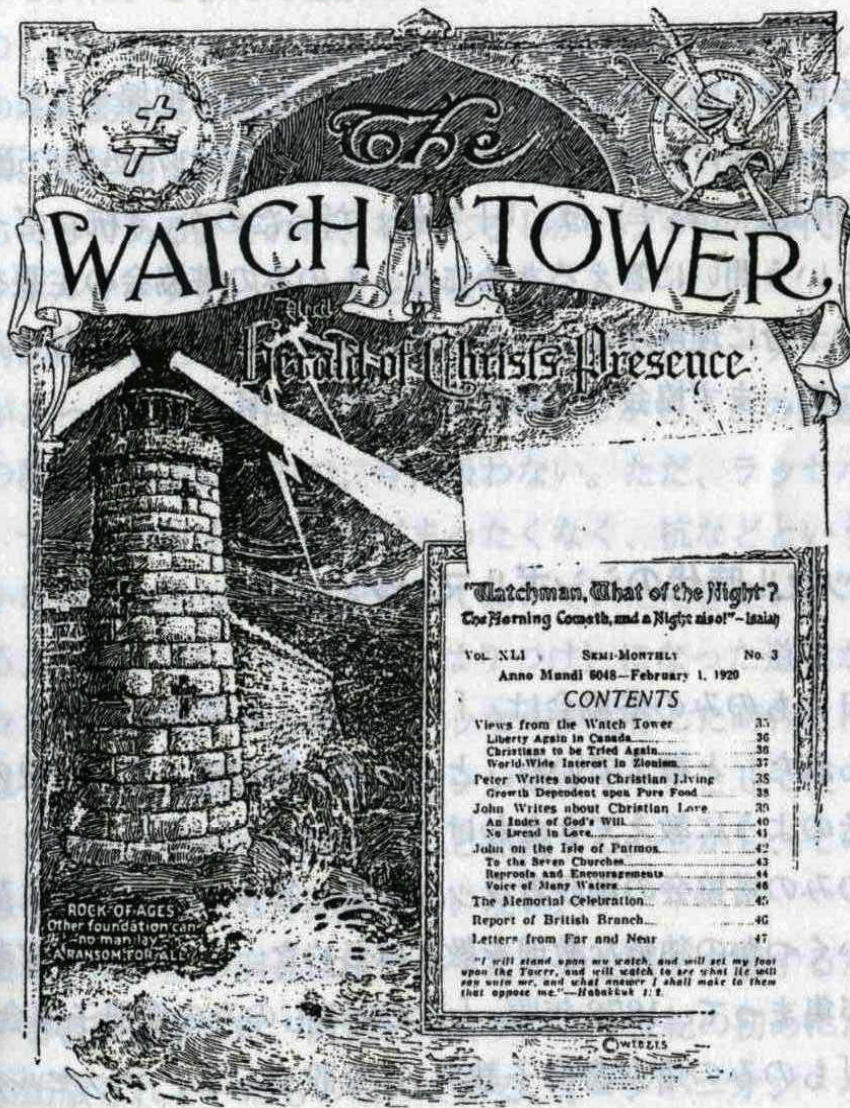
しかし、もう一つの語りかけが、筆者の心に響いてきた。責任を他人に転嫁するだけでよいのか。あなた（筆者自身のこと）は、真実を明らかにするためにどれだけの努力をしたのか、と。

そのような声に強く促され、ペンを執りはじめた。20～30 頁のつもりが、200 頁近い大部のものになってしまった。お許しいただきたいと思う。

最後に、本書を執筆している間中、心に浮かんできた聖書の言葉を紹介させていただく。読者の皆様も、その言葉を心にとめ、祈り心で本書を読んでいただけたらと思う。

「これらのことを人々に思いさせなさい。そして何の益にもならず、聞いている人々を滅ぼすことになるような、ことばについての論争などしないように、神の御前できびしく命じなさい。」

（II テモテ 2 章 14 節）



左上の「十字架と黄金の冠」のサインは1931年までの『ものみの塔』誌の表紙に掲げられていた。

第一章 協会の主張

ある問題を論じるには、問題の所在を正確に把握することからスタートしなければならない。イエスが掛けられた処刑の道具（以下、「刑具」と略す）は、「十字架」だったのか、「杭」だったのか、という問いに答えるためには、ものみの塔協会の主張を、正確かつ十分に理解するところから始めなければならない。そこで、まず協会の主張を検証することにしよう。

1. ラッセル時代のシンボルマーク

今日のものみの塔協会は、「イエスは、十字架ではなく、杭にかけられた」と教えている。ところが、協会は、その歴史の初めからそのように教えてきたわけではない。

ものみの塔協会の創設者ラッセルは、独自の聖書解釈に基づいて、いくつかの独特な教理を教え始めた。その教えを信奉する人々が集まって、1878年頃、「シオンのものみの塔冊子協会」（今日の「ものみの塔聖書冊子協会」）を設立した。ラッセルが26才のときであった。

十字架がシンボルマーク

ラッセルは、キリスト教会が教えなかった教理を数多く説いた。しかし、イエスの刑具が「十字架」だったことを疑うようなことは一度もなかった。彼は、たくさんの説教、論文、聖書の注釈書を残している。今は、それらの資料をCD-ROMで検証することができる。それらのどれ一つをとってみても、イエスが「杭」にかけられた、と教えた箇所はない。

そのCD-ROMにおいては、ラッセルの時代に発行された『ものみの塔』誌を見ることができる。驚くべきことに、それらの表紙には、冠に囲まれた十字架が描かれているのだ（22頁参照）。しかも毎号である。それは、そのしるしが、ラッセル時代の協会のシンボルマークだったことを意味する。

専門的研究者たちは、そのシンボルマークがフリーメーソンと関係があったことを明らかにしている²。しかし、この問題は、本書の論題からそれるので、今は扱わない。ただ、ラッセル時代には、十字架に対する疑いなどまったくなく、杭などという考えは、かけらもなかったことを知っておいていただきたい。

ある人々は、「イエスが釘磔（磔）になった道具が杭であったという考えそのものが、ラッセルが生存した時代にはなかったはずだから、協会が十字架をシンボルマークとして使ったことは、責められるべきではない」と弁護する。しかし、そのような人は事の全容を正しく認識していない。

協会が、イエスの刑具は杭であったとの主張を弁護するために引用する書物の多くは、前世紀の終りから今世紀の初めにかけて、すでに出版されていたものなのである。『コンパニオン・バイブル』しかり。バイブンの『新約聖書用語解説辞典』もまた、しかりである。むろん、彼らの説は、当時の人々の間ではほとんど受け入れられてはいなかったが。

協会の教えとの矛盾

このことは、協会が教えている一つの教理に照らしてみると、大きな矛盾を露呈する。

実は、協会は、「イエスは、1914年に天に王として臨在され、1918年頃、地上のすべての宗教団体を調べて、ものみの塔協会だけを『清い、唯一の神の組織』と是認した」と教えている。

もし、この教えが真実であるなら、イエスは、異教に起源をもつ十字架をシンボルマークに使っていた

² このことについては、Fritz Springmeier、The Watchtower & the Mason、(Portland, 1992) に詳しい。

ものみの塔聖書冊子協会を是認したことになる。これは、とてもおかしなことである。

むろん、十字架だけの問題ではない。当時の協会は、クリスマス祝っていたし、輸血も禁じていなかった。ハルマゲドンの日を予測するのに、エジプトのピラミッドを測って、そこから推測していた。

もし、あなたがエホバの証人であるなら、ちょっと考えていただきたい。ラッセル時代のエホバの証人を、あなたは、十字架を偶像崇拝していた人々、と断罪するだろうか。

多分、しないと思う。たとえ、当時の『ものみの塔』誌の表紙に、「十字架」がシンボルマークとして描かれていたとしても、そのことを取り上げ、当時のエホバの証人を偶像崇拝者呼ばわりすることはないであろう。

もし、そうであるなら、現在のキリスト教世界の人々に対しても、同じ態度をとるべきではないだろうか。十字架に限ってのことではあるが、ラッセル時代のエホバの証人と、現在のキリスト教世界の間には、何一つ違いはないのだから。従って、現代のキリスト教会だけを偶像崇拝者呼ばわりするのは、フェアではない。

2. ラザフォードによる変更

協会の創設者ラッセルが 1916 年に死亡すると、ラザフォードが二代目の会長に就任した。1918 年のことである。ラザフォードは、会長になってから、最初の十年間は、十字架について、何の疑問ももっていなかった。

十字架だった時代

ラザフォードは、1920 年に、『神の立琴』という書物を出版している。その第六章は、「贖い」というテーマを扱っている。その章の初めには、十字架にかけられたイエスの絵が掲載されている。それは実に見事な絵で、本書の 11 頁に紹介したものである。

11 頁の絵をもう一度じっくり見ていただきたい。あなたは、それが、協会の出版物に掲載された絵であるなどと、信じるのができないかも知れない。

この絵を証人に見せると、大抵の証人は、筆者が協会以外の出版物から抜いてきて挿入した偽物だと疑う。今日のエホバの証人には、それほど信じ難い絵なのである。そんな疑いをもつ方には、いつでも現物をお見せしよう。

では協会は、いつ頃から、十字架ではなく、杭だと言いだめたのか。それは 1930 年代に入ってからである。1975 年の年鑑は、次の三つのことを記述している³。

1928 年のデトロイトの大会において、「十字架と冠の表象は不必要なばかりか好ましくないことが示された。」

1931 年の 10 月 15 日号の『ものみの塔』誌の表紙から、十字架と冠の表象が外された。

1936 年に出版された『富』という書物において、初めてイエスが杭にかけられたことが明らかにされた。

協会は、50 年以上にわたって、十字架をシンボルマークに使ってきた。従って、それをいきなり変えるわけにはいかない。注意深くことを進めなければならないのだ。そこで、まず、十字架のシンボルマークがふさわしくないことが示された、と言っておく。そして、3 年後に、そのシンボルマークを外す。それから 5 年後に、実は杭だった、と教えはじめたのである。

10 年近くの年月をかけ、協会は、慎重に慎重に、十字架から杭に変更していったのである。

³ 『ものみの塔 1975 年年鑑』、148 頁。

杭への変更

ものみの塔協会が、イエスの刑具が十字架ではなく、杭であると主張するようになったのは、1936年以降である。この点については、最近の『ものみの塔』誌も、次のように確認している⁴。

「協会が1936年に発行した『富』と題する本は、イエス・キリストが十字架ではなく、一本のまっすぐな棒杭もしくは杭に掛けられて処刑された、ということをはっきり述べました。」

筆者の手元に、日本語に翻訳された『富』という書物がある。その26頁には、次のように記されている。

「然らば、何故にイエスは木に釘づけられたのであろうか。イエスは二本の材木の交差した所謂『十字架』の上に釘づけられたのではなかった。人間が考案して拝んでいる偶像絵画に示されてあるような十字形のもではなかったのである。身体は木の上に釘づけられたのである。」

よく考えてみれば、エホバ神は、キリスト教会が始まって以来、1800年近くも、偶像崇拜する神の民を正さなかったことになる。ものみの塔協会がはじまってから数えても、1876年から1936年までの60年間、エホバ神は、異教のシンボルの十字架を使うのを放っておかれたことになる。

おかしい話ではないか。

輸血についても同じことである。1940年代まで、協会は、輸血を禁止するどころか、推奨していた。ところが、50年代に入ると突然、輸血禁止という教理を言い始める⁵。創世記のノア時代から輸血を禁止していたのであれば、エホバ神は、どうしてそのときまで、神のみ旨を示さなかったのだろうか。まったく不可解である。

3. 変更した歴史的事情

1870年代の半ばに始まったものみの塔聖書冊子協会というグループは、今日では120年の歴史を持つことになる。その最初の半分の期間は、杭ではなく、十字架を信じてきた。今日の協会の判断によれば、1930年頃までのエホバの証人たちは、異教に起源を有する崇拜物をシンボルに掲げ、十戒の二戒を破った偶像崇拜者たちのグループということになる。

なぜ神は沈黙しているのか

信仰の根幹に関わる重要なことを、エホバ神は、ずいぶん長い間放置しておかれたものだ。もし、エホバ神が、ラッセルたちの聖書研究グループをご自身の唯一の伝達経路に選ばれたというのであれば、最初に、十字架の問題に触れるはずではないだろうか。なぜなら、偶像崇拜は十戒の最初の戒めであり、神の民に対して、神は絶対に許されないからである。

もし、神が、協会が言うように、間違いを正すために「新しい光」を送るのであれば（教理を変更するとき、証人たちは、このように教えられる）、最初に、十字架の問題に光を当てるのではないだろうか。証人たちを異教の偶像から切り離させるのに、なぜ60年もの長い年月を要したのだろうか。

協会がよく引用する『コンパニオン・バイブル (Companion Bible)』は、その付録の中に、イエスの刑具は十字架ではなく杭だった、と述べている。その書物は、1885年、ロンドンにおいて出版された。ものみの塔協会に「新しい光」が照る50年も昔のことである。

また、協会が自説を弁証するため引用するバインの『新約聖書用語解説辞典』も、今世紀の初頭から5冊に分けられ、順次出版されていた。ものみの塔協会に「新しい光」が照る30年以上も昔のことである。

⁴ 『ものみの塔』1995年5月15日号、20頁。

⁵ 輸血の問題については、拙著『輸血拒否の謎』（いのちのことば社、1999年）を参照せよ。

このような書物はいずれも、専門家を対象としたものではなく、一般の読者のために用意されたものである。それは、聖書研究をするのに、大変ポピュラーな参考書だった。従って、誰でも手にすることができる書物だった。

むろん、聖書学者、歴史学者、言語学者の中で、十字架に関する説明部分に賛成する専門家はほとんど現れなかった。ほとんど、と言うより、筆者が知る限りでは、一人もいないと断言してよい。

賛成者が現われなかったのは、伝統的な見解と異なるからだ、ということではない。現代のギリシャ語学者は、歴史的資料を厳密に検証しつつ結論を出しているのであって、キリスト教信仰に影響されて判断するようなことはしないからである。

ラッセルたちは知っていた？

ところで、『コンパニオン・バイブル』や『バインの辞書』は、当時誰でも手にすることができたものであり、ラッセルやラザフォードが知らなかった、とは考えにくい。ラッセルが多読家だったことは有名である。筆者自身は、彼が残しているたくさんの著述を読んで、上記の書物をも知っていたと推測している。むしろラッセルは、十字架に関するこれらの書物の主張を知ってはいたが、相手にしなかった、ということではないかと思う。

ラザフォードについても同じことが言えると思う。彼は、「十字架は好ましいものではない」と示された年を、1928年としている。それより前から、上記の書物に接してはいたが、十字架に関する部分については、その主張を無視してきたのではないだろうか。あるいは、1928年頃、上記のような書物に接し、十字架説を廃止し、杭説を主張しはじめるようになったのかも知れない。

むろん、ラッセルの場合も、ラザフォードの場合も、沈黙からの議論であって、正確なことは分からない。ただ、重要なことは、ラッセルやラザフォードが十字架を信奉している間も、キリスト教世界の聖書研究者の中には、イエスの刑具が杭だったと主張している人たちがいた、ということである。多分、そのような人々は少数派であり、専門家の間では評価されなかった、と断っておかなければならないけれども。

変更の背景の出来事

ところで、一番大切なことは、どうして、ラザフォードが、1930年代前後になって、十字架から杭に変更したのか、ということである。

手元にある資料から、筆者は、その背景を次のように推測してみた。必要であれば、ここに述べたことに関する参考資料をお送りする。ご自分で筆者の推測を検証していただきたい。

まず、1916年にラッセルが死ぬと、協会内部に主導権争いが表面化した。

ラッセルは生前、遺書をしたため、五人のメンバーによる委員会制で、雑誌を発行し、組織を運営していくよう指示していた⁶。ところが、組織内部に激しい権力闘争が起こり、警察まで導入された。そのような中で、遺書の中の序列では、第七番目に位置していたラザフォードが会長に就任し、実権を握っていく。会長に就任したラザフォードは、20年代の初めまでに、彼に反対する人々を次々と追放し、協会全体を掌握した。彼は、それまでの苦い経験を踏まえ、弁護士の知識を用いて鉄の組織を作ることに専念した。組織を引き締めるために、何冊かの新しい書物を出版し、1923年には種痘禁止の教義を打ち出し(これは、52年に解除された)、組織内部を統制していった。

さらに、1925年に世の終りが来る、と予言した。

⁶ 『チャールズ・ティズ・ラッセルの意思と遺言』(1997年、新世界訳研究会)参照。

この1925年という年は、ラザフォードにとって、きわめて重要な年だった。というのは、ラッセルは、1874年にキリストが臨在され、1914年にハルマゲドンが来ると信じていた。ところが、このラッセルの予言は成就しなかった。その結果、当時の協会の中には、大きな混乱が生じた。

そこでラザフォードは、イスラエルが約束の地に入ったと考えられていた年から数えて70回目のヨベルの年は、1925年である、と言いはじめた⁷。そして、その年に、アブラハム、イサク、ダビデなど旧約聖書の義人たちが復活してくる、と主張したのである。

しかも協会は、そのような旧約聖書の聖徒たちの復活に備え、彼らの住居として、「ベッサリムの家」と言われる邸宅まで準備した。その家は、現在他人の手に渡っているが、今でもカリフォルニア州のサンディエゴに存在する⁸。

1925年が到来した。そして、何事も起こらずにその年が過ぎ去った。証人たちの期待は裏切られ、誰も復活してこない現実に失望した。ここに至って、ラザフォードは、教理を整備する必要を余儀なくされた。そこで、ラザフォードは、1874年のキリスト臨在説を破棄し、ラッセルがハルマゲドンと信じた1914年をキリストの臨在の年に変更したのである。

さらにラザフォードは、証人たちの失望と落胆の矛先を他に向ける必要があった。そのターゲットになったのがキリスト教世界だったのである。

実は、ラザフォードは、その時より数年前、1917年から18年にかけて投獄されている。その背後には、キリスト教世界の僧職者階級の陰謀があった、と考えていた。その時以来、ラザフォードは、キリスト教世界に対し、激しい憎悪の感情を持つ。そこで、証人たちの不満の感情をキリスト教世界に向けさせ、キリスト教世界を徹底的に攻撃し始めたのである。

協会の攻撃が効果的であるためには、キリスト教世界を背教者に仕立てる必要があった。そこで、ラザフォードが持ち出したのが、キリスト教会のシンボル十字架だった。彼は、十字架は異教に由来するものと激しく攻撃したのである。その他にも、クリスマスを祝うことや、エホバという神の名前を使わないことなどを槍玉に挙げた。

このようにして、ラザフォードは、キリスト教の背教性を指摘し、ものみの塔協会のみが「神の唯一の清い組織」であることを認識させようとしたのである。

その試みは、少なくとも組織の内部においては成功した。組織のカルト化という大きな危険を抱えながらではあったが。

仮説の検証を

以上のような状況が、「イエスは十字架ではなく、杭にかけられた」と協会が主張するようになった背景である。

むろん、これは筆者の歴史解釈である。だが、それを背教者の解釈と即断し、拒否しないでいただきたい。筆者としては、「十字架か、杭か」という問題の起こりを歴史的にたどってみたいと願って、少々の洞察力を働かせてまとめてみた。通常の学問的センスをもって読んでいただくなら、検証されるべき仮説として、十分論議していただける内容だと思う。

組織は、それがどんな組織であれ、組織が教えたい歴史を持っているものである。それは当然のことであって、それはそれでよい。しかし、組織が教える内部の歴史は大抵、不都合なことを払拭してある。

⁷ 『エホバの証人－神の王国をふれ告げる人々』、632頁。

⁸ これについては、Edmond C. Gruss、*Jehovah's Witnesses - Their Monuments to False Prophecy*、(Witness, Inc、1997) に詳しく紹介されている。

残念ながら、ものみの塔協会も例外ではない。協会は数年前、『エホバの証人—王国をふれ告げる人々』という協会の歴史をまとめた書物を出版した。証人たちは、分厚く、立派に装丁されているその書物を見て、組織の歴史が正確に記述されている、と思い込んでしまう。しかし、それは欺かれているだけである。

その書物は、組織にとって不都合なことはほとんど触れていない。否、正確に言えば、外部のものみの塔研究者が、協会の教義や信仰に関して、さまざまな問題点を指摘するので、それに弁明できるように、いろいろな詭弁を加えながら記述した「組織の弁解書」なのである。

『エホバの証人—王国をふれ告げる人々』は、証人たちの信仰を守るために出版された、内部向けの、組織の防衛と宣伝を目的とした本である。その書物だけを基にして、筆者の仮説を判断しないでいただきたい。その書物では、ものみの塔のほんとうの歴史はつかめないからである⁹。

4. 協会が展開する論理

1930年代後半から、イエスは、十字架ではなく杭にかけられた、と協会は主張するようになった。それによって、協会の出版物は、40頁にあるような絵を掲載するようになった。そのように変更することによって、協会は何を訴えたかったのだろうか。

変更する真の意図

協会は、単に歴史的な事実を問題にしようとしているだけではない。もっともっと深い意味がある。十字架の中に含まれている（と、ものみの塔協会が考える）宗教的な意味合いを問題にしているのである。

その点について、『ものみの塔』は次のように説明している¹⁰。

「したがって、24ページに掲載されているような、イエスの死を描いた当協会の出版物の絵は、解剖学上の絶対的な主張ではなく、道理にかなった芸術的な解釈にすぎないことが分かります。こうした絵に、学者の変わりやすく矛盾した意見を取り入れる必要はありません。また当協会の出版物の絵は、古代の異教に由来する宗教的な印象をきっぱり退けています。」

ここで「24ページに掲載されている」絵とは、本書の40頁に掲載されている絵のことである。その杭につけられたイエスの絵は、「古代の異教に由来する宗教的な印象」を払拭していると、ここには記述されている。そのことこそが、ラザフォード以来、協会が問題にし続けてきたポイントなのである。

お分かりいただけたでしょうか。ラザフォードは、単に歴史的観点から、イエスがかけられたのは十字架ではなく杭だった、と主張し始めたわけではない。キリスト教のシンボルとして普及している十字架が、異教に由来することを公言し、キリスト教世界を背教者のグループ、偶像を拝む人々、と糾弾することに真の目的があったのである。

聖書を勝手に利用して

協会は、普通の人々が普通に聖書を読んだだけでは思いもつかない考えを、聖書の中に読み込む。本来関係のないあちこちの聖句をつなぎ合わせ、適当な理屈をつけてものみの塔の立派な教義を作りあげてしまう。地上に樂園が来ること、小さな群れと呼ばれる144,000人だけが天に行くこと、忠実で思慮深い奴隷級と言われる統治体、新約聖書にもエホバという神名が237回出てくると、人類は輸血禁止の戒律を守らねばならないこと、などなどである。

⁹ 筆者は、機会があれば、『エホバの証人—神の王国をふれ告げる人々』について詳しく論じた書物を著わしたいと思っている。

¹⁰ 『ものみの塔』1987年8月15日号、29頁。

そのような教えは、聖書を読んだだけでは出てこない。組織が聖書の中に読み込んだ独特な教理だからである。それは、いくつかの特定の聖句に突拍子もない解釈を施し、勝手な論理を使いながら、作りあげたものである。

協会が、「キリスト教会はイエスが十字架にかけられたと信じているが、それは異教に由来するシンボルを拝んでいることであり、偶像崇拜になる」と主張しているのも、まったく同じ論理である。

十字架を偶像として拝んでいる人など、筆者の周囲には、一人もいない。それは、証人の方がキリスト教世界の人々を観察するなら、すぐ気づくはずである。実際、組織を出て、ものみの塔協会の教義全体を調べ直す人は、協会がキリスト教世界について教えていることが現実とまったくかけ離れていることを知って驚くのである。

しかし、協会の中において、組織の内側から外の世界を見る人は、ものみの塔流の情報処理の仕方（思考の枠組み）が脳裏に深く刻み込まれているので、現実をありのまま見ることができない。組織の教えというフィルターを通して情報を収集し、それに基づいて現実を解釈してしまうからである。このような状況を、一般の人はマインド・コントロールと言っているのである。

偶像崇拜者に関する論理

では、協会は、どのような理屈を重ねることによって、十字架を信じるキリスト教世界を異教の偶像崇拜者に仕立てていくのか。その論理を紹介しよう。

信頼できる聖書辞典によれば、「十字架」と訳されている「スタウロス」というギリシャ語には、もともと「杭」という意味があった。

イエスは一本の杭にかけられた。

イエスがかけられた刑具を指しているもう一つの言葉として、新約聖書は「クシュロン」というギリシャ語を使用している。その「クシュロン」は「木」を意味するので、「スタウロス」は一本の杭であったことが確証される。一方、十字架は、古来からいろいろな地方で、異教の信仰を表すシンボルとして用いられてきた。4世紀のコンスタンチヌス大帝は太陽崇拝者であったが、異教のシンボルだった十字架をキリスト教の中に持ち込んだ。その結果、キリスト教世界は、十字架を崇拝する背教的なグループに墮した。

ものみの塔協会は、以上のようなプロセスを経て、キリスト教世界が、イエスの刑具は十字架であると信じるようになったと教えている。もし、この種の問題に何の予備知識もなければ、ここで展開されている協会の論理は、もっともらしく聞こえるであろう。しかし、それは、真理を一部含んだ情報を巧みに操作して作り出した「ストーリー」なのである。

部分的な真理

ストーリーは、たとえフィクションであったとしても、いくぶんかの真理を含んでいるものである。すべてが間違った情報ばかりでは、ストーリーにならない。協会が、イエスは杭につけられたと言うとき、それは全体として間違っているが、その論理を組み立てていく過程においては、部分的真理が活用されている。その部分的真理を、まず指摘しておこう。

例外的ではあるが、キリスト教世界の出版物の中にも、キリストが杭にかけられたと主張している書物は存在する。ギリシャ語の「スタウロス」という言葉は、もともと一本の棒という意味で使われていた。イエスの刑具について、新約聖書の5箇所において「クシュロン」というギリシャ語が使われているが、その言葉は、もともと「木」を意味していた。

十字架と関わりがある図柄は、古代から、いろいろな地方で、異教の信仰のシンボルとして用いられてい

た可能性がある。2世紀のキリスト者たちは、ユダヤ教を背景にしていたこともあって、偶像と誤解されるような像を作ることは避けようとした。4世紀以降、キリスト者の間には、十字架がさまざまに装飾されるようになり、キリスト教のシンボルとして採用されるようになった。

不確かな真理

しかし、協会の主張には、不正確な情報も含まれている。では、どのようなことが問題なのか、指摘しておこう。

まず、コンパニオン・バイブルであれ、パインの辞書であれ、「スタウロス」というギリシャ語の説明部分は、今日の専門家によって認められている見解ではない、ということである。協会が引用する書物の見解は、最近の（20世紀後半の）一般に権威を認められている辞典類においては見出すことのできない少数意見である（むろん、少数意見であるから真実ではない、ということではない。真実である場合もあるし、そうでない場合もある。少数意見である場合には、注意深く慎重に検証される必要がある、と言いたいだけである）。権威ある辞書はすべて（私が調べた限りでは、文字どおりすべて）、「スタウロス」は、もともとは一本の棒として使われていたが、イエス時代のローマ世界においては、伝統的な形態の「十字架」という刑具に対して使われていたことを明らかにしている。

ギリシャ語「クシュロン」は、もともと「木」を意味したが、木で造られたさまざまなものに対しても使われるようになった（従って、十字架を指すことも可能であった）。

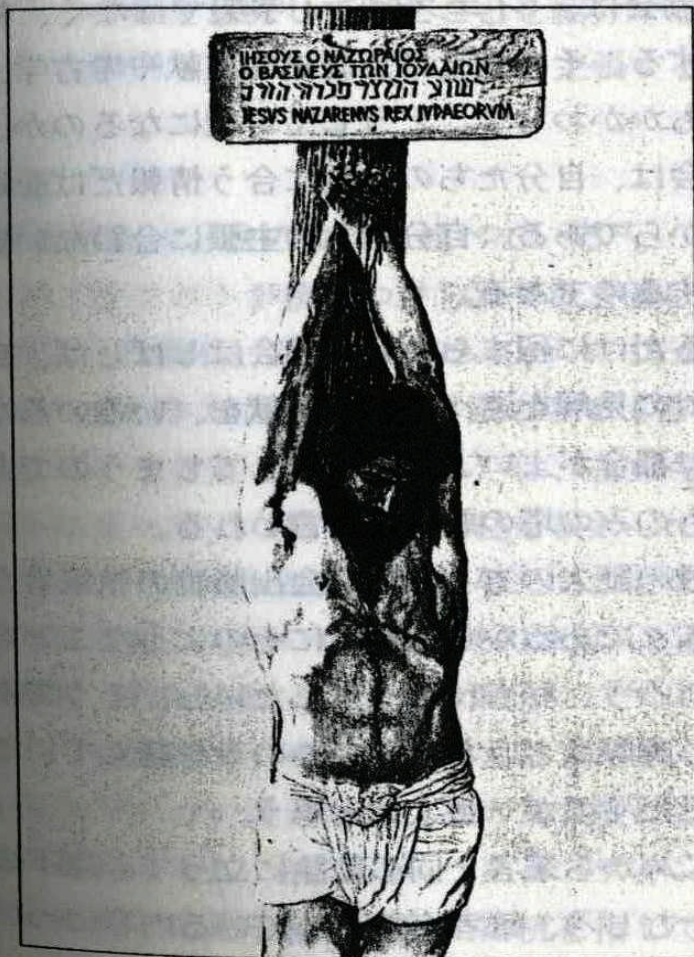
ヘブライ語には、十字架に当たる言葉はなく、十字架については「エイツ（木）」という言葉に含ませていた。七十人訳ギリシャ語旧約聖書は、その「エイツ」というヘブライ語に「クシュロン」という訳語を当てた。その結果、ユダヤ人がギリシャ語を使った場合、十字架を「クシュロン」というギリシャ語で表した。1世紀から3世紀にかけての教父たちの文書には、イエスの刑具は一本の杭ではなく、伝統的な十字架の形態でなければ理解できない文章がたくさん登場する。

考古学的な発見は、イエスの刑具が一本の杭であるというより、伝統的な十字架の形態であったことを示唆している。キリスト者が十字架をキリスト教のシンボルとして導入したのは、異教の信仰に妥協したことによるのではなく、キリストの死を重要視した結果である。コンスタンチヌス大帝は、十字架刑をキリスト教の信仰から見てふさわしくないものと判断し、ローマ帝国の中では、十字架による処刑を廃止した。

ものみの塔協会は、真理を含んだ情報の一部を、自分たちに都合よく使って、その教えを組み立てている。自説に合わない情報については、反証しないだけでなく、紹介すらせず、一切を無視する。これでは、正確な歴史記述を期待することはできない。

歴史上の出来事を正しく認識するためには、その出来事と関わりのあるすべての情報を考慮しなければならない。決して、自説に都合のよい情報だけを集めるようなことをしてはならない。

さらに、どのような資料であっても、その資料的な価値を一つ一つ評価してから、歴史の再構築を試みなければならない。歴史的資料は、ある歴史的な背景があって生まれてきたものである。そのまま鵜呑みにして利用してはならない。歴史を描こうとする人は、すべての資料を検証し、それぞれにふさわしい評価をし、全体像の中に位置づけて用いなければならない。ところが、ものみの塔協会の出版物は、このような基本的なルールを守っていない。次章において、この問題を扱うことにしよう。



『ものみの塔』誌 1987年8月15日号 24頁より

第二章 協会の詭弁

ものみの塔協会は、「イエスは、十字架ではなく、杭に掛けられた」と主張する。その教えは、歴史的文献や考古学上の発見と合致しないにもかかわらず、どうして可能になるのか。答えは簡単である。協会は、自分たちの主張に合う情報だけを取捨選択して論じているからである。自分たちの主張に合わない資料については一切無視するのである。

否、無視するだけに留まらない。協会はしばしば、自分たちの主張とは正反対の見解を述べている文献を、いろいろな工夫をして、自分たちに都合がよいように引用してしまうのである。それは、一般に、ものみの塔の悪引用と言われる。

むろん、一般の証人の方々は、協会出版物の執筆者たちは、神に油注がれた人々であるから、絶対にそのようなことをしない、と弁護するであろう。私も、そう信じたいし、そうであってほしい。はたして、実際はどうなのか。この章を読んで、ご自分で結論を出していただくのが一番よいと思う。

読者は、初めから筆者と同じ結論に立って、以下の論述を読む必要はない。むしろ、筆者が記述している内容について疑いを持ち、一つ一つ反論しながら、読み進んでいただきたい。その結果、本書の著者がいいかげんな発言をしていると思われたなら、ぜひご一報いただきたい。筆者は、どのような批判を受けても、喜んで、検討させていただく。そして、もし、読者の反論が正しいなら、筆者の見解を撤回する。それは当然の務めである。

1. スタウロスについて

協会は、「スタウロス」というギリシャ語が、古典ギリシャ語において、一本の杭を意味していたことを紹介する。そして、聖書の著者たちの用例も同じものだった、と主張する。

協会の利用法

例えば、『洞察』は、次のように述べている¹¹。

「イエス・キリストが杭につけられて死を遂げた際に用いられたような刑具。(マタ 27:32-40;マル 15:21-30;ルカ 23:26;ヨハ 19:17-19、25) 新世界訳の中で『苦しみの杭』と訳されている言葉(スタウロス)は、古典ギリシャ語ではおもにまっすぐな杭もしくは柱を表わしており、クリスチャン・ギリシャ語聖書の筆者たちがこの語を横木の付いた杭を指して用いた証拠はありません。『杭につける』; 行間、1149-1151 ページを参照。」

この文章の「古典ギリシャ語ではおもにまっすぐな杭もしくは柱を表わしており」という部分は、そのまま受けとってよい(この点は、後に確認する)。ところが、「クリスチャン・ギリシャ語聖書の筆者たちがこの語を横木の付いた杭を指して用いた証拠はありません」というのは、言い過ぎである。

イエスが、ローマの総督ポンテオ・ピラトのもとで処刑されたことは、イエスはローマの処刑法に基づいて処刑された、ということである。イエス時代のローマ帝国における「スタウロス」は古典時代のスタウロスと同じである、との前提に立てば、『洞察』の論述は正しい。しかし、その前提は間違っている。古典ギリシャ語の用例から、イエスの刑具の形態を推測するのは、歴史文献の正しい読み方ではない(このことは第六章で詳述する)。

¹¹ 『洞察』第一巻、812頁。

同じことは、『ものみの塔』の次の論述についても、言うことができる¹²。

「聖書によると、イエスが処刑されたのは伝統的な十字架の上ではなく、一本の単純な杭、すなわちスタウロスの上でした。マタイ 27 章 40 節に出ているこのギリシャ語は、基本的には建物の土台に使われるような、まっすぐな普通の梁材あるいは柱を意味しています。したがって、十字架は決して真のキリスト教を表わすものではありません。」

スタウロスとは、確かに、古典ギリシャ語において、「建物の土台に使われるような、まっすぐな普通の梁材あるいは柱」という意味で使われている例がある。しかし、イエス時代のローマ帝国における刑具に関して言えば、そうではないケースがほとんどだった¹³。ところが、この記事は、古典ギリシャ語の用例がイエス時代においても一般的であったかのような前提に立って、記述している。

間違った論理展開

加えて、「したがって、十字架は決して真のキリスト教を表わすものではありません」という結論の部分は、論理に飛躍がある。「したがって」という言葉は、二重の意味において正しい用法ではない。

まず、直前に言及されているギリシャ語スタウロスの基本的な意味は、「十字架が真のキリスト教を表わす」かどうかということとは関係がない。だから、この文章において、「したがって」という接続詞は不正確である。

さらに、この論述は、「十字架が真のキリスト教を表わす」と主張している人が存在することを前として初めて意味がある。しかし、実際には、そのような人はいない。

筆者は、クリスチャンになって以来、この 40 年間に、実にたくさんのキリスト教世界のキリスト者に出会ってきた。けれども、協会が主張するような意味で「十字架が真のキリスト教を表わす」と述べたり、考えている人に出会ったことはない。そのように考えている人がいるとの仮定は、協会の出版物中に存在するだけである。実際には存在しないものを論じ、それを否定したところで、それはまったく意味がないことである。

『新聖書辞典』の引用

協会は、スタウロスの語義が杭であったことを、繰り返し強調する。例えば、『目ざめよ！』は、権威ある辞書として認められている『新聖書辞典』を引き合いに出しながら、次のように述べている¹⁴。

『新聖書辞典』はこう述べています。『十字架を表わすギリシャ語（スタウロス、動詞はスタウロオー）は第一義的には、まっすぐな杭あるいは梁を意味し、第二義的には、処罰を加え処刑をする際の道具として用いられる杭を意味する』。

『洞察』もまた、『新聖書辞典』を引用して次のように述べている¹⁵。

「しかし、聖書の当の筆者たちはこれらの点に関してどんなことを述べていますか。彼らはギリシャ語の名詞スタウロス（スタウロス）を 27 回、動詞のスタウロオー（スタウロオー）を 46 回、シェンスタウロオー（接頭辞シェン、『と共に』の意）を 5 回、またアナスタウロオー（アナ、『再び』の意）を 1 回使いました。また、イエスが釘付けにされた刑具を指すのに、『木』を意味するクシュロンというギリシャ語を 5 回用いました。古典ギリシャ語でも、コイネーでも、スタウロスには 2 本の材木で作られた”十字架”という考

¹² 『ものみの塔』1992 年 11 月 15 日号、7 頁。

¹³ 本書 148-156 頁参照。

¹⁴ 『目ざめよ！』1984 年 9 月 22 日号、14 頁。

¹⁵ 『洞察』第一巻、783 頁。

えは含まれていません。それは、柵、柵、もしくはとがり杭の柵に使われるような、まっすぐな杭、棒、パイプ、または柱を意味しているにすぎません。ダグラス編、1985年版、新聖書辞典は、253ページの『十字架』の項で、『「十字架」に相当するギリシャ語（スタウロス；動詞スタウロオー・・・）は第一に、まっすぐな杭もしくは梁材を意味し、第二に刑罰や処刑のための道具として使われた杭を意味する』と述べています。」

悪引用の証拠

まず、以上の『目ざめよ！』および『洞察』の文章を、あなたのご家族や友人に読んでもらってほしい。そして、その方々に、ここに紹介されている『新聖書辞典』は、イエスが杭につけられたと教えているのか、それとも、十字架につけられたと教えているのか、と尋ねていただきたい。

多分、あなたが尋ねた人々は、「その辞典は、イエスのスタウロスが杭であったと教えている」と、答えるはずである。

しかし、それは正しい答えだろうか。とんでもない。『新聖書辞典』はそのようなことを教えていない。まったく反対のことを教えているのである。

実は、この聖書辞典は、『目ざめよ！』および『洞察』が引用している文章の後で、次のように述べている¹⁶。よく読んでいただきたい。

「十字架の磔刑は、フェニキヤ人やカルタゴ人によって行われていた。後になると、ローマ人によって広範囲に実施されるようになった。ローマ市民には稀で、奴隷、地方や下層階級の犯罪人がこの十字架刑にかけられた。従って、ペテロは、イエスのように磔になったが、パウロは打ち首にされたという伝承は、古代の処刑方法に合致している。」

つまり、この『新聖書辞典』は、ローマにおいては、十字架刑は下層階級の犯罪人に対して用いられ、イエスも、ペテロもその中に含まれていた、と述べているのである。

さらに、同『新聖書辞典』は、続けて次のように述べている。

「犯罪者は一本のまっすぐ伸びた柱に縛られた、あるいは釘づけられたということの他に、三つの形態の十字架があった。まず、大文字Tの形態をした *crux commissar*（聖アントニオの十字架）と言われるもので、ある人々は、タンムズの神の象徴（タウという文字）から出てきたと考えている。次は、*crux decussata*（聖アンデレの十字架）で、Xの文字のような形態をしている。第三は、*crux immissa*と言われるもので、二本の棒が十字に組み合わされているもので、私たちの主はこの形態の十字架上で死んだという伝承がある（エイレナイオス、Haer. 2. 24. 4）。このことは、4つの福音書において（マタイ 27:37、マルコ 15:26、ルカ 23:38、ヨハネ 19:19-22）、罪状書きがイエスの頭の上に釘づけられていたことから説得力をもっている。」

驚いてはいけない。『目ざめよ！』も『洞察』も、『新聖書辞典』が教えていることと正反対の印象を与える仕方で引用しているのである。

許されない引用法

ある書物の最初の部分だけを引用して、その書物の主張、結論とは正反対である自分の説を支持しているかのように見せかけることは、詐欺的行為に等しい。学問の世界ではむろんのこと、一般社会のルールにおいても、絶対に許されない行為である。

¹⁶ New Bible Dictionary, Tyndale House Publishing, 1982, p.253

証人たちは、この種の資料を突きつけられると、「協会出版物は、たとえ一部であっても、『新聖書辞典』が確かに述べていることを引用しているのであるから、偽っているわけではない」と弁明するであろう。ほんとうにそう言ってよいのだろうか。

例えて話してみよう。今、学校の教師をしているクリスチャンがいたとする。その人が、他の人から「あなたはクリスチャンですか」と聞かれ、その人は「私は学校の教師です」と答えたとする。すると、この答えは正しいと言えるのだろうか。彼は学校の教師であるのだから、確かに、事実を答えていると言えよう。しかし、質問者が尋ねたことに答えているわけではない。もし、その人が、質問をよく聞かないで、うっかりとんちんかんな答えをしてしまった、というのであれば、そう答えた返事にめくじらたてることはない。しかし、質問された中味をよく分かった上で、しかも、自分がクリスチャンであることを隠しておきたいという意図から、そのように答えたのであれば、それは偽りの答えをしたことになる。

協会出版物の場合は、どちらか。どう考えても、うっかりミスだとは言えない。意図的に返事を操作しているケースである。なぜか。協会のこの種の悪引用は、一度や二度ではないからである。そのことは、これからの論述を見ていただければ分かるであろう。

この種の悪引用は、十字架か杭か、という問題に限ったことではない。キリストの臨在に関しても、エホバの御名に関しても、三位一体に関しても、終りの日のしるしに関しても、その他、いろいろな分野の記述の中で協会出版物は悪引用を繰り返している¹⁷。筆者は、機会あるごとにこのことを紹介してきた。必要な方々には資料をお送りする。ご連絡いただきたい。

説得力のない弁明

『新聖書辞典』の悪引用という問題に戻ろう。

本書を読んでいる証人の中には、協会出版物は、引用している辞典がイエスは杭につけられたと明言したわけではないから、間違っているわけではない、と弁明するかも知れない。あるいは、協会出版物は、スタウロスの語源を問題にしているだけであるから悪引用ではない、と詭弁を使うかも知れない¹⁸。

しかし、そのような弁明はごまかしである。そう考える人は、再び、次のようなテストを試してみるとよい。

まず、ものみの塔の信仰にも、キリスト教の信仰にも関わりをもっていない方々数人を選んでいただきたい。そして、先の協会出版物を読んでいただく。その後、その方に、「協会出版物で引用されている辞典は、イエスの刑具が十字架だったと述べているか、それとも杭だったと述べているか」と、質問していただきたい。

もし、その方々から、協会が主張しているように、杭だという返事が返ってきたなら、協会出版物は知的詐欺行為を行ったことになる。なぜなら、引用されている辞典は、引用以外の場所で、十字架だと明言しているからである。

筆者自身も、この箇所について、数十人の友人たちに上記のテストを繰り返してみた。ものみの塔の組織と関わりのある人にも、キリスト教世界に属する人にも、そのいずれにも無関係な人にも。

その結果は、驚くべきものだった。テストを受けた人全員が、全員がである、「引用されている『新聖書

¹⁷ 地球科学専門の竹内均一教授は、1914年以降地震が多発していることを証明するため、ものみの塔協会の出版物が地震学者たちの文献の悪引用を繰り返していることを指摘している。『JWの夫たち』13号、10-13頁参照。

¹⁸ 本書をインターネット上で批判してくださった匿名氏は、ものみの塔の出版物は「言語的スコープ」を問題にしているから悪引用ではないと弁明している。このような説明は、協会の見解を絶対的な真理であると受け止めるエホバの証人には説得力があるかも知れないが、一般には、詭弁以外の何物でもない。

辞典』は、イエスの刑具は杭だと教えている」と、回答したのである。

以上のテストの結果から、筆者は次のように結論せざるを得ない。協会は、出典に当たることのできない一般読者（むろん、読者は聖書研究の専門家ではないのだから、このことは当然のことである）が、権威ある『新聖書辞典』でさえ、協会の見解を支持している、という印象をもつように、引用文を操作している、と。

証人の方々へ

読者の中には、筆者の断定は行きすぎだ、と思われる方もいるに違いない。そう思う方は、ぜひ、自分で、上記のテストを試していただきたい。そして、それでもなお、筆者と違う結論に達するようなら、ご連絡いただきたい。ご一緒に考えたいと思う。

証人たちがよくすることだが、してはいけないことがある。それは、「どのような動機からそのようなことをするのか」と問うて、問題に正直に直面しようとししないことである。

私の動機は、明瞭である。ものみの塔協会が、権威ある人々の書物を正確に引用しているかどうかを知りたい、ただそれだけである。もし、協会が真実を伝えているのであれば、協会に信頼してその教えに忠実に従っていけばよい。もし、そうでなければ、協会から離れ、真実を追求すればよい。

他にも、してはいけないことがある。「それは背教したキリスト教世界の教えである」というレッテルをはって、問題を調べようとししないことである。筆者がここで求めていることは、協会が悪引用をしているかどうかを調べることである。調べた結果、悪引用をしていなければ、筆者の見解は背教的な考えとして退けて結構である。もし、悪引用であったなら、協会は不正直だと断定し、次の行動を取る必要がある。

自分では何も調べないで、組織の言いなりになることを、一般にマインド・コントロールされている、という。証人たちは、協会がマインド・コントロールをかけているなどとは、夢にも思わないであろう。そのようなことを言うのは、ものみの塔のことをよく知らない人たちだ、と考えるかも知れない。

そこで、上記のような公平な調査研究を行うことによって、ご自分がマインド・コントロールにかかっていないことを証明していただきたい。もし、この実験を自分の意思でできるのであれば、組織はあなたにマインド・コントロールをかけていないことを実証したことになる。情報を確かめることは、マインド・コントロールにかからない第一歩だからである。

否、否、上に述べていることは不正確である。あなたが証人で、しかも、本書をここまで読み進んできたとすれば、組織がマインド・コントロールをかけようとしていても、あなた自身はマインド・コントロールにかかっていない、と言ってよい。なぜなら、組織は、本書のような書物を背教的として読むことを禁じており、マインド・コントロールのもとにある証人は、本書を読み始めることさえしないからである。

これまで、『新聖書辞典』について述べてきた。

さらにこれから、いくつかの悪引用の例を紹介する。その一つ一つが、筆者の言うように悪引用なのか、それとも、誰もが行うごく普通の引用なのかを、ご自分の目で、頭で、確かめていただきたい。そして、もし、筆者の判断が間違っているとか、あるいは、オーバーであると思われたなら、遠慮なくご連絡いただきたい。

どのような批判であっても、誠意をもって検討することをお約束する。

『国際標準聖書百科事典』の悪引用

『ものみの塔』は、『国際標準聖書百科事典』を引用し、次のように述べている¹⁹。

「『国際標準聖書百科事典』（1979年版）は、『十字架』という見出しのもとで次のように述べています。『ギリシャ語のスタウロスはもともと、地面にしっかりと固定された、先のとがった垂直な木の杭を指していた。』」

筆者はこの文章を読んだとき、『国際標準聖書百科事典』は、イエスが「先のとがった垂直な木の杭」にかけられたと述べているのだ、と理解した。しかし、念のため、同事典に当たってみた。すると、引用部分の後に、次のような文章が続いていることが分かった。

「単純な垂直の棒という最も初期の形態に加えて、4つの変形された形態が有名なものになった。(1) 普通の絵に見られる形態で、クルックス・イミサ（ラテン語のCROSS）と呼ばれる。それは、短めの横棒の上に、まっすぐな棒が上に突き出ている。イエスの頭の上に罪状書きが釘づけられていると述べられていることから、これこそイエスが死なれた十字架の形態であったと推論するのが安全であろう。・・・原始の十字架の形態の初期の変形は横棒を加えることによってもたらされた。この発展は、少なくともローマ世界においては、有罪と宣告された奴隷が運んだ横棒（軛のように首に結び付けられた道具）と関係している。帝国時代までには、十字架の磔は奴隷の刑罰となり、罪あるとされた人が処刑の場所まで横棒を持ち運ぶのが習慣となった。（『新約聖書神学辞典』、VII、572-3頁）」

上記の事典の執筆者は、さらに、他の三つの形態についての説明も続けている。しかし、私たちが扱っているテーマを論じるには、以上の引用で十分であろう。

悪引用とする根拠

よく読んでいただきたい。『国際標準聖書百科事典』は、イエスの刑具は、イエスの頭上の罪状書きから、「普通の絵に見られる形態」の十字架だったと判断しているのである。そして、「帝国時代までには、十字架の磔は奴隷の刑罰となり、罪あるとされた人が処刑の場所まで横棒を持ち運ぶのが習慣となった」と解説しているのである。「帝国時代」とは、言うまでもなくローマ帝国のことで西暦前3世紀のことである。

『ものみの塔』誌が引用している文章は、確かに『国際標準聖書百科事典』の中に出てくる。その限りでは不正な引用ではない。ところが、『ものみの塔』誌が論じているテーマは、イエスのスタウロスであるのだから、同事典が、イエスのスタウロスについて述べていることを引用しなければならない。ところが、『ものみの塔』誌は、その部分には言及せず、自説に都合のよい無関係な部分を引用して、自説を正当化しようとしているのである。

読者は、協会が悪引用をしていると判断されるだろうか。それとも、そのような批判は、単に背教的な人がケチをつけているにすぎない、と切り捨てるだろうか。

なお、この『国際標準聖書百科事典』が紹介している『新約聖書神学辞典』の見解もここで紹介しておこう。この辞典が、ギリシャ語の辞書としてもっとも権威ある辞書であることは、カトリック、プロテスタント、ユダヤ教を問わず、聖書研究者すべてに認められている。ものみの塔協会の出版物もまた、よく引用している辞書であるから、紹介する価値があると思う。『国際標準聖書百科事典』が参照するよう指摘している箇所には、次のように記されている。

「スタウロスは深刻な罪を犯した人を苦しめる道具である。その形態に関しては、三つの基本的な形がある。十字架は、垂直の立てられた棒であるか、縦棒の上に横棒がのせられたTの字の形のものか

¹⁹ 『ものみの塔』1987年8月15日号、22頁。

(crux commissa)、同じ長さの棒が交差してできあがったものか (crux immissa)、である。」

上記の文章には、さらに、注がつけられている。それは、聖書学者ヒッツツヒの次のような文章であるが、スタウロスに関する『新約聖書神学辞典』の見解を正確に理解していただくため、紹介しておこう。

「ももとは、木、あるいは処刑のために地面に突っ込まれた柱が張りつけのために使われた。・・・いずれにしても、十字架は、いつでも、どこにおいても、私たちに親しまれ、教父たちによって記されている形態であったわけではない。この形態の発展、つまり、水平の横棒が加えられることは、奴隷の場合になされた patibulum の罰と関係しているのであろう。」

ここで、「私たちに親しまれ、教父たちによって記されている形態」とは伝統的な十字架を指す。そして、「patibulum の罰」とは、犯罪人が十字架の一部になる横棒を担いで、人々から辱めを受けながら処刑場まで足を運んだことを指す。ヒッツツヒは、十字架が伝統的な形態になった起源を「patibulum の罰」に求めている。つまり、それはローマ帝国時代初期で、西暦前3世紀から2世紀ぐらいということになる。

誰に責任があるのか

『ものみの塔』誌の引用の問題に戻ろう。

協会は、権威ある辞書のごく最初の部分だけを、自説を弁護するのに都合がよいので引用した。しかし、肝心な部分は自説にとって不利であるので、引用しない。読者は、このような協会出版物の引用方法をどのように考えるだろうか。

本書の前書きで、インターネット上で、ギリシャ語のスタウロスについて論じているエホバの証人のことに触れた。筆者は、この証人の方は、頭のよい、論理的な思考の持ち主であると思っている。問題は、協会出版物が、本書で紹介しているような悪引用を行っている事実を、この証人が知らないことにある。

むろん、この点で、この証人を責めることはできない。ものみの塔協会の出版物であれ、その他の出版物であれ、普通、このような悪引用をすることなど、想像し難いことであるからだ。まして、その論者は、エホバの証人である。協会出版物の執筆者たちは、神に奉仕する人々で、不正なことなど決してしないと信じ切っていたはずである。

従って、責められるべきは、一般の証人たちではない。このような悪引用を行っているものみの塔協会の出版物の執筆者たちである。それらの執筆者たちの個人名は、組織の方針で明らかにされていない。とすれば、それらの出版物の最終責任を負っている統治体こそ、これらの悪引用の全責任を負わなければならない。

ただし、先に知った者の責任ということもある。もし、あなたが証人であって、本書を読み、協会出版物の引用方法に問題があると感じたなら、そのことを率直にただす必要がある。そして、納得いくまで、検証する責任がある。その検証の結果、悪引用だと確信したなら、統治体に訂正を求める責任があるのである。

『インペリアル聖書辞典』の悪引用

同じような例は、まだまだいくらかでもある。『論じる』が紹介している『インペリアル聖書辞典』(P・ファベアン編、ロンドン、1874年版、第1巻、英文376頁)について、取り上げてみよう²⁰。

「インペリアル聖書辞典はそのことを認めて、次のように述べています。『十字架と訳されるギリシャ語 [スタウロス] の正しい意味は、何かを掛けるとか、一区画の土地を囲う [柵を巡らす] のに使

²⁰ 『聖書から論じる』、217頁。

う杭、まっすぐな柱、あるいは1本の棒杭である。・・・ローマ人の間でさえクルクス（英語 cross [十字架] はこれから派生している）は、もともとまっすぐな柱であったようだ。』

まず、読者であるあなたは、上記の文章を自分自身でもう一度、読み直していただきたい。そして、次に、あなたの友人か、あなたのご家族に（エホバの証人であっても、そうでなくても、それはどちらでもよい）、読んでもらってほしい。

その上で、『インペリアル聖書辞典』は、イエスが、「杭、まっすぐな柱、あるいは1本の棒杭」にかけられたと教えているか、尋ねていただきたい。間違いなく、「そう教えている」という返事が返ってくるであろう。

インペリアル聖書辞典の見解

むろん、『インペリアル聖書辞典』がそのように教えているならば、何一つ問題はない。ところが、同辞典は、そのようなことを教えていないのである。むしろ、伝統的な形態の十字架だった、と説いている。まったく逆なのである。

では、『論じる』は、どうして正反対の結論を引き出すのに、成功しているのか。それは、上記の引用文の「・・・」という省略された部分にある。

ある文章をそのまますべて引用すると長くなるので、「・・・」と書いて、その一部を省略することはよくある。通常、省略される部分は、論じられているテーマとは直接関係のない、末梢的な部分である。もし、それを省略することによって、意味が分からなくなったり、変わってしまうなら、それは決して省略してはいけない部分である。まして、省略することによって、執筆者の主張を誤解させるようなことは絶対にあってはならない。学問の世界では、それほど執筆者に対する失礼なことはない。このことは、学問をする者にとってのイロハであり、常識である。

ところが、協会出版物は、そのような常識をさえ持ち合わせていない。というのは、しばしば、執筆者の主張を分かりにくくさせてしまったり、誤解させてしまうからである。それだけでも許されないことなのだが、ここで、『論じる』がしていることは、もっともっとひどいことである。信じられないことだが、引用している文献の執筆者が持っている結論とは、180度違う結論を導出させるために、小細工しているのである。

どういうことか？ 実は、この「・・・」に当たる部分には、次のような文章が入っている。

「But a modification was introduced and usages of Rome extended themselves through Greek-speaking countries.」

「しかし、変形されたものが導入され、ローマの使用法は、ギリシャ語を話す国々に広がっていった」
この文章を入れ、『論じる』をもう一度読み直していただきたい。

ここで、「変形されたもの」とは、ものみの塔協会が主張している「杭」を変形したものである。すなわち、一般に言われる「十字架」のことである。すると、ローマ政府が処刑に使用したのは、杭ではなく、十字架ということになる。その十字架が、ギリシャ語世界全般に及んでいたことを、『インペリアル聖書辞典』は説いているわけである。

お分かりいただけたでしょうか。それは、何と、『論じる』がここで説明していることと正反対のことなのである。

実に驚くべき省略である。私は、40年以上、聖書に関する書物を読んできたが、これほどたちの悪い省略法は、見たことがない。うっかりミスといえるようなものでは決してない。よくよく考え抜いた末の小細工である。

紹介されていない部分

それだけではない。『論じる』の引用の最後の文章は、原文の文章の途中までである。文章の途中のカンマまでしか引用しないということは、普通はすべきではない。執筆者の意図が正確に伝わらないことが多いからである。『論じる』の場合はどうか。ここに、『インペリアル聖書辞典』の原文を紹介しておくので、読者自身が判断していただきたい。『論じる』の引用文の後、なお、次のような文章が続いているのである。

「and always remained the more prominent part. But from the time that it began to be used as an instrument of punishment, a traverse piece of wood was commonly add ... about the period of the Gospel Age crucifixion was usually accomplished by suspending the criminal on a cross piece of wood.」

「そして、それは、いつでも、より重要な部分として残されている。ところが、刑罰の道具として使われはじめた時から、通常、横棒の木が加えられるようになった。・・・福音書の時代の頃には、磔は、通常、犯罪人を十字の木の上にぶら下げることによって成し遂げられた。」

もう一度、英語の原文でも、日本語の訳文でもよい、よく読んでいただきたい²¹。『インペリアル聖書辞典』は、イエスが杭につけられたなどとは教えていないのである。それどころか、刑具だった縦棒には、やがて横木が加えられたこと、そして、イエスの時代には、十字に組まれた十字架が刑具として使われていたと証言しているのである。

他には見られない詐欺的な引用

『論じる』の執筆者たちが、ここで紹介している文章を知らないわけではない。すべてを百も承知の上で、重要な箇所を省略したり、途中で引用を打ち切っているのである。協会の主張が、権威ある『インペリアル聖書辞典』によって支持されているかのような印象を読者に与えるために、である。

たまたま間違ってしまった。もしそうであれば、人間、誰でもすることである。許さない方が間違っているだろう。しかし、協会の悪引用は、不完全な人間がつつい犯してしまったミスとして片づけられることではない。そのように扱うことは不正直である。

引用されている辞典は、伝統的な形態の「十字架」を主張している。このことを重々承知しながら、その上で、自分たちの主張である「杭」の部分を選び、全体がそのような読めるように小細工している。それは知的詐欺行為以外の何ものでもない。学問の世界のみならず、真理を愛する人たちの間では、許してはならない行為である。

筆者は、証人の方々に読んでいただきたいと願って、本書を執筆している。証人の方にとっては、筆者の言明は、厳しすぎると思われるかも知れない。しかし、筆者自身は、決してそう思っていない。言うべきことを当然言っているにすぎないと思っている²²。それは、相手がものみの塔協会であろうと、仲間のキリスト教世界であろうと変わらない。否、仲間であれば、もっともっと厳しい言い方をすると思う。

筆者は、これまで、いくつかの学会に所属してきた。そのどの学会においても、ここで述べていることは当然のこととして、受けとめられると確信している。例外はない。厳しすぎるとか、感情的であると批判されることはありえない。30年以上学会に所属していた者として断言できる。

²¹ 「それは、いつでも、より重要な部分として残されている」という訳文に対し、インターネット上で、匿名氏は、『ものみの塔』誌 1987年8月15日号の「しかも、この意味のほうに常に主要な用法であった」という訳文を紹介してくださった。

²² 1964年3月15日号の『ものみの塔』誌(177頁)は、「知識のある人が特定の宗教の間違ったことを公に暴露し、偽りの宗教と真の宗教との相違を他の人に示すのは宗教の迫害ではありません」と述べている。協会は、この

学会は、この世のものである。この世に属する学会でさえ、協会がしているような引用方法を許さないのである。とすれば、まして、真に正直であろうとしているエホバの証人の方々は（筆者がお会いした証人たちは、ほとんど例外なくそういう人たちであった）、協会の不正直さを見過ごしてはいけない。不正や悪を知りながら、それに対して沈黙を守ることは、その悪に荷担することになる²³。

悪を指摘するときには、TPO（時と場所と機会）をわきまえなければならない。何でも指摘すればよい、というようなものではない。確かな事実であることを確認してから行うべきである。謙遜な心でしなければならない。権力や報復を恐れて、沈黙を守るようなことがあってはならない。それは、聖書の真理を信じる者の取るべき態度ではない。筆者自身も、これらのことに注意を払いながら、誠意をもって対応してきたつもりである。

協会の悪引用を正す責任は、信者である証人たちにもある。特に、組織のリーダーたちには、その責任を自覚していただきたい。これまで、筆者は、日本支部の責任者たちに、九通の手紙を出し続けてきた。残念ながら、一通の返事もいただけなかった。これは常識では考えられないことである。

しかし、組織の中で、悪引用であれ、その他の問題であれ、誰かが間違っていることを正そうと行動するなら、「やがて、エホバが正される。それまでは先走りしないで、待っているのがよい」、協会のリーダーはそのように返答してくるであろう。これもまた詭弁である。組織のリーダーたちは、協会にとって不都合なことを指摘され、そのようなことで騒がれたくないので、そう言ってごまかしてくるであろう。

組織のリーダーに、自分たちの不正や偽善性を認める勇氣があるなら、その組織は、健全だと言えよう。もし、それを覆い隠そうとするなら、その組織は腐り果てている、と言わねばならない。ものみの塔協会はどちらなのか、あなた自身で判断していただきたいと思う。

2. クシュロンについて

協会が、イエスの刑具は十字架ではなく杭である、と主張する根拠の一つは、イエスの刑具に対し、新約聖書が「クシュロン」というギリシャ語を使っていることにある。以下、この問題を論じることにしよう。

協会の引用

まず、『論じる』の文章から紹介しよう²⁴。

「神のみ子の処刑に関しても事情は同じだったのでしょか。その処刑に使われた刑具を表わすのに、聖書がクシュロンという語も用いているのは、注目に値します。リデルとスコット共編の希英辞典は、この語の意味を次のように定義しています。『すぐに使えるように切つてある木、薪、材木など・・・木片、丸木、梁材、支柱・・・こん棒、棒・・・犯罪者が付けられる杭・・・生きた木の場合は立ち木』。この希英辞典はまた、『新約では、十字架に関して』と述べ、例として使徒5章30節および10章39節を引き合いに出しています。（オックスフォード、1968年版、1191、1192頁）しかし、これらの節で欽定訳、改訂標準訳、エルサレム聖書、ドウェー訳、および口語訳は、クシュロンという語を『木』と訳出しています。（この訳し方とガラテア3:13;申命記21:22、23とを比較。）」

ここで、『論じる』が言いたいことは、次のように要約されるであろう。

新約聖書は、イエスがかけられた刑具に対して「クシュロン」というギリシャ語を使っている。

リデルとスコットのギリシャ語辞書によれば、「クシュロン」は一本の木である。

言明を真剣に考慮すべきである。

²³ ヤコブ4章17節

²⁴ 『論じる』、217頁

ところが、その辞書は、新約聖書においては、「クシュロン」を「十字架」と述べている。しかし、その「クシュロン」は、いくつかの聖書において「木」と訳出しているので、イエスの刑具は十字架ではなく、杭である。

これらの記述の中には、正しいことと不正確なことが混在している。まず、次の点は正しい。使徒 5 章 30 節、10 章 39 節（使徒 13 章 29 節、ガラテヤ 3 章 13 節、I ペテロ 2 章 24 節も含め、新約聖書では全部で 5 箇所において）は、イエスの十字架に対して、「クシュロン」というギリシャ語を使っている。クシュロンの原義は、「木」である。

『論じる』が紹介している翻訳聖書は、クシュロンを「木」と訳出している。

どこに問題があるのか

ところが、この議論にはごまかしがある。もし、「クシュロン」というギリシャ語が、一本の棒という意味にしか使用されていないのであれば、むしろ、協会出版物が主張していることは正しい。ところが、「クシュロン」は、単なる一本の木を指しているだけではない。実際には、木で作られたさまざまな物に使われているのである。『論じる』は、そのような用例を、「・・・」という省略形を用いて、読者の目にふれないようにしている。

上記引用の『論じる』は、リデルとスコットの辞書の中から、火で燃やすために用意された薪、建築資材としての材木、警官が使うこん棒、犯罪人の首をくくりつける板など、一本の木から造られたもののみを紹介している。ところが、「クシュロン」というギリシャ語には、一本の杭ではない使用例が数多くある。

例えば、「犯罪人の首をくくりつけた木でできた首輪」（西暦前 5 世紀のアテネの詩人アリストファネス）、「両足をくくりつけて見世物にされる時に使われるさらし台」（ヘロドトス、アリストファネス、西暦前 4 世紀のアテネの政治家デモステネスや雄弁家リシアス）、「首と腕や足を穴の中に入れて見世物にした木で作られたさらし台」（アリストファネス）、「絞首台」（アリストファネス）、「両替人が使用していた机」（デモステネス）、「アテネの劇場の椅子」（アリストファネス）、「ヒポクラテイスの椅子」（西暦前 4 世紀のギリシャの名医ヒポクラテイス）などに対しても使われた。

『リデルとスコットの辞書』はそのような用例を明記している。ところが、『論じる』は、このような用例を「・・・」によって注意深く省略し、一本の柱の用例だけを紹介している。先の引用に「・・・」が 4 箇所も出てくるのはそのためである。それは、意図的に小細工している、ということに他ならない。

いずれにしても、「クシュロン」は、ただ単に一本の木を指すだけではなく、木で作られたさまざまな物に対して使われた。その意味は、その語が使われている前後の文脈から判断する以外にない。使徒 16 章 24 節のクシュロンは、新世界訳においても「足かせ台」と訳されている。もし、「クシュロン」がそのような使用状況にあるとすれば、「クシュロン」を十字架と解釈することは自然なことである。リデルとスコットの辞書は、そのような背景から、新約聖書における「クシュロン」は十字架を指す、と解説しているのである。

クシュロンが使われた理由

『論じる』が紹介している翻訳聖書は、確かに「クシュロン」を「木」と訳している。しかし、それは、翻訳者たちが、イエスがかけられた刑具を一本の柱だと考えていたことを意味しない。できるだけ原義に近い意味を訳出するため「木」と訳しているが、その中味は「十字架」を想定していることに間違いはない²⁵。

²⁵ 新改訳は、使徒 10:39 とガラテヤ 3:13 において、「木」と訳しているが、注をつけ、それは「十字架」を意味する

例えば、『新国際訳』(NIV)も「木」と訳しているが、それは「十字架に対する表象的言及」(figurative reference to the cross)だと説明している。²⁶

では、なぜ、イエスの刑具に対して、「クシュロン」というギリシャ語が使われたのか。これはきわめて興味深い新約聖書の研究テーマでもある。

この「クシュロン」は、初代教会の人々がメッセージとして語るようパターン化された文章(これを現代の聖書学では、「ケリグマ」と呼んでいる)の中に出てくる。ケリグマと言われるものは、初期のクリスチャンたちが、その最初の頃から中心的なメッセージとして語った内容を指している。それは、主としてユダヤ人の背景の中で、ユダヤ人を意識して語られたメッセージである。²⁷

ところで、ユダヤ人にとって「クシュロン」という語は、「神に呪われた者の処刑」というイメージがつきまとうものだった(ガラテヤ3章13節参照)。なぜ、そのようになったのか。七十人訳ギリシャ語旧約聖書の翻訳者が、申命記21章22-23節に出てくる「エイツ」に対し「クシュロン」という訳語を当てたからである。

もともと、ヘブライ語には、十字架を意味する言葉はなく、処刑のための刑具はすべて「木」を意味する「エイツ」という言葉で表現した。ユダヤ人は、刑具が杭であっても、十字架であっても、ヘブライ語の「エイツ」という言葉を使った、ということである。その「エイツ」は、七十人訳ギリシャ語旧約聖書の訳語から、ギリシャ語で表すときには、「クシュロン」が使われるようになった。従って、ユダヤ人にとっては、「クシュロン」は、杭をも十字架をも意味したのである。

ユダヤ人が「クシュロン」という言葉を使うとき、刑具の形を問題にすることはなかった。むしろ、申命記21章22-23節から、受刑者が神に呪われた者であることを強く意識していたのである。

このことは、ユダヤ人であった初代のクリスチャンたちにも当てはまる。彼らは、イエスの死を宣べ伝えたのであるが、その死は、神の呪いをご自身の身に引き受けた、全人類の贖いの死であることを強調した。初代の使徒たちが、ユダヤ人にキリストのメッセージを語るにあたって²⁸、ユダヤ人に馴染みの深い「クシュロン」を使ったことには、以上のような背景があったのである。

「スタウロス」は、一般に(すなわち、ユダヤ人の間でも)、ローマ政府への反逆罪を想定させた。それに対し、「クシュロン」の方は、神の呪いを身に受けることを想定させるので、贖いという観点からは、よりふさわしい言葉だった。従って、初代のユダヤ人クリスチャンたちは、キリストの贖いと関わりのある十字架を語る時、「スタウロス」ではなく「クシュロン」を選んだのである。このことをもっともよく示しているのが、ガラテヤ3章13節である。

「キリストはわたしたちの代わりにのろわれたものとなり、こうしてわたしたちを律法ののろいから買い取って解放してくださったのです。『杭(クシュロン)に掛けられる者は皆のろわれた者である』と書かれているからです。」

また、Iペテロ2章24節は、キリストの死の中に、神の呪いを甘んじて受けるほどの謙遜さを認識していたことから、「クシュロン」という言葉が使われたものと思われる。

と断っている。一方、口語訳と新共同訳は、Iペテロ2:24を除いて「木」と訳しているが、Iペテロ2:24では「十字架」と訳しているので、その翻訳者たちもまた、「木」と「十字架」を交換可能な言葉として理解していることは明白である。

²⁶ The NIV Study Bible, Zondervan, 1985, p.1891

²⁷ この点に関しては、マックス・ウイルクックス教授による「木の上に；新約聖書における申命記21章22-23節」という論文で詳しく展開されている。(Upon the Tree - Deut. 21:22-23 In the New Testament, JBL vol.96, 1997, p.85-99)

²⁸ 使徒の働きに出てくる「クシュロン」(5、10、13章)のすべては、ユダヤ人に語られた文章の中に出てくる。

「杭（クシュロン）の上でわたしたちの罪をご自身の体に負い、わたしたちが罪を断ち、義に対して生きるようにしてくださったのです。そして、『彼の打ち傷によってあなた方はいやされました。』」

結局、「クシュロン」というギリシャ語が使われたのは、イエスの死が、神からの呪いを受けるものだったことを強調したかったことにある。それは、スタウロスに当たるヘブライ語をもたないユダヤ人にとっては、きわめて自然なことだったのである。

従って、「クシュロン」が「木」を意味するので、イエスの刑具は一本の杭であった、と協会が結論づけるのは、あまりに性急すぎる。「クシュロン」という言葉は、刑具に使われた場合、その形態については問題にされなかったからである。もし、協会が言うように、「クシュロン」を一本の棒杭と理解しなければならないとしたら、見世物にするさらし台も、3本の杭でできていた絞首刑の処刑台も、両替人の机も、医師の座る椅子や劇場の椅子までも、すべてを一本の杭だったと解釈しなければならなくなる。いくら協会であっても、そのような愚かなことは言わないであろう。

以上の論述は、イエスの刑具が杭であると断定する必然性がないことを検証したにすぎない。伝統的な形態の十字架であったことを積極的に証明した、というわけではない。しかし、協会出版物に対する返答は、とりあえずこれで十分であろう。新約聖書がイエスの刑具に対し「クシュロン」を使っている以上、イエスは杭につけられたはずだ、という協会出版物の断定は間違っていることになる。

3. ラテン語のクルクス

ギリシャ語のスタウロスに当たるラテン語は、「クルクス」である。協会は、この語も杭を意味しており、十字架を意味するようになるのは後代のことだ、と主張する。果たしてそれは、ほんとうだろうか。

古い論争の記録から

1960年代の『ものみの塔』誌は²⁹、1950年に、ものみの塔協会とバプテスト教会の牧師との間でなされた論争を紹介している。その記事においても、イエスが杭につけられたことの最終的根拠として、「クシュロン」が挙げられているが、その他に、ラテン語「クルクス」についても言及している。

「1950年11月15日号『ものみの塔』（英文）は5ページの回答をのせ、その中で油そそがれた証人は、『ザ・バプテスト・レコード』が攻撃した点すべてについて、『新世界訳』の正しさを決定的に弁明しました。右の非難に対する油そそがれた証人の回答の一部を次にしります。」

「貴紙の見出しは、『十字架は杭ではない』となっていました。そして第4節は、『十字架』のかわりに『杭』を使うのは奇妙であると述べています。・・・軽率なことばを書く前に、『新世界訳』をひもとき、付録の768-771ページにあるマタイによる福音書10章38節と『苦しみの杭』に関する説明を読んでいたなら、もっと慎重な論説を書くことができたでしょう。そこを読めばおわかりのとおり、ギリシャ人がスタウロス、ラテン人がクラックスと呼んだ刑具は、当初、横木のない一本の杭でした。・・・使徒ペテロはそれを単に『木』と呼び（使行5ノ30。10ノ39。ペテロ第一2ノ24）、使徒パウロも使徒行伝13章29節とガラテヤ人への手紙3章13節で『木』ということばを使っています。明らかに貴紙はこれらの聖句の意味を読み落としているものと思われます。イエスがつけて殺されたのは単なる杭ではなかったと言うことは容易ですが、貴紙の記事はこの点に関して『新世界訳』を奇妙で、不正確で、非聖書的であるとする論拠を一つも挙げていません。」

「『ザ・バプテスト・レコード』紙に対しては、『ものみの塔』の回答を掲載し、『新世界訳』に関す

²⁹ 1966年12月15日号、758-59頁。

る誤った宣伝を訂正し、聖書の真理に対する妨げを取り除くことが求められました。応答は？ヨブの
ような証人たちに対する牧師の敵意、エホバに対するそしりがその度合を強くしたことです。」

筆者は、1950年の『ものみの塔』誌、およびバプテストの機関誌を調査しているが、未だ手に入らず、
正確な議論ができないことを申し訳なく思う。ただし、この記事で言及されている『新世界訳』の768-71
頁の付録については、1950年に出版された英訳の『新世界訳』が手元にあるので、確認できる。従って、
協会側が争点にしている根拠は正確につかんでいるつもりである³⁰。

ところで、この記事は、イエスの刑具が杭であるという根拠として2つのことを挙げている。まず、「ギ
リシャ人がスタウロス、ラテン人がクルクスと呼んだ刑具は、当初、横木のない一本の杭」だった、とい
うことである。第二に、イエスの刑具に対し「クシュロン」というギリシャ語が使われている、というこ
とである。

ルイスとショートの『ラテン語辞典』

スタウロスとクシュロンについては、すでに触れた。従って、ここではラテン語のクルクスが「横木
のない一本の杭」だったかどうかを検証しよう。

上記の『ものみの塔』誌の記事は、1950年版の『新世界訳』の付録を見るように指示している。そのラ
テン語クルクスの部分は、1985年版の『参照資料付き聖書』の説明とほとんど同じであるので、後者から
引用しておこう³¹。

「ルイスとショートのラテン語辞典は、クルクスの基本的意味として、『犯罪者がつけられたり掛け
られたりする、木、柁木、または木製の他の処刑具』を挙げています。西暦前1世紀のローマの歴史
家リビウスの著作の中では、クルクスは普通の杭を意味しています。『十字架』はクルクスの後代に
おける意味でしかありません。犯罪者をつけるための1本の杭はラテン語でクルクス・シンプレクス
(*crux sim'plex*)と呼ばれました。そうした拷問用の刑具の一つが、ユストゥス・リプシウス (1547
-1606年) によってその著書、『デー・クルケ・リプリー・トレース』(De cruce libri tres、アン
ト・ワープ、1629年、19ページ) の中に描かれています。1770ページのクルクス・シンプレクスの
写真はその本からの実際の複写です。」

1950年版の付録は、最初の部分が、次のように異なっている。

「ラテン語訳において、スタウロスがクルクス (*crux*) と訳された事実は、そのこと (イエスの刑具
が杭であること) に対して反論を提供するようなものではない。権威あるラテン語の辞書はすべて、
研究者に、クルクスの基本的な意味として、犯罪者をつけられたり掛けられたりする、『木、柁木、
または木製の他の処刑具』(ルイスとショート) をあげています。」

1950年版の説明の方が、論点は明確にされている。それは、次のように要約されよう。

ギリシャ語のスタウロスがラテン語のクルクスと訳されている以上、スタウロスも十字架を意味するはず
だ、と一般には考えられている。なぜなら、ラテン語のクルクスは、十字架を意味するからである。

しかし、それは正しくない。ラテン語のクルクスの基本的な意味は、「木、柁木、または木製の他の処刑具」
だったからである。

ラテン語のクルクスに十字架の意味が加わるのは、後代のことである。従って、ギリシャ語のスタウロス
もラテン語のクルクスも十字架を意味しない。

³⁰ 上記の記事は、協会側の根拠については、『新世界訳』の付録に言及しているのので、ここでの議論には、それで十分ではないかと思う。

³¹ 『参照資料付き聖書』(1985年版)、1769頁。

この議論にもまた、ごまかしがある。ルイスとショートのラテン語の辞書を正しく引用していないからである。その辞書は、「クルクス」の字義的な意味として、一般的な用法と特殊な用法があると解説している。協会出版物が言及しているのは、前者（一般的な用法）だけであって、後者（特殊な用法）を無視している。ところが、イエスの刑具を問題にするのであれば、取り上げなければならないのは、一般的な用例ではなく、特殊な用例の方である。ルイスとショートの辞書はそのことを明らかにしている。

『ものみの塔』誌は、クルクスは「当初」杭を意味した、と述べている。言語に関心を持つ人々の中には、ある言葉の意味を確定するにあたり、語源、あるいは、最初に使われた意味を探索し、それこそ本来の意味であるかのように（あるいは純粋な意味であるかのように）思い込んでいる人がときたまいる。しかし、言葉の意味は、時代とともに変化し、ある時代になると、元来の意味は完全になくなってしまいう例も少なくない。

例えば、英語の「nice」という言葉は、古い英語では「foolish（愚かな）」を意味した。しかし、現在では、そのような意味はまったくなく、wonderful（すばらしい）とか、pleasant（喜ばしい）という意味である。

ラテン語のクルクスについても、同じようなことが言える。『クルクス』は、最初、処刑の道具として一本の杭を指すこともあったが、次第に、それは、2本の柱を組み合わせた十字架を指すようになり、十字架の方が一般的になってきた。『参照資料付き聖書』が一本の杭を「クルクス・シンプレクス」と呼んでいること事体、「クルクス」にはさまざまな形態のものがあったことを証明している。

『参照資料付き聖書』は、「『十字架』はクルクスの後代における意味でしかありません」と述べる。問題は「後代」とはいつ頃を指すのかということである。

協会の見解に立てば、他の協会出版物から、「後代」とは、4世紀コンスタンチヌス以降でなければならない。しかし、参照資料付き聖書の説明は、西暦前1世紀のローマの歴史家リビウスの用例を挙げている。それは協会が示さなければならない時代より、400年以上前の文献である。イエス時代より前の用例を挙げたところで、説得力はまったくない。

ルイスとショートのラテン語辞書は、ローマの喜劇詩人テレンス（西暦前195-159年）の文献（and. 3、5、15）、キケロ（西暦前106-43年）の文献（Verr. 2、1、3と7、2、1、4、と9、Pis. 18、42、Fin. 5、30、92等々）、クインティリアヌス（西暦30-96年）の文献（4、2、17）、タキトゥス（西暦55-120年）の文献（アグリコラ 15、44）、ホーレ（西暦前68-8年）の文献（S. 1、3、82、2、7、47、EP. 1、16、48その他しばしば）などにおいて、「crux」が十字架の意味で使われたことを明らかにしている³²。

このラテン語辞書は、ラテン語の文献を読むときには欠かせない、標準的な権威あるものである。そのような辞書を、『新世界訳』の解説者たちは、一部だけを引用し、自説を弁護するために利用しているのである。権威ある辞書をそのように誤用するのは、常識では考えられないことである。ラテン語を学びはじめた学生であっても絶対にしない間違いである。

むろん、解説者たちはうっかり間違っただけではない。明らかに意図的に読者を欺く目的でその辞書を悪用したのである。これは、弁明の余地がまったくない不誠実な行為である。

リプシスの杭の絵

ところで、先の『新世界訳』の付録は、ユストゥス・リプシスの『デー・クルケ・リプリー・トレース』（De cruce libri tres、アント・ワープ、1629年、）の中に描かれている一本の杭にかけられている人の

³² ルイスとショートの『ラテン語辞典』、「crux」の項参照。

絵を紹介している³³。

ラテン語辞書の問題から少々はずれるが、協会がしているもう一つのごまかしを紹介しよう。

読者の方に、重ねてお願いしたいことがある。どなたかあなたの友人か、家族の方に、この絵を見せ、その前の頁の解説を読んでもらってほしい。そして、「リプシスという人が、イエスは杭に掛けられたと考えていたか、十字架に掛けられたと考えていたか」、質問していただきたい。

私が試してみた限りでは、全員が、「リプシスはイエスが杭にかけられたと考えていた」という返事だった。あなたがされても、同じ結果が得られると思う。

面白いことがある。実は、1985年版の『新世界訳』には、削除されているのだが、50年版の『新世界訳』には、この絵に関し、「これがイエスがかけられた方法だった」というコメントがつけられていた。では、そのコメントはいつから、なぜ、削除されるようになったのか。

筆者の手元には、1969年版の『ギリシャ語聖書王国行間逐語訳』がある。そこに、このコメントは記されている。ところが、それから16年後の、1985年版の『ギリシャ語聖書王国行間逐語訳』にはない。この間に何があったのか。

筆者の手元に、『ものみの塔の杭とクリスチャンの十字架、どちらが正しいのか』という一冊の書物がある。その12頁には、南カリフォルニア大学のマリ・ツェング教授によって、リプシスの文章が英訳されている。1976年10月3日になされたものであり、『新世界訳』の偽瞞性を暴いた記事である。この記事によって協会は、先のコメントを削除せざるをえなくなったのである。

リプシスの書物について簡単に紹介しておこう。リプシスは、彼の書物の647頁に、『新世界訳』が掲載している絵を載せている。しかし、そこでは、キリストに関しては一言も触れていない。実は、リプシスは、彼の書物において、この絵を含め、16種類の処刑方法を紹介している³⁴。『新世界訳』が紹介している絵は、キリストとはまったく関係のない、一本の杭に処刑された犯罪者の絵だったのである。つまり、16種類の刑具の一つにすぎない。キリストが掛けられたものではなかったのである。

その書物は、先の絵から14頁後の661頁において、キリストの場合には、伝統的な十字架に掛けられたことを説明している。その一端を訳出しておこう。

「このことが間違っていないと言い切つてよいのかどうか、私には分からない。このこととは、『主の十字架には、縦棒、横棒、下に置かれた台座、上に置かれたタイトルの板の四つの木があった』ということである。次の記録はエイレナイオスによって伝えられたものである。『十字架の構造自体は、5つの終り（テルトリアヌスはそれを「点」と呼んでいるが）を持っている。2つは垂直のそれであり、2つは、水平のそれである。もう一つは、真中にあり、そこに人が釘付けされたのである。』・・・しかしながら、古い絵や彫刻物からこの板（体を支えた板）が置かれていたことは明らかだと聞いている。それを、キリストの十字架から、早まって取り除くようなことをしてはならない。他のものからであれば、もっと大胆にしてもかまわないが。」

ここで、リプシスは、キリストの刑具が伝統的な形態の十字架であったことは当然のこと、として記述している。その前提に立って、リプシスは、初代教会教父たちの証言の中の、「下に置かれた台座」、「体を支えた板」があったかどうか、という点を問題にしていたのである。

このようなことを暴露されても、『新世界訳』は、「これがイエスが掛けられた方法だった」というコメントを削除しただけで、杭に掛けられた人の絵そのものは掲載し続けている。その絵を載せることによつ

³³ 『参照資料付き聖書』1770頁のクルクス・シンプレクスの挿し絵参照。

³⁴ そのほとんどは、一本の杭ではなく、十字架上での苦しみを描いたものである。

て、協会の主張は昔（16世紀）から支持されているのだという印象を読者に抱かせたいためである。反対者たちから偽瞞性を指摘されても、一応弁解ができるように、コメントだけは削除しておく。しかし、絵そのものは取り除かない。これが、正直さを証人たちに求めている協会リーダーたちのしていることなのである。

4 十字架の起源について

ものみの塔協会は、キリスト教世界の十字架は、異教のシンボルに由来するものであり、それは偶像崇拜に関係している、と主張する。このような主張は、ほんとうに正しいのだろうか。ご一緒に検証してみよう。

古代のいろいろな宗教

協会は、十字架がキリスト教に起源を有するのではなく、異教に起源を有することを強調する。例えば、『論じる』は、『ブリタニカ百科事典』（1946年版）、第6巻、753頁の次の文章を引用している³⁵。

「キリスト紀元よりはるか以前のものとして、様々なデザインの十字架を描いた物品が、古代世界のほとんどあらゆる場所で発見されてきた。インド、シリア、ペルシャ、エジプトからは、いずれもおびただしい数のそうした物品が出土している。・・・キリスト教時代以前に、非キリスト教徒の間で十字架が宗教的象徴として使用されたが、それはほとんど全世界的なものであったと考えてよいであろう。そして、非常に多くの場合、それは何らかの自然崇拜と結び付いていた。」

筆者は、いくつかの図書館を訪ねて1946年版の『ブリタニカ』をチェックしようとした。しかし、残念ながら、その版を見ることができなかった。そこで、手元にある1988年版の『ブリタニカ』から、『論じる』が引用している箇所と関係する部分を紹介しよう³⁶。

「十字架は、キリスト教時代よりはるか以前から、宗教的な、あるいはその他のシンボルとして使われてきた。しかし、それらが、何であるかを表す単なるしるし（マーク）なのか、それとも、所有物なのか、あるいは、信仰や礼拝と関わる重要な意味があったのかは、いつでも明らかであるわけではない。」

46年から88年の40年余の間に、十字架に関してどれほどの研究がなされ、その成果が『ブリタニカ』の辞典にどれだけ反映されているのかは、筆者には分からない。しかし、同じ系列の辞書であるにもかかわらず、十字架と異教の関連性については、88年版においては、ずいぶんトーンダウンしていることが分かる。

一般論だが、古代中近東の宗教的状況については、研究すればするほど、断定的な結論を出せなくなっている。「十字架」に関するブリタニカの記事も、同じことが言えそうである。

ところで、ある記述に関して、新しい版においてその記述が訂正されれば、一般には、古い版の見解は破棄されたことを意味する。十字架に関する記述は、46年版と88年版とでは、まったくと言ってよいほど違っている。従って、『論じる』が古い版の『ブリタニカ』辞典を使っていること自体、学問的に言えばおかしなことで、問題にされなければならない。自分たちに都合がよいことを述べている版を使っているように思われるからである。むろん、以上の議論は、『論じる』が46年版の『ブリタニカ百科事典』の見解を正しく紹介している、との前提に立っての話であるが。

³⁵ 『論じる』、218頁。

³⁶ 『ブリタニカ』（1988年版）、753頁。

ものみの塔協会は、『アメリカナ百科辞典』をよく引用する。その十字架の項目は、十字架が古い時代からシンボルとして用いられてきたことを述べている。しかし、その異教的な結びつきについては、きわめて慎重な言い回しに終止している³⁷。

「十字架は、人類にとって、もっとも古く普遍的なシンボルとして知られている。深い宗教的な洞察をもった人々やそうでない人々が、さまざまの十字架を作り、それに隠された意味を付与してきた。」

十字架、あるいはそれに関わりのあるある種のデザインが、古来から、宗教的な、あるいはその他のシンボルとして使われてきた、ということはある。もし、そのような事実があったとすれば、それを無視したり、隠したりする必要はいささかもない。

問題は、そのようなキリスト教以前の（十字架と関わりがあると思われる）さまざまなシンボルと、キリスト教の十字架との間に、どのような因果関係があったのか、ということである。十字架という形態が似ているからといって、両者に関わりがあると考えるのは早計である。協会の議論は、この点においても問題がある。

タイアクの書物の悪引用

例えば、『論じる』は、G・S・タイアクが著わした『宗教儀式・建築・美術における十字架』という書物（ロンドン、1900年）から、次のような文章を紹介している³⁸。

「キリストの誕生よりもずっと昔から、またそれ以後も、教会の教えが伝えられていなかった種々の土地で十字架の印が神聖な象徴として用いられてきたのは不思議とはいえ、疑問の余地のない事実である。・・・ギリシャのバックス。ティルス、タンムズ、カルデアのベル、ノルウェーのオーディンなどはみな、その信奉者にとって十字形で象徴された。」

論点をはっきりさせるために、今は、ここで紹介されている十字形の象徴の歴史的眞偽性については問わないことにする。むしろ、『論じる』が、イエスの十字架を問題にしている箇所において、上記の文章を引用したことを問題にしたい。というのは、上記の引用部分は、タイアクの書物の1頁に出てくるのだが、その同じ書物の3頁には、次のように述べられているからである。

「In all this the Cristians of the first age would have rejoiced、 claiming it as a world-wide prophesy of the Cross of the Redeemer.」

「このすべてのことにおいて、それを贖い主の十字架の世界的に広まった預言として宣言しながら、最初の時代のクリスチャンは大いに喜んでいたのである。」

タイアクが、彼の書物の中で主張したかったことは、結局次のようなことである。十字架は、異教の世界においてさまざまな形で知られ、用いられてきたが、最初の時代のクリスチャンたちは、その十字架を「贖い主の十字架」として宣言した。

ここで、タイアクが「最初の時代」(the first age)と述べているのは、いつの時代のことか。それは、一世紀の初代教会時代を指す。決して、ものみの塔協会が主張するように、4世紀、コンスタンチヌス以降の話ではない。

何が問題なのか

読者の皆さん、是非、考えていただきたい。『論じる』は、キリスト教の十字架を問題にしているのだから

³⁷ Encyclopedia Americans, p.246

³⁸この文章は、同書（英文）、1頁より引用した。なお、『論じる』、218頁参照。

ら、タイアクの書物の3頁を紹介するのが当然である。ところがそうはしないで、1頁の部分だけを引用している。どうしてなのか。言うまでもなく、それは、キリスト教の十字架が古来からの異教のシンボルに由来することを読者に印象づけるためである。

『論じる』は、結局、タイアクが考えてもいないこと、否、彼の考えとはまったく反対のことを、タイアクの書物の一部を引用しながら、論述しているのである。

誰かが、ある人の主張と正反対のことを他者に説明するために、その人の言説の中から、自分の主張に合うところ一部だけを利用したなら、そうされた人は、どのように感じるだろうか。仮に、筆者が、ものみの塔協会の出版物の一部を引用して、ものみの塔協会が三位一体を支持しているかのような印象を人々に与える書物を書いたなら、証人の方々はどのように思うだろうか。『論じる』の執筆者がしていることは、まさにそのようなことなのである。

協会は、次のような三段論法を使ってこの問題を論じている。

十字架は、異教のシンボルとして使われていた。

背教したキリスト教は十字架を主張している。

従って、十字架を主張するキリスト教は異教的である。

しかし、ここにもまた、議論のごまかしがある。まず、異教のシンボルとされる十字架は、必ずしも、キリスト教の十字架と同一ではない。エジプトのクルクス・アンサータにしても、バビロンのタンムズにしても、キリスト教の十字架の形態ではない。前者はその上に円がのっており、後者はT字形である。従って、その形態からは、キリスト教とのつながりを立証することはできない。

さらに、キリスト教が十字架をシンボルにしたのは、異教とはまったく無関係な出来事に由来することを考慮しなければならない。初代のクリスチャンたちは、キリストの死がもたらす恵みを宣言するために、十字架をシンボルにした、という事実である。従って、キリスト教のシンボルを異教のシンボルと関連づけることは、たとえ、両者の形態が類似していたとしても、間違っている。

いろいろな形の十字架が異教において用いられていたことは事実であろう。だからと言って、そのことをもって、即、キリスト教の十字架と異教との間に何らかの関連があった、と結論づけるのは、短絡的である。なぜなら、キリスト教の十字架は、キリストの死を宣教するために用いられたシンボルであって、異教の系譜をたどる必要はないからである。

タンムズの神に起源？

ものみの塔の出版物は、タンムズの神について、次のような論理を展開する。

バビロンのタンムズ神は十字架によって象徴された。キリスト教がシンボルとしている十字架は、そのタンムズの十字架と関わりがある。だから、キリスト教の十字架は異教に由来し、偶像崇拜となる。

果たして、この主張は正当なのか。検証してみよう。

まず、協会出版物が、タンムズ神と十字架の間に深い関係があったとしている記述を紹介しよう。例えば、『ものみの塔』誌は、次のように述べている³⁹。

「十字は、キリストが来る数世紀も前から、インド、中国、ペルシャ、エジプト、そしてもとよりバビロンの異教徒が使っていました。直立の十字は、バビロニア人の神タンムズの象徴でした。また古代ローマにおいては、太陽神ソルのシンボルとしても使われました。この種の十字は、タンムズ神の頭文字「T」の原形でした。」

³⁹ 『ものみの塔』1964年10月1日号、587頁。

ここでは、タンムズ神がTという十字に象徴された、と断言している。しかし、そう主張する根拠を挙げていない。重要なのは、歴史的な証拠である。

さらに、他の『ものみの塔』誌は、エゼキエル書 8 章 14 節に出てくるタンムズ神と十字架を結び付けている⁴⁰。

「エホバの宮にすわり、バビロニアのバックス、タンムズ神のために泣いた背教のユダヤ人の女にとって、十字架は神聖なる象徴であつたに違いありません。これらの女たちは、実際にはバビロンを建設した強力な狩人ニムロデのために泣いていたのです。」

この『ものみの塔』誌の執筆者は、タンムズ神のために泣いた女にとって、「十字架は神聖なる象徴であつたに違いありません」と推測している。しかし、筆者の知る限り、エゼキエル書 8 章 14 節のタンムズ神と十字架と結び付けて説明している注釈書は一冊もない。

タンムズ神が十字架と関係があつたという歴史的証拠はない。協会出版物の辞典、『洞察』や『聖書理解の助け (Aid to Bible Understanding)』でさえ、「タンムズ」の項において、十字架との関わりは一言も述べられていない。

協会が、十字架とタンムズ神とを結び付ける根拠として挙げる書物は、バインによる『新約聖書用語解説辞典』である。『目ざめよ!』は、次のように述べている⁴¹。

「新約聖書用語解説辞典はさらに明確に、十字架は『古代カルデアにその起源を有し、タンムズ神の象徴(その名の最初の文字で、神秘的意味の付されたタウの形)として用いられた』と述べています。ですから、十字架は明らかにキリスト教以前のものです。」

ここに指摘されている『新約聖書用語解説辞典』とは、むろん、バインの辞書のことである。その辞書が、十字架とタンムズ神とを関係づけていることは確かである。しかし、残念ながら、バインは、そう主張する根拠を提供していない。バインの辞書は、一般の読者のために解説したポピュラーな書物である。従って、いつでも詳しい資料を提供しなければならないというわけではないが、一般に定説として認められていないことを記す場合には、その根拠を提示する必要がある。上記のバインの主張はまさにこのケースである。ところが、バインは一つの文献も挙げていない。この辞書の評価については、後でふれる(107-111頁参照)。

タンムズ神とは無関係

筆者は、タンムズ神と十字架とを結び付ける歴史的資料を探している。残念ながら、今のところ、その両者を結び付ける歴史的証拠を確認できない。しかし、筆者がそう主張するだけでは、議論はかみ合わずに終わってしまう。そこで、ものみの塔協会が主張するように、タンムズ神はTというシンボルによって表され、その形象は何らかの崇拜の対象となっていた、という仮説をとりあえず認め、議論を進めることにしよう。

もし、タンムズ神がTというシンボルによって表され、そのシンボルが崇拜されていた場合には、協会が説くように、キリスト教の十字架のシンボルとタンムズ神のシンボルとの間に、関係があつたことになるのか。

そう考えるには無理がある。というのは、もし、キリスト教の十字架がタンムズ神と関係があつたのであれば、キリスト教の十字架は、十字ではなく、Tの字の形でなければならない。あるいは、Tの形から

⁴⁰ 『ものみの塔』1965年2月1日号、89頁。

⁴¹ 『目ざめよ!』1989年1月22日号、22頁の「十字架はバビロンに由来しているか」というコラム参照。

十字の形に変化した理由を説明する必要がある。十字によって、タンムズ神を象徴したとは考えられないからである。バインでさえ、タンムズ神はT字で表されたと述べている。

さらに、キリスト教に十字架が取り入れられていくプロセスの中で、タンムズ神への信仰がどのように影響を与えたのかを歴史的資料によって説明しなければならない。協会出版物は、コンスタンチヌス大帝が太陽神の崇拝者であったことを述べているが、タンムズ神への信仰との関わりについては触れていない。協会が、キリスト教とタンムズ神との関連性を主張する以上、協会には両者を結び付ける歴史的証拠を提供する責任がある。それは、むしろ、コンスタンチヌス大帝であっても、彼以外の誰であってもかまわない。その証拠を示さない限り、キリスト教の十字架のシンボルをタンムズ神のT字形のシンボルと結び付けて説明するのは、単なる空想にすぎず、説得力はまったくない。

クルクス・アンサータ

次に、エジプトのクルクス・アンサータについて考えよう。クルクス・アンサータとは、T字の上に円がのっている図形で、エジプトではいろいろなところで使われていた。協会出版物は、このクルクス・アンサータは、性崇拝の象徴だった、と繰り返し説明している⁴²。

「エジプトの彫刻や絵画には、輪頭十字と呼ばれる神聖な象徴が実によく出て来ます。このいわゆる生命のしるしは上端に卵形の取っ手の付いた“T”の字に似ており、これは多分、男女の生殖器の結合した状態を表わしていたのでしょう。エジプトの神々はしばしば、輪頭十字を手を持った姿で描かれています。第2巻、530ページの写真。」

この記事は、クルクス・アンサータが「男女の生殖器の結合した状態」を表わしていると推測している。しかし、実は、そのことは確かではない。エジプトに限らず、古代のさまざまな社会において、いろいろな形の十字架がシンボルとして用いられているが、それらを男女の生殖器と結び付けて解釈している古代の歴史学者を、筆者自身は、見つけることができなかった。

このエジプトのクルクス・アンサータについても、上の円形は永遠を表わし、下のT字は命を表わす、と解釈するのが一般的である。この点に関し、二つの辞書の見解を紹介しておこう。まず、協会出版物もよく引用する『アメリカナ百科辞典（1988年版）』である。

「古代エジプト人は、T字形の十字架を、その上に来るべき生命のしるしとしての円をつけて使っている。この形は、クルクス・アンサータとして知られているが、生命のシンボル（タウ）と永遠のシンボル（円）とを結び付けたものである。タウがどのようにして生命のシンボルになったかは分からない。フェニキヤ人やアッティカ人にとっては、その同じシンボルが聖なる知恵という概念を意味している。十字の下に円が置かれた場合には、『正統的な』意味においての『善』を意味した。このような円の使用法は、最終的には、心を代表するようになった。円や月形と絡ませて描かれている十字架は、古代の人々によって、天文学的なシンボルとして用いられている。」

もう一つ、これもまた協会出版物がしばしば引用する『国際標準聖書辞典』の見解を紹介しておこう⁴³。

「エジプトにおいて、後期石器時代からキリスト教の時代に至るまでのさまざまな標本が出てくる。エジプトの象徴においては、Tの十字架が一般的で、その形態はエジプトの十字架とさえ言われている。エジプト人の間では、十字架は、神的なものと永遠の命のシンボルであった。スペイン人の征服者は、インカ人やアズテック人によってシンボルとされた十字架を発見した。それは多分、4つの季

⁴² 『洞察』第一巻、607頁。

⁴³ 『国際標準聖書辞典』、827頁。

節、あるいは、4つの方位を表すのかも知れない。」

この解説によれば、「エジプト人の間では、十字架は、神的なものと永遠の命のシンボル」だったのである。『アメリカナ百科辞典』も『国際標準聖書辞典』も、エジプトのクルクス・アンサータを男女の生殖器と結び付けてはいない。

カットナーの書物の悪引用

しかし、証人たちは、H・カットナー著『性崇拜の歴史概説』（ロンドン、1940年）の16、17頁（英文）を引きあいに出して、反論するかも知れない⁴⁴。そこには、次のように記されている。

「エジプトでは至る所で石碑や墓に種々の形の十字架が見られる。多くの権威者はそれらを男根〔男性の性器を表わしたもの〕もしくは交合の象徴と見ている。・・・エジプトの墓では、男根像のそばに輪頭十字〔上端に輪または取っ手の付いた十字架〕のあるのが見られる。」

しかし、この引用もまた、誤解を与える不正確なものである。実は、省略された・・・の部分に次のような文章が入っている。

「Baring-Gould is of the contrary opinion and refuses to identify the cross with the phallus.」

「バーリング・ゴULDは、反対の意見であり、十字架を男根と同一視することを拒否している。」

この省略された部分は、『論じる』が紹介している説に対して、反対意見を紹介している箇所である。従って、この部分を省略してしまうと、著者カットナーが論じていることが正確に伝わらなくなる。カットナー自身がどちらの見解を支持しているのかは、はっきりしないが、どちらであったとしても、『論じる』が省略した部分は、省略してはいけない箇所である。その部分を飛ばして読むと、執筆者の論述を完全に誤解することになるからである。

さらに、カットナーの書物は、『論じる』が引用している文章の後に、次のようなことを述べている。この箇所も、私たちの議論にとっては重要な部分である。紹介しておこう。

「The question of their connection is still hotly disputed. That the cross was a sacred sign long before Christ is supposed to have died upon one is conceded by Baring-Gould, for he believes that the cross formed a portion of that primeval religion, traces of which exist before the whole world among every people.」

「両者の関係は、未だ、熱い議論が続いている。十字架は、キリストがその上で死なれたと思われるのだが、その時よりはるか以前から、聖なるしるしであったことはバーリング・ゴULDによっても認められている。というのは、彼は、十字架が『原始宗教のある部分を形作っており、その痕跡は、全世界が始まる前から、すべての民族の間に存在している』と信じているからである。」

この文章は、『論じる』が断定的に紹介している性と十字架の関係には異論があり、それは現在もホットな議論が展開されていることを明らかにしている。『論じる』の執筆者は、この部分をも引用しなければならない。なぜなら、『論じる』が断定していることは、現在も議論の渦中にあると述べているからである。この部分まで引用しなければ、『論じる』の執筆者は、自説を弁護するために、都合のいい部分だけしか紹介していないと批判されても仕方がない。

『論じる』は、なぜ、この部分を引用しなかったのか。単にスペースがなかった、というだけではないと思う。二つの理由が考えられる。

一つは、むろん、クルクス・アンサータを性的結合と関連付けさせたかったからである。

⁴⁴ 『論じる』、219頁参照。

もう一つは、上記の文章に、「十字架は、キリストがその上で死なれたと思われるのだが」という表現が出てくることである。自説を弁護するために用いている書物が、イエスの刑具は十字架であったと明言していることを知られたくないのは、当然であろう。

以上のようなことを考慮するなら、協会がカットナーの書物を悪引用している、と判断しても間違いとは言えないであろう。

しかし、カットナーの書物は、50年以上も前のものである。現代の宗教学者や考古学者の間には、筆者が調べた限り、『洞察』や『論じる』のように、クルクス・アンサータを男女の結合を表していると考えている学者はいない。ホットな議論はすでに終わり、協会の主張を支持する人はいなくなった、と判断してよいのではないかと思う。

むろん、筆者の見落としがあるかも知れない。従って、最近の歴史学者の中で、協会が説いている見解を支持している書物や論文があったら、教えていただきたい。喜んで検証させていただく。

悪引用をする理由

では、協会は、なぜ、これほどまでに、クルクス・アンサータを性崇拜と関係づけることにこだわるのか。『ものみの塔』誌は次のように述べている⁴⁵。

「さらに、百科事典は、古代エジプトにおいて、十字がみだらな性崇拜の象徴となっていたことを明らかにしています。エジプト人の用いた十字はアंक（クルクス・アンサータ、取手のある十字）と呼ばれ、これはT字形の頂上に楕円形の取手をつけたものであり、男女の生殖器を表わしています。イスラエル人は、異教の象徴である、この陰茎十字を家の中に持ち込みませんでした。異教のエジプトにおけると同じく、ラテンアメリカなどにおいても陰茎型の使用はさかんです。「T」の字をかたどって建てた教会堂もあります。ホンジュラスの聖ペテロ寺院中央会堂のとびらには十字と楕円が使われています。古代エジプトのミイラを収めた墳墓には多数の十字が使われましたが、今日の墓地は、十字や楕円付きの十字さえ数多く見られます。」

この記事は、性崇拜を象徴する十字を、教会堂や墓地の十字架と結び付けて論じている。つまり、十字は歴史的に性的な汚れがつきまとったシンボルなので、そのような十字架を使っている教会堂あるいは墓地もまた、汚れたものである、そう言いたいのである。

同じような主張が、4年後の『ものみの塔』誌においても見られる⁴⁶。

「クルクス・アンサータと呼ばれるエジプトの十字架は、上部に輪がついていました。この組み合わせは男女の生殖器を表わすものでした。この十字架の女性の象徴すなわち、ヒンズー教でヨニと呼ばれる輪について、O・A・ウォール著『性の性崇拜』の359頁にこうしてされています。『クルクス・アンサータ（柄のついた十字架）は、インド、アッシリア、バビロン、エジプトからスウェーデン、デンマーク（古代北欧）および西欧大陸に至るまで世界中で用いられた・・・それはエジプト人のT型十字章すなわち生命力の象徴である。それは女性のヨニと男性のT字型十字架の結合を表わす。』これらの事実を照らしてみる時、建物に十字架をつけ、宗教的礼拝に十字架を用いる教会は、異教の崇拜を行なっていることとなります。異教化された崇拜が真の神の是認を得ることはありません。すべてこのようなバビロンの崇拜から離れることが必要であり、真をもって創造者を崇拜する人々と交わることが必要です。黙示 18:4。」

⁴⁵ 『ものみの塔』1964年10月1日号、587頁。

⁴⁶ 『ものみの塔』1968年5月15日号、318-19頁

ここでもやはり、クルクス・アンサータが性崇拜と結び付けられている。

ところで、筆者は、ウォールの書物を探したが、見つけることができず、ここに記されている内容を確認することができなかった。しかし、そう言っていたのでは、議論にならない。そこで、上記の『ものみの塔』誌の記述がウォールの見解を正しく伝えている、との前提で論じることしよう。

この記事の中で「これらの事実を照らしてみる時」と述べていることに目をとめていただきたい。つまり、クルクス・アンサータが男女の結合を表わしていることこそ、「建物に十字架をつけ、宗教的礼拝に十字架を用いる教会は、異教の崇拜を行なっている」根拠だ、というのである。

このような論理がおかしいことは、誰でも理解できる。もう一度、ゆっくり読んでいただきたい。エジプトのクルクス・アンサータが何を象徴しているように、教会堂に十字架がシンボルとしてかかげられたのは、イエスの死を重要視した結果である。クルクス・アンサータと教会堂の十字架の間には、何の関連もない。

ガルニア大佐の書物からの悪引用

協会は、クルクス・アンサータの異教性を繰り返すことによって、十字架が持つ汚れを人々に印象づけ、その十字架をシンボルに持つキリスト教世界は異教的で汚れた組織である、と説得したいのである。このことは、『論じる』が、J・ガルニア大佐の『死者の崇拜』（ロンドン、1904年、226頁、英文）という書物から、次のような文章を引用していることにも見られる⁴⁷。

「エジプトの祭司たちや神官長を務める王たちは、太陽神の祭司としてのその権威の象徴として、手に・・・『輪頭十字』の十字架を持っており、それは『生命のしるし』と呼ばれた。」

この引用にも、またまた問題がある。実は、ガルニア大佐は、同書の225頁で、次のように述べている。

「十字架につけられた罪は救いである。そのようにすることができる力が得られるのは、ただ一つの十字架による。その十字架とはキリストの十字架である。」

つまり、執筆者は、キリストの十字架は異教に見られるさまざまな十字架とはまったく異質のものである、と主張していたのである。

筆者は、上記の文章を読んだとき、ほんとうにびっくりした。『論じる』が、ガルニア大佐の見解を完全に誤解していることを知ったからである。否、誤解ではない。『論じる』は、イエスの十字架は異教に由来するという協会の主張を弁護するため、ガルニア大佐の書物を悪用したのである。ガルニア大佐は、キリストの十字架とエジプトのクルクス・アンサータとは本質的に違うと主張しているのに、協会は、同氏の著書を用いて、両者が関係あるかのように、まったく反対のことを教えているのである。

『論じる』が扱っているテーマ「イエスの十字架」に関するガルニア大佐の見解は、筆者が紹介した225頁の文章の中にある。従って、『論じる』は、そちらの文章こそ紹介しなければならない。ところが、全然関係がない文章を引用している。ある人の文章を引用することによって、その人の見解とは異なった意見をもっているかのような印象を与えることは、絶対に避けなければならない。通常、そのような論述方法は許されない。エホバの証人の世界ではかまわないのだろうか。一般の社会では、そんなことをすれば、いっぺんに信用を失ってしまうのだが。

コンスタンチヌス大帝のときに起こったこと

ものみの塔協会はコンスタンチヌス大帝のときに、異教に由来する十字架が教会に入ってきた、と教え

⁴⁷ 『論じる』、219頁

る。十字架を異教に求めることには問題があるが、コンスタンチヌス大帝の頃に、十字架のシンボルがキリスト教の中に広まっていった、ということは事実である。この点について、『国際標準聖書辞典』が述べていることを紹介しておこう⁴⁸。

「新しい意味が加わった。それはクリスチャンの宗教の第一のシンボルになった。そして、キリスト教芸術においていろいろ工夫された形態に仕上げられた。しかしながら、十字架がキリスト教信仰の公のシンボルとして制限なく使われるようになったのは、コンスタンチヌスの時以降である。」

従って、次のような協会出版物の記述は、表現の細かな点で問題がないわけではないが、基本的には了解できる⁴⁹。

「この有名な話の主人公はコンスタンチヌス大帝です。その時以降、ローマ・カトリック教は同帝国の国教となり、特権や人気や力を急速に拡大してゆきました。それと同時に十字架が同教会の公の象徴となり、十字架は次第に宗教建造物を飾るようになり、丘や山、四つ辻や公の広場などに立てられました。家の壁や、幾百万もの人々の胸元を飾るようになりました。」

あるいは、次のような記述も同様である⁵⁰。

「西暦 312 年；今のフランスと英国の地域を支配していたコンスタンチヌスは、義兄弟に当たるイタリアのマクセンティウスと戦うために出かけました。その途中、『これによって征服せよ』という意味の『ホック・ウィンケ』という語が記された十字架の幻を見たと言われています。そして勝利を得た後、その十字架を自分の軍隊の軍旗にしました。後にキリスト教がローマ帝国の国教となったとき、十字架は教会の象徴となりました。」

その 3 頁後の「キリストの受難を描いた芸術作品に見られるような十字架は、コンスタンチヌスの時代以前にはなかったという点で、今やほとんどの学者の意見は一致している」⁵¹という言明も、そのまま受けとって差し支えないと思う。

コンスタンチヌス大帝と異教の関係

しかし、次のような文章になると、かなりの行き過ぎが見られる⁵²。

「異教の多くの習わしは、ローマ皇帝コンスタンチヌスのいわゆる改宗の後、“クリスチャン”の間に導入されました。『コンスタンチヌスの時代以降、十字架を象徴として用いることはキリスト教世界全体に広まり、程なくして様々な形の敬意がそれに示されるようになった』と、宗教史家のエドウィン・ビーバンは自著『聖像』の中で述べています。そこから、他の形の偶像崇拜への道が開かれました。同書は次のように述べています。『十字架の象徴に敬意をささげる習慣が入って来たのは、恐らく絵画や像に敬意がささげられるようになる前であろう。コンスタンチヌスがラバルム [十字架を組み入れた軍旗] で範を示すまで、十字架そのもの・・・はキリスト教の記念碑にも、宗教美術の中にも見いだせない。』

コンスタンチヌス以降、さまざまな十字架の象徴が用いられるようになったことは、確かであったとしても、それを「異教の多くの習わし」と結び付けたり、「偶像崇拜への道が開かれた」とまで言うのは、言いすぎである。さらに、「十字架そのもの・・・はキリスト教の記念碑にも、宗教美術の中にも見いだされ

⁴⁸ 『国際標準聖書辞典』 827 頁。

⁴⁹ 『目ざめよ！』 1984 年 9 月 22 日号、12 頁。

⁵⁰ 『ものみの塔』 1987 年 8 月 15 日号、21 頁。

⁵¹ 『ものみの塔』 1987 年 8 月 15 日号、24 頁。

⁵² 『ものみの塔』 1988 年 8 月 1 日号、4 頁。

ない」という文章もまた、不正確である。1～3世紀のキリスト者の墓地に十字架が刻まれていることは、考古学的発見からも明らかだからである。

上記の文章では明言されていないが、協会の主張の中で一番問題なのは、コンスタンチヌス大帝の時に導入された十字架のシンボルを、太陽崇拝と結び付けて解釈することにある。例えば、『目ざめよ！』は、コンスタンチヌス大帝の十字架を太陽崇拝に関連づける人がいる、と述べている⁵³。

「興味深いことに、コンスタンチヌスが空に見たとされ、のちに自分の軍隊の旗じるしとして用いた十字架はラテン十字架ではなく、 というしるしでした。このしるしについては、太陽崇拝（コンスタンチヌス自身は太陽崇拝者であった）と関連づける人も、ギリシャ語の「キリスト」を表わす最初の二つの文字、X（キー）およびP（ロー）から成るモノグラムと関連づける人もいます。その時以来、『十字架の兵士たち』によって数々の悪らつな残虐行為がなされた十字軍のような、非クリスチャン的な軍事活動に正義という雰囲気を加味するため、十字架が頻繁に用いられてきました。」

ここには、十字架とコンスタンチヌスの太陽崇拝とを関連づける人のいることが紹介されている。しかし、それが誰であるかは述べられていない。筆者は、コンスタンチヌス大帝の見た十字架を太陽崇拝と結び付けて解釈している書物を協会出版物以外、見いだすことができない。むしろ、筆者が見落としている可能性もある。従って、断定することは避けなければならないが、コンスタンチヌス大帝のときに導入された十字架と太陽崇拝とを結び付ける、という協会の解釈を支持する歴史学者はいない。

コンスタンチヌスに対するおかしな議論

1987年の『ものみの塔』誌は、コンスタンチヌス大帝の十字架が太陽崇拝と深い関係があったことを強く示唆している⁵⁴。

「また、コンスタンチヌスの“見た”十字形が、実際にキリストの処刑に用いられた道具を表わしていたとする証拠もありません。コンスタンチヌスがすぐ後に鑄造した多くのコインに刻まれていたのは、“P”を上に重ねたX形の十字印でした。W・E・バインの『新約聖書用語解説辞典』は、『コンスタンチヌスがキリスト教の擁護者となるきっかけになった幻の中で見たと言ったキーという文字、すなわちXは、[ギリシャ語の]「キリスト」という語の頭文字であり、[処刑用の道具としての]「十字架」とは関係がなかった』と述べています。しかし実際には、この型の十字印は、太陽を表わす異教の象徴とほぼ同じです。」

ここでは、コンスタンチヌスが見た幻の十字架は、「太陽を表わす異教の象徴とほぼ同じ」と結論づけられている。しかし、ここで展開されている論理はきわめておかしなものである。『新約聖書用語解説辞典』の執筆者バインは、コンスタンチヌスが見た十字架の幻は、キリストが実際にかけられた十字架ではなく、キリストのギリシャ語の頭文字X（キー）に関係している、と声明している。従って、バインの辞書の主張をそのまま受け取るなら、コンスタンチヌス大帝が見た幻は、キリストと関係がある、と結論づけなければならない。

さらに、この『ものみの塔』誌は、「“P”を上に重ねた」と述べているが、それはギリシャ語の「ロー」という文字のことで、キリストをギリシャ語表記する場合の二番目の文字である。ということは、コインに刻まれた十字印は、キリストの最初の文字と二番目の文字とを組み合わせて作られたもので、キリストそのものを表している。

⁵³ 『目ざめよ！』1984年9月22日号、13頁。

⁵⁴ 『ものみの塔』1987年8月15日号、22頁。

にもかかわらず、この『ものみの塔』誌の記事は、突然、「しかし実際には、この型の十字印は、太陽を表す異教の象徴とほぼ同じです」と、それまでの論述とはまったく無関係の、否、否定してしまうような結論を出してしまっている。読者は、この論理の飛躍に気づかれたらどうか。キリストを表すギリシャ語の二文字「キー」と「ロー」を組み合わせたしるしが、太陽（あるいは太陽崇拜）と関係があったことを示す証拠は、どのような歴史的資料にも存在しないのである。

このようなおかしい論述は、普通の書物では決して見られない。証人ではない一般の読者が、協会出版物は何を言おうとしているのかよく分からない、とこぼすのは、一見論理的に記述されているかのように見える記事が、実際には、論理的ではないことにある。上記の引用部分もその典型的なものである。

記述の仕方、不正確な論理、といったことは横に置いておこう。今、問題にしなければならないのは、コンスタンチヌス大帝の十字形が太陽崇拜と関係があったかどうか、ということである。残念ながら、協会出版物は、その証拠を提示していないし、そのように主張している学者や書物を明らかにしていない。ただ、「関係があった」と、断言するだけである。これでは、証人仲間には通じない、ひとりよがりの主張にすぎない。協会は、そのように主張したいのであれば、歴史的な証拠を挙げる責任がある。

ハドソン報告による弁明は有効？

『ものみの塔』誌は⁵⁵、「コンスタンチヌスの改宗、どんな宗教に」というタイトルの記事を掲載している。その中で、ローマ帝国の硬貨を研究したスタンレー・A・ハドソンの報告が紹介されている。ハドソンによれば、コンスタンチヌス大帝は、改宗後においては、次第に、硬貨の像に異教的な題材を取り上げなくなるのだが、太陽神ソルの像だけは例外だ、という。このような現象に対し、ハドソンは、改宗が徐々に行われた結果か、あるいは、ソルをイエスと混同した結果かの、どちらかだろう、と推測している。

ところが、『ものみの塔』誌は、この報告を取り上げ、何の根拠も示さずに、一方的に、ソルをイエスと混同した結果であるという後者の見解を採用する。そして、コンスタンチヌスの信仰は、「イエスの名のもとにソルを崇拜する混合主義だった」と、議論を展開してしまう。

コンスタンチヌスが、もともと太陽崇拜者であったことは、広く知られている。しかし、皇帝がキリストの幻を見てから、キリスト信仰に対してどのような経緯をたどったかは、未だ不明の部分も多い。筆者は、ハドソンの研究を確認するため、いくつかの大学図書館を調べたが、現在のところ、ハドソンの論文を確認できていない。従って、上記の『ものみの塔』誌の記事については、コメントできる立場にはない。

ただ、この記事は、コンスタンチヌス大帝の太陽崇拜と硬貨の像との関係を問題にしているだけで、イエスの十字架との関連性を論じたものではない。従って、本書が問題にしている、コンスタンチヌス大帝の太陽崇拜と十字架との関係に関し、何らヒントを読み取ることはできない。

もし、ハドソンの論文が確認できたなら、あらためて議論させていただくことにする⁵⁶。

協会は、十字架がタンムズ神やクルクス・アンサータなどと関係があった、と主張している。もし、それが事実であるなら、タンムズ神やエジプトの性崇拜とコンスタンチヌス大帝との接点がなければならない。コンスタンチヌスが、タンムズの神を信じていたとか、クルクス・アンサータを使っていたという証拠があれば、協会の主張には説得力が出てくる。しかし、そうでない限り、協会の主張は、単なる思いつきに過ぎない。協会は、コンスタンチヌスの十字架が、タンムズ神、エジプトの性崇拜、あるいは太陽崇拜と関係があったことを立証する責任がある。現在のところ、その証拠は一つもない。協会出版物もその

⁵⁵ 『ものみの塔』1990年1月15日号、7頁。

⁵⁶ 協会出版物が引用する文献は、出典不明のものが多く、引用文献を調べることは外部の研究者にとっては、きわめて困難である。

証拠を挙げていない。とすれば、「イエスは杭にかけられたにもかかわらず、コンスタンチヌスのときに、異教の信仰の影響によって十字架が持ち込まれ、キリスト教が偶像崇拝者になってしまった」という協会の主張は、協会が勝手に作りあげた創作（ストーリー）と見なす以外にない。

5. バインの辞書について

辞書や辞典類を参照するとき、その道の権威者によるものを使用しなければならない。これは常識である。しかし、協会出版物は、自分たちの主張に合うような文献を捜し出し、それを引用する。その文献がどれほど正確なものか、一般に信用されているのか、少数意見に過ぎないのか、時代遅れの見解ではないのか、などといったことは問題にしない。とにかく、自説に都合がよければ、それでよいのである。

例えば協会出版物は、しばしば、バインの『新約聖書用語解説辞典』を引用して、イエスが架けられたのは十字架ではなく杭であったと主張する。はたして、この辞書はどれほど信頼されているのか。

バインの書物に対する一般的評価

まず、最初に、バインの『新約聖書用語解説辞典』について、一言述べておきたい。

バインの辞書は、専門家を対象としたものではなく、一般の読者向けに書かれた通俗的な辞書である。それは、ある種の聖書解釈を前提としており、その独特な聖書解釈の原理はすべてのキリスト教会に受け入れられているわけではない。特に、学術的な正確性を期して記された書物ではないので、ギリシャ語の解釈論争において、バインの『新約聖書用語解説辞典』を根拠に論じる学者は今日いない⁵⁷。

むろん、このことは、バインの辞書が無益だということではない。ギリシャ語について深い知識のない聖書研究者が、聖書を原語で学ぼうとするときには、それなりに役立つ。しかし、意見の対立を検証するため、あるいは学術的な論争に用いるには不十分な辞書である。バインの辞書に対するボーマンの次の言葉は、残念ながら、当たっている⁵⁸。

「一般に、バインの辞書は、福音的なクリスチャンの間では評価されているが、この事柄（十字架）においては、明確に間違っている。」

バインが、ものみの塔協会が主張するように記述しているとするれば、このボーマンの評価は正しい。しかし、筆者自身は、バインの文章を繰り返し読みながら、そこまで言う必要はないのではないかと、という気がしている。というのは、バイン自身は、イエスが杭にかけられたと考えていたのではなく、十字架だと考えていた節が見られるからである。

バインの主張点

では、バインの主張を、あらためて、紹介しておこう。以下はバインの文章を協会が翻訳したものである⁵⁹。

「スタウロスとは主としてまっすぐな杭を指す。それに犯罪人は処刑のため釘付けにされた。この名詞も、杭に留めるという意味の動詞スタウローも、元々は、教会の用いている2本の梁材を十字に組み合わせた形とは区別されていた。後者の形は古代カルデアにその起源を有し、同国およびエジプトを含む隣接した国々において、タンムズ神の象徴（その名の最初の文字で、神秘的意味の付されたタウ

⁵⁷ このような評価は、筆者の個人的なものではなく、すべてのギリシャ語学者、聖書学者も賛同するはずである。

⁵⁸ Robert M. Bowman, *Understanding Jehovah's Witnesses*, Baker Book House, Grand Rapids, Michigan, 1991, p.144.

⁵⁹ 『参照資料付き聖書』、1769頁。

の形)として用いられた。西暦3世紀の半ばまでに、諸教会はキリスト教の幾つかの教理から逸脱するか、それをこっけいなものにしてしまった。背教した教会制度の威信を高めるため、異教徒が、信仰による再生なしに教会に受け入れられた。それらの者には異教の印や象徴を引き続き用いることが大幅に認められた。こうして、タウつまりTがキリストの十字架を表わすのに用いられるようになり、多くの場合に横棒を下にずらした形が使われた。」

上記の文章を、協会のように、イエスの刑具は杭だったが、タンムズ神の信仰から、十字架になってしまった、と読むことは可能である。しかし、筆者には、原文を読んだ印象であるが、バインがはっきりそのように言っている、とは思えない。というのは、バインは、十字架刑が古代バビロニア帝国時代から存在していたと明言しているからである。それは、西暦前7世紀のことである。

しかも、上記の引用の後ろに続く「スタウロス」の字義説明において、マタイ27章32節を挙げ、「十字架もしくは杭自体」と解説している。さらに、バインは、同辞書の「木 (tree)」という項目において、「クシュロン」を「十字架、スタウロスの木、ローマ人が処刑される人物を釘付けにした立てられた柱または杭」と説明している⁶⁰。

これらの語義説明の中で、バインは、十字架 (cross) を最初に紹介している。ということは、バイン自身は、杭ではなく、十字架刑に処せられたと考えていた、と仮定した方がよさそうである。つまり、バインは、さまざまな十字架模様がキリスト教のシンボルに採用されていく状況を解説しているのであって、イエスがかけられた刑具そのものを問題にしているわけではない、ということである。

では、『参照資料付き聖書』が引用している先の文章は、何を言いたかったのか。筆者は次のように推測する。

「今日の教会に見られるさまざまな十字架模様がキリスト教のシンボルとして使われはじめたのは3世紀半ば以降のことである。その頃教会は、キリスト教信仰のある信条から離れていくという背教的な動きがあり、かつて異教の神のシンボルとされていた十字架が、キリスト教のシンボルになることが可能になってきた。」

以上のバインに対する理解は、むろん、筆者の解釈である。英文でもあいまいなところがあるので、協会の解釈が不可能だというわけではない。筆者の解釈に立つにしても、協会の立場をとるにしても、断定的な言い方は避けた方が賢明であろう。

むろん、バインの辞書がどのようなことを述べているのか、その記述をどう解釈するのかということは、本質的な問題ではない。より重要なことは、協会が述べていることが歴史的資料に符合するかどうか、ということである。バインの主張がどのようなものであれ、十字架に関する協会の教えは、歴史的資料とは一致しない。

6. 十字架を持つことについて

ものみの塔協会は、十字架を所持することは偶像崇拜に通じていると教える。はたして、このような批判は正しいのだろうか。考えてみたい。

刑具を持ち歩くだろうか

『論じる』は、「崇拜さえしなければ、十字架を大切に持っていかまいませんか」という質問に対し、

⁶⁰ バイン著、前掲書、第4巻、153頁。

次のように答えている⁶¹。

「もし、親しい友人が偽りの訴えに基づいて処刑されたなら、あなたはどう感じますか。処刑された刑具の複製を作りますか。それを大切に持っているでしょうか。それとも、そのような物にはふれようともしないでしょうか。」

『ものみの塔』誌は、十字架に崇敬の念を示すのは、「イエスの殺害を称揚することになる」とまで、述べている⁶²。

「1世紀のクリスチャンはイエスの処刑の道具を神聖なものとはみなさなかつたでしょう。その道具に崇敬の念を示すのは、その上で犯された悪業、つまり、イエスの殺害を称揚することになったでしょう。」

そしてさらに、続く頁において、近親者に対して用いられた処刑の道具の像を作って、崇拜の対象にはしないだろう、と詰め寄る⁶³。

「あなたの最愛の友が偽りの非難を受けて処刑されたとしたら、あなたは、(絞首刑に用いた縄であれ、電気椅子であれ、銃殺隊の銃であれ) 処刑の道具の像を作り、その複製に口づけし、その前でろうそくをともし、それを神聖な飾りとして首の周りにかけるでしょうか。そんなことは考えられません。」最後に、最近の『ものみの塔』誌から紹介しておこう⁶⁴。

「イエスを釘付けにするために使われた道具は、決して偶像視するべきではなく、嫌悪の情をもって見るべきでしょう。」

もし、十字架を、キリストが処刑された刑具としてだけとらえるなら、上記の論述は、それぞれもつともである。だれでも、「そのような物にはふれようともしない」し、「その道具に崇敬の念を示すのは、その上で犯された悪業、つまり、イエスの殺害を称揚することになる」であろう。あるいは、「その複製に口づけし、その前でろうそくをともし、それを神聖な飾りとして首の周りにかける」ことなど「考えられない。むしろ、「嫌悪の情をもって見るべき」ものであろう。

しかし、このような十字架理解は、新約聖書が教えているものだろうか。明らかに違っている。本書の最後に(186-191頁)、新約聖書における十字架の意味を解説しておいた。もし、信仰者が十字架に対して新約聖書が教えていることをそのまま受けとめるなら、『論じる』や『ものみの塔』が批判していることはまったくの見当外れになる。

協会は、イエスの杭を死刑の道具としてしか理解しない。そして、その刑具のシンボルである十字架を持ち歩くことはおかしいと断罪する。十字架を、そのように貧しくとらえるエホバの証人の信仰は、新約聖書の信仰とは無縁なのである。

像にされていることの問題

キリスト者の中には、十字架を身に着ける人もいる。日常生活の中で十字を切る人もいる。多くのキリスト教会の会堂には、一番目立つところに、十字架が掲げられている。その理由は、イエスの処刑そのものを意識しているからではない。イエスの贖いの死がもたらすすべての恵みをいつでも覚え続けたいからである。

ところで、十字架は、ある形を形成している物体、像であることが多い。エホバの証人の中には、その

⁶¹ 『論じる』、220頁。

⁶² 『ものみの塔』誌 1989年5月1日号、25頁

⁶³ 前掲書、26頁

⁶⁴ 『ものみの塔』1995年5月15日号、20頁。

ことを取り上げ、「いかなる像も刻んではならない」という十戒の第二戒を破るものだ、と批判する人がいるかも知れない。

しかし、この批判は当たらない。それは、二戒の読み込み過ぎだからである。十戒の二戒は、あるものを刻んではいけない、と命じているわけではない。もし、そうであるとするなら、彫刻物はすべて偶像になってしまう。二戒が戒めているのは、崇拜としての対象物を刻んではならない、ということである。

キリスト者で、十字架を神聖視したり、偶像視したりする人は、筆者が知る限りいない。もし、そのようなことをしている人があれば、むしろ、偶像崇拜の罪を犯していることになる。しかし、単に飾りとしてつけているのであれば、それは偶像視していると見なす必要はない。

例えば、ある人が、あるデザインのネックレスをつけていたとする。それを見た別の人が、ネックレスやそのデザインを拝んでいると非難をはじめたらどうだろうか。あるいは、部屋の飾り棚に、ある陶器を飾ったとする。それを見た別の人が、陶器を拝んでいると非難したらどうだろうか。そのような批判が当て得ていないことは明らかである。

あるものを身につけているとか、飾ってあるというだけで、偶像崇拜に関わっていると即断してはならない。どのような意味で身につけているのか、どのような思いで飾ってあるのか、きちんと調べてから判断する必要がある。キリスト教会の十字架に疑念を持っている人は、教会に行き、キリスト者たちが十字架に対して崇拜行為をささげているかどうか尋ねてほしい。もし、偶像視しているなら、非難されるのは当然である。

シンボルを持つこと自体への批判

あるいは、そのようなシンボルを持つこと自体がいけない、と主張する証人がいるかも知れない。シンボルはシンボルである。むしろ、シンボルが指し示すものこそ重要である。もし、シンボルそのものがいけないと主張するのであれば、ものみの塔聖書冊子協会が「塔」をシンボルマークに使っていることも非難されなければならない。『ものみの塔』誌は、毎号、そのタイトル名の左肩に、協会のシンボルマークである「塔」を描いているのではないか。

もし、その「塔」の図柄を取り上げ、証人たちは塔を拝んでいる、あるいは、そのようなシンボルマークは十戒の第二戒を破るものである、などと非難する人がいたなら、証人の方々はどのように反応されるだろうか。そのようなことを言う人は、ものみの塔の信仰のことを少しも理解していない、私たちにとって、塔が何を意味しているのか、よく調べてから批判していただきたい、そう言われるに違いない。

キリスト教世界が、十字架をシンボルマークに使っているのは、ものみの塔協会が塔をシンボルマークに使っているのと同じである。そのような話を、筆者がある証人に話したとき、その証人の方は、「協会が『塔』をシンボルマークとして使うことは、教会が『十字架』をシンボルマークに使うことほどおかしいことではない」と反論された。ほんとうにそうだろうか。

初代のキリスト者たちは、協会がシンボルマークとして使っている「塔」を重要視していただろうか。クリスチャン・ギリシャ語聖書（新約聖書のこと）には、「塔」は何度出てくるだろうか。一度も出てこない。では、十字架は何度ぐらい出てくるだろうか。数えてみるとよい。

言うまでもなく、何をシンボルマークとして使うか、それは自由である。会社でも、学校でも、国家でも、ボランティアのグループでも、皆それぞれが自分たちのマークをもっている。そのマークに、何らかの意味を込め、シンボルマークとして使っているのである。だから、協会が「塔」をシンボルマークに使おうと、他のものを使おうと、それはそれで自由である。

ただ、シンボルマークというのは、そのグループが一番大切にしているものを表象するのが普通である。

キリスト教会は、イエスの贖いの死を、その信仰の中心に置き、十字架をシンボルマークとした。協会は、時を見張っているということが信仰の中心であると考え、塔をシンボルマークに据えた。どちらも、新約聖書の信仰をよりよく表しているのか。その判断は読者に委ねよう。

7. 組織のリーダーへ

ものみの塔協会は、「十字架か、杭か」という問題について、たくさんの発言をしてきたが、歴史的に確かなことはほとんどない。

例えば、十字と関係するさまざまなシンボルマークについてである。たしかに、それらのマークが、キリスト教以前から、異教の信仰において用いられてきたのだが、バビロンのタンムズの神は、Tの十字であり、エジプトのクルクス・アンサータは、T字の上に円がのせられていたものである。また、コンスタンチヌスが見た十字架の幻というのは、「キー」に「ロー」というギリシヤ文字を加えたものである。それらのいずれもが、伝統的にキリスト教会が採用してきた形の十字架ではない。

しかも、それらのしるしが、キリスト教会のシンボルになったという歴史的つながりをたどることはできない。そのことを示す証拠はないし、協会出版物も、その証拠を挙げていない。

ということは、そのような異教の信仰を、キリスト教会が十字架をシンボルマークとした背景と見てはならない、ということである。そのような複雑な歴史的背景を詮索する必要はない。教会の中で十字架がシンボルマークになったのは、イエスが十字架の上で死なれたという単純な歴史的事実にあったのである。それ以上でも、それ以下でもない。

「イエスは十字架上で死んだのではない。杭であった」などと言い出したので、協会は、十字架の起源をどこかの異教に求めなければならなくなってしまったのである。協会が、歴史的に確証できない事柄をいろいろ並べて説明しなければならないのは、事実と違うストーリーを作りあげてしまったからである。事実とは違うストーリーを、歴史的事実として証明することは至難の業である。作られたストーリーに合致する証拠を提供するためには、資料を改ざんしたり、資料に特殊な解釈を施さねばならない。あるいは、他の人の証言を悪引用して、自説を弁護しなければならないのである。

そのような無意味な作業から解放される唯一の道は、事実を事実として、単純に認めることである。そうすれば、一切の操作は不要になる。インターネットの使用を警告したり、情報を制限する必要もなくなる。本書なども、エホバの証人の必読書として推薦すればよいのである。

あらためて、組織のリーダーの方々に語りかけたい。証人たちの無知を利用した詭弁や悪引用をやめ、歴史の事実に戻っていただきたい。無駄な弁解をやめ、正直になっていただきたい。「イエスは、杭ではなく、十字架にかけられた」と言えばよいのである。それは、難しいことではない。箴言4章18節を引用して、「新しい光が照った」と説明すれば、それですべての証人たちは納得してくれるのだ。

一人一人の証人たちは、それぞれの歩みの中で正直に生きようと、皆一生懸命である。そのような真摯な心を、組織のリーダーたちは裏切ってはならない。組織のリーダーたちが犯している一番大きな過ちは、組織外の人々に対してではなく、組織内の人々に対してである。

では、イエスの刑具が、杭ではなく、十字架だったことを、次章において、初代教会の教父たちの文献から確認しよう。

第三章 初代教会教父の文献から

イエスが処刑された道具は、十字架だったのか、それとも杭だったのか。この問題に関し、初代教父たちが残した文献は、どのような証言をしているのだろうか。本章では、この問題を考察してみよう。教父たちは、イエスの十字架についてさまざまな証言をしている。しかし、本書が問題にしているのは、イエスの刑具の形態についてである。従って、十字架一般に関する教父たちの証言ではなく、十字架の形態について何らかの示唆を与える記述に限定して調べたいと思う。

しかも、その教父たちの証言は、コンスタンチヌス大帝の時以前、つまり、西暦 312 年以前のものでなければならない。というのは、協会は、コンスタンチヌス大帝のときに、十字架が導入されたと教えているからである。

しかし、ここでは、3 世紀半ばまでのものに限定しておきたいと思う。なぜなら、協会は、自説の最終的な拠りどころとしてバインの辞書をもち出すが、そのバインは、3 世紀半ばぐらいから、十字架がキリスト教のシンボルになっていった、と述べているからである。

1. イグナチウス

イグナチウス（西暦 30-107 年）は、1 世紀後半に活動した教父である。ということは、時代的には、使徒たちとほとんど変わらない。とすれば、その証言の歴史的価値は、当然、新約聖書と同等である、と考えてよい。

そのイグナチウスは、偽りの兄弟たちについて、もし彼らが父のものであるなら、「十字架の枝として現れる」と述べている⁶⁵。

イグナチウスは、クリスチャンたちを「十字架の枝（英語では branches と複数）」と表現しているが、そのことは、イエスの刑具が一本の杭ではなく、十字架だったことを前提として議論を進めている、といえよう。

2. バルナバの手紙

バルナバの手紙は、西暦 130 年頃、異邦人キリスト者によって記されたものである。その手紙は、アブラハムが 318 人の奴隷に割礼を施したこと（創世記 14 章 14 節参照）について触れ、次のような説明をしている。

「最初に割礼を施したアブラハムは、霊においてイエスを予見し、三文字の教義を受けて、割礼を施したのである。というのは、『アブラハムは自分の家に属する 18 人および 300 人の男に割礼を施した（創世 17:22、27 および 14:14）』とあるからである。彼に与えられた知識とはそれでは何で（あった）か。彼が、先ず 18 人と述べ、それから間をおいて 300 人と言っている点に注目しなさい。18（を構成しているのは、（数値が）10 である I（イオター）と、（数値が）8 である H（エーター）である。それは（それゆえ）イエス（＝イエス）となる。また T（タウ）（数値は 300）で（あらわされる）十字架が恵みを意味しているので、および 300 人、とあるのである。それはそれゆえ、二文字でイエスを、また一文字で十字架をあらわされる。」⁶⁶

バルナバの手紙は、この解説において、十字架が T によって表わされる、と明言している。この T（タ

⁶⁵ Epistle of Ignatius to the Trallians, The Ante-Nicene Fathers, vol.1, Wm. B. Eerdmans, Grand Rapids, Michigan, 1985, p.71

⁶⁶ 『使徒教父文書』講談社、1974 年、41-2 頁。

ウ) への言及は、イエスの十字架が一本の杭ではなく、Tの形をしていたと前提して、初めて意味が通じる。

協会は、十字架がTと関わりがあると主張するが、その場合、タンムズ神と結び付ける。ところが、バルナバの手紙は、同じTに結び付けても、贖いの恵みと関係づけている。前者であれば、異教との関係が出てくるが、後者であれば、そうではない。むしろ、神ご自身の祝福が背景となっている。

さらに、このバルナバの手紙は、イスラエルの民がレフィディムにおいてアマレクと戦ったときに、モーセが手をあげた記録を取り上げている。そして、このモーセが手をあげたときの姿は、十字架を表わしている、と述べている⁶⁷。

読者は、出エジプト記 17 章 11-12 節を開いて、モーセが祈っている姿を想像していただきたい。そして、そのモーセの姿は、伝統的な十字架に一致するのか、それとも、協会が主張する一本の杭の方に符合するのか、判断していただきたい。

3. 殉教者ユスチヌス

ユスチヌス（西暦 110-165 年）は、2 世紀前半に活躍した教父である。彼の発言の中から十字架と関わりがあると思われるものを拾ってみよう。

『第一弁明』より

まず、『第一弁明』の中からである⁶⁸。

『「ひとりのみどり子がわれわれのために生まれた、一人の若者がわれわれに与えられた。まつりごとはその肩にある。』話が進むとより明らかになるのですが、これは彼が磔にされ、そこに肩をつけた十字架の力を示すものです。』

ユスチヌスは、イエスが磔にされた際、イエスの肩が十字架につけられた、と述べている。協会が教える一本の杭の場合には、イエスが肩を「杭」につけたということになり、不自然である。この表現は、イエスの刑具が伝統的な十字架であったという前提に立つなら、はじめて理解できる。

ユスチヌスは、その『第一弁明』において、さらに、次のようなことも述べている⁶⁹。

「しかしいわゆるゼウスの子らの誰を例にとろうと、十字架刑に処せられるという点は悪霊共も決して模倣いたしませんでした。なぜならそれは、彼らには理解できなかったからです。と言うのも十字架に関するすべての言葉は、既に明らかにしましたように、シンボルによって語られているからです。』

「かの預言者が予告いたしましたように、これこそは彼の力と支配を示す最大のシンボルであり、そのことはわれわれの眼で知覚する所からも示すことができます。世界にあるすべてのものを考察していただきたいと存じます。一体万物は、十字の形なしに秩序と連関を保ちうるものでありましょうか。』

「まず海を渡るためには、帆柱と呼ばれるこの勝標（トロパイオン）が、舟のなかでしっかりと立っていないければなりません。また土はこの形状によらなければ耕すことができません。この形状の道具によらなければ、掘削人は仕事ができせんし、工人も同様です。』

「さらに人間の形が言葉（ロゴス）なき動物と異なる点は、人間の場合、身体の直立方向と直角に両

⁶⁷ 前掲書、43 頁。

⁶⁸ 『ユスチヌス』教文館、1992 年、50 頁。

⁶⁹ 前掲書、73 頁。

手が伸びていることであり、顔では、額から隆起していてそこを生き物の息が通る、鼻というものを持っていること以外にありません。そしてこの形状は、他ならぬ十字架形を示しているのです。」

「次の言葉は預言者を通じて語られたものです。『われわれの顔の前の息は主キリストである。』」

「あなたがたローマ人の間で用いられているシンボルも、この形状の力を示しています。つまり申し上げているのは、軍旗と勝標（トロパイオン）の形のことなのです。これによって至る所あなたがたの進軍があり、そこに力と支配の印を示しているのです。たとえあなたがたがそれと気付かなくとも、なさっているのは実はこのことなのです。」

以上のような発言の中で、ユスチヌスは、イエスの十字架の重要性を強調するため、いろいろな例を紹介している。例えば、帆柱が立っている船、土を耕す道具、直立して両手を直角に伸ばしている人間、顔に見られる額と鼻、ローマ軍の軍旗、勝標（トロパイオン）などである。

それぞれの例え一つ一つを、具体的に想像していただきたい。ここに記述されているすべての例えが、イエスの刑具は伝統的な十字架の形であり、協会が教える一本の杭ではないことを確信させるはずである。

なお、ここに出てくるローマ軍の「軍旗（exillum）」とは、T字の形をした支柱に旗がつけられたものを指す。また、「勝標（tropaeum）」とは、敵に勝利した場合、その敵の甲冑、武器などを束ねて吊り下げるためのものである。その形態は、T字であった。ローマ軍は、ギリシア以来、ローマ時代においても、勝利の標徴としてそれを戦場に立てることを習慣としていた。

『トリフォンとの対話』より

さらに、ユスチヌスが著した『トリフォンとの対話』から、十字架の形態を暗示するような箇所を拾ってみよう。その書物は、キリストのメシア性に関し、旧約聖書を予型論的に解釈しているが、焼かれた羊の中にイエスの十字架を見ている⁷⁰。

「完全に焼くように命じられた羊はキリストが経験された十字架の苦しみのシンボルである。焼かれた羊は、十字架の形のように焼かれ、並べられた。というのは、一本の串は下の方から頭に向かって刺し通されている。羊の足が付けられているものは、背中を横切っている。」

ユスチヌスは、過越の羊が縦の串と横棒によって焼かれたことに言及している。そして、もし、キリストが過越の子羊であるなら、キリストの死は、過越の羊の焼かれ方を正確に表すものでなければならない、と主張する。むろん、このような発言は、伝統的な十字架の形とすることによって、初めて意味がある。協会が説く一本の杭では、意味をなさない。

『トリフォンとの対話』においても、バルナバの手紙と同じように、イスラエルの民がアマレクと戦ったときのことが取り上げられている⁷¹。

「民がアマレクと戦うとき、ヌンとヨシュアが戦いを導き、モーセ自身は手を伸ばして神に祈っていた。フルとアロンは、一日中その手を、疲れたときに下ろさないように支え続けた。もしモーセが、十字架の模倣であるしるしのどの部分であっても、諦めてしまうなら、モーセの書に書いてあるとおり、人々は打ちのめされてしまったのだ。もし、モーセがその形に留まっているなら、アマレクはそれに応じて破れたのだ。勝利したものは、十字架によって勝利したのだ。」

ユスチヌスは、モーセが手を伸ばして神に祈ったときの姿を、「十字架の模倣であるしるし」と述べ、モーセの勝利は、十字架に他ならなかった、と解説している。

⁷⁰ “Dialogue with Trypho”, Ante-Nicene Fathers, vol.1, p.215

⁷¹ 前掲書、244頁。

読者の皆さん、もう一度、考えていただきたい。モーセが手を伸ばした (stretching out both hands) とは、どのような姿を想像できるだろうか。ユスチヌスが、「フルとアロンは一日中その手を、疲れたときに下ろさないように支え続けた」と記述したとき、一本の杭を想像する方がよいか、それとも、伝統的な十字架の形を想像する方が適切なのか。説明の要はないであろう。

さらに、ユスチヌスは、『トリフォンとの対話』の中で、一角獣の中に十字架を見ている⁷²。

「一角獣の角は十字架を描いたタイプ以上の事実や絵であることは、誰でも、証明することができるだろう。というのは、一つのは、垂直に立てられており、そこからもっとも高い端の部分が角になっている。もう一つの串は、それについていて、それらの角が一つの角に結び付いているかのようになりその端が両サイドに現れる。」

ここに描かれている「一角獣」は、先が分かれている角をもっている獣のことである。その獣の角が一本の杭を表象しているのではなく伝統的な十字架であることは、論を待たない。

最後に、『トリフォンとの対話』の中から、青銅の蛇について触れている部分を引用しておこう⁷³。

「彼は、青銅の蛇をつくり、それを軍旗に掲げ、打たれた人々に見るように命じた。彼らがそれを見たとき、彼らは救われた。神が最初に呪われ、イザヤが述べているように大きな剣で切られた蛇は、当時の人々を保つものとして理解されるべきであろうか。あなた方の教師のように、しるしと見ないで、愚かにもそのまま受け取るのだろうか。むしろ、軍旗を受難のキリストを覚えるために言及されたものと考えたべきではないか。モーセはイエス (ヨシュア) と名づけられた方とともに、手を伸ばすことによってあなた方民のための勝利を成し遂げたのであるから。」

ここで、言及されているのは、民数記 21 章 4-9 節に出てくる「青銅の蛇」である。彼は、その蛇が掲げられたのは軍旗であり、それはキリストの十字架を覚えるためのものであった、と解説している。ユスチヌスが軍旗というとき、それはローマ軍の軍旗のことで、T字形の旗竿を指している。ということは、イエスがかけられた木は、一本の杭ではなく、十字架だったことを示している。

4. シビュラの託宣

2世紀半ばに記されたとされる『シビュラの託宣』は、バルナバの手紙、ユスチヌスにならって、モーセの祈りの姿について、次のように記している⁷⁴。

「モーセは、聖なる腕をさし伸ばし、信仰によってアマレク人に勝って、彼の原型となった。」

「彼の原型」とは、イエスが処刑されたことを指す。「腕をさし伸ばし」と表現されている以上、その刑具が伝統的な形の十字架だったことは間違いない。

また、同じ書物の2頁後には、次のような文章が出てくる⁷⁵。

「主は以前の通りの肉の形で、まず御自分の仲間たちによってはっきりと見られる。そして、手と足に、御自身の肢体に穿けられた四つの傷あとをお示しになるであろう。」

この記録は、イエスの手と足には「四つの傷あと」があることに言及している。むろん、これは、イエスのそれぞれの手足に、一本ずつの釘が打たれ、4本の釘の傷あとが手と足のそれぞれにあった、という意味に解釈するのが一番自然である。協会の出版物が描く一本の杭では、イエスの手は重ね合わされて、一本の釘で打たれている。それでは、この文章に合致しない。伝統的な十字架の場合には、両手に釘が打

⁷² 前掲書、245頁。

⁷³ 前掲書、255頁。

⁷⁴ 『聖書外典偽典6』教文館、1991年、348頁。

⁷⁵ 前掲書、350頁。

たれているので、この記事に符合する。

5. ペテロ行伝

『ペテロ行伝』は、西暦 180-90 年頃に記された書物である。その 38 章には、次のような文章が出てくる⁷⁶。

「そこでわたしの愛する人々よ、今聞いている人もまた将来聞くであろう人たちも、あなたたちは最初の過ちを振り切って帰って来なければなりません。なぜならキリストの十字架にのぼることは適切なことなのです。このかたは唯一無比の広げられたことばであり、このかたについて霊は（次のように）語っています。『キリストはことば、神の響き（エコー）でなくて何であろうか』と。ことばとはわたしがかけられているこのまっすぐの木であり、響きというのは横木・・すなわち人間的性質のことなのです。そして中央あたりで横木を垂直の木に固定している釘というのは人間の回心であり、悔い改めです。」

この記録は、ことばが縦の木で、響きが横の木である、と述べている。しかも、「中央あたりで横木を垂直の木に固定している」と描いている。ここで言及されている「キリストの十字架」が、一本の杭ではなく、伝統的な形態であることは、議論の余地はない。杭を主張する協会は、この文献が記述していることに反証しなければならない。

6. パウロ行伝

『パウロ行伝』は、200 年頃、小アジアにある教会の長老によって書かれたと言われている。その中に、次のような文章が出てくる⁷⁷。

「刑の執行人たちは木々をひろげ、それらを積みあげた火葬壇に登るようにと彼女に命じた。彼女は両手をひろげてみずから十字架の形をつくりながら木々の小山に登り、そして執行人たちは火をつけた。ところが大きな炎が赤々と燃え上がったのに、火は彼女に触れようとはしなかった。」

ここには、「両手を広げてみずから十字架の形をつくる」という表現が出てくる。それは、明らかに、十字架が伝統的な形態であったことを前提としている。この記述においても、十字架の形態が、一本の杭のようなものだったか、あるいは、伝統的なものだったかは、議論の余地は残されていない。

7. トマス行伝

『トマス行伝』は、3 世紀半ばまでには、シリア語で出来上がっていた、と言われている。その第 5 行伝には、次のような記述がある⁷⁸。

「彼はこう言って、パンに十字架のしるしをつけて、それを裂き、分配しはじめた。」

ここで、パンにつけられたしるしとは、「罪と永遠の過ちのゆるしのため」のものであった。それは、イエスの死を記念していたが、もし十字架が一本の杭であったなら、一本の線と記したはずである。十字架が二本線の交わる十字形であったからこそ、「十字架のしるし」と記されているのである。

また、『使徒ユダ・トマスの行伝』には、「十字架のしるしを切る」ということがしばしば出てくる。例えば、次のような文章である⁷⁹。

「そして、彼は若者に言った、『おまえの心をわれらの主に広げなさい。』そして、彼は十字架のしる

⁷⁶ 『聖書外典偽典 7』教文館、1993 年、86 頁。

⁷⁷ 『新約聖書外典』講談社、1974 年、167 頁。

⁷⁸ 『聖書外典偽典 7』教文館、1993 年、275 頁。

⁷⁹ 『新約聖書外典』講談社、1974 年、239 頁。

しを切り、彼に言った。」

ところで、「十字架のしるしを切る」とは、どのような行為なのか。それは、今日のあるキリスト者たちが十字を切るのと同じである。筆者自身は、そのような習慣の中にいるわけではないが。

さらに、次の文章を読んでいただきたい。⁸⁰

「しかしユダは、神をほめたたえ、頭の中央に（十字架の）しるしを切った。そして彼は、少しの油で自分の鼻腔をしめし、いくらかを自分の耳の中に入れ、頭上に（十字架の）しるしを切ったのである。」

読者の皆さん、ここに記されているとおりに、やってみてはいかがだろう。指をまず鼻腔に入れ、次に両耳に、そして、最後に頭上に十字架のしるしを切るのである。その場合、「十字架のしるし」は、どのような形になるだろうか。一本の縦線にするのが自然だろうか。それとも、いわゆる十字だろうか。

8. テルトゥリアヌス

『護教論』より

テルトゥリアヌス（西暦 200-250 年）は、3 世紀前半に活躍した最も有名な教父の一人である。彼は、『護教論』の 12 章において、次のように述べている⁸¹。

「諸君はキリスト教徒を十字架や柱にかけておられる。だが、どの神々の像をとってみても、神像になるにはまず粘土でつくられ、それから十字架や柱の上につけられているようである。」

ここで、テルトゥリアヌスは、十字架と柱を並列に並べて言及している。テルトゥリアヌスの時代には、キリスト者は、十字架によっても、柱によっても処刑された、ということである。柱とは、言うまでもなく、一本の杭のことである。すると、十字架は別の形態だったことになる。テルトゥリアヌスは、イエスの刑具は十字架だったと証言しているのだから、一本の杭ではなかったことになる。

同じ書物の 16 章において、テルトゥリアヌスは、次のように述べている⁸²。

「垂直に据えられた木材はみなひとしく十字架の一部である。もしわれわれが十字架をおがむとすれば、部分的でない神を全体として拝んでいるのである。さきにわれわれはあなた方の神々の起源は彫刻家達によって十字架の上に作られたものに始まるといった。一方あなた方もまた、勝利の女神達をおがんでおられる。戦勝（トロパエウム）の柱の場合も、その中身は十字の柱になっている。軍隊ではローマの宗教として軍団のしるしがおがまれ、それにむかって誓いをたてあらゆる神々よりもそれを重んじている。それにごたごた付けられている神々の像は、処刑の柱（十字架）の飾りである。皇帝旗や将軍旗の上につける布切れも、その柱の衣である。わたしはあなた方の心やりをたたえたい。十字架が飾りもなく、裸のままおがまれるのをあなた方は欲しておられないのだから。」

この文章は、3 世紀の初め頃、キリスト者が「十字架を拝む者」と誤解され、非難されていたのを弁明するために記されたものである。ここには、「垂直に据えられた木」は「十字架の一部である」と述べられている。ということは、十字架は、一本の柱以上のものだったことを示唆する。

また、ここで「戦勝の柱」と訳されているトロパエウムは、ユスチヌスの書物で「勝標」と訳されたもので、その形態が十字架だったことはすでに述べた。

「軍団のしるし」と訳されている「スイグナ」という言葉は、ローマの軍団にとっては、軍旗のような意味を持っていた。しかし、それは旗ではなく、各種の像やシンボルを横棒に付けたものである。これも、

⁸⁰ 『新約聖書外典』講談社、1974 年、194-5 頁。

⁸¹ 『テルトゥリアヌス』、教文館、1987 年、37 頁。

⁸² 前掲書、46 頁。

テルトゥリアヌスによれば、十字架の形態を示唆するものだった。

将軍旗とは、ローマ将軍の陣地、あるいはローマの船団につけた赤旗のことである。「布切れ」は、帆船のマストの先につける帆を指す。テルトゥリアヌスは、それを「柱の衣」(クルクス・ストラ)と呼び、その中に、十字架の姿を見ていた。ということは、十字架は、一本の杭ではなく、伝統的な形態であったことを示唆する。

『ユダヤ人への答え』より

最後に、テルトゥリアヌスが、『ユダヤ人への答え』において述べていることに触れておこう。彼は、申命記 33 章 17 節の「野牛の角」がキリストを表わしているとして、次のような解説をしている⁸³。

「角は二つのキリストの性格、裁き主としての力と、救い主としての優しさを示している。それらの角は、十字架の両端である。十字架の部分である船の帆においてでさえ、先端はそのように呼ばれている。マストの中心の柱は、一角獣と呼ばれている。実際、この十字架の力によってこの角の方法によって、今は、世界の国々を信仰によって、地から天に突き上げている。そして、何時の日か、裁きによってその国々を天から地につき落とす。」

ここでは、力と優しさは「十字架の両端」と表現されている。これが十字架の横棒の両端を指していることは、論を待たない。この表現は、十字架を一本の杭としたのでは説明がつかない。伝統的な十字架を想定して、はじめて意味を持つ。

さらにこの記録は、船と帆を十字架に見立てている。この描写もまた、十字架は、一本の杭ではなく、伝統的な形であったことを示唆する。

9. ミヌシウス・フェリクス

3 世紀初期のフェリクス (西暦 210-250) の書物に、異教徒のカエシリウスと、クリスチャンのオクタヴィアスとの議論が出てくる。ローマの弁護士だったオクタヴィアスは、十字架の形について次のように弁護している⁸⁴。

「あなた方の軍旗同様、キャンプの旗などにも、十字架が金ぶちで飾られている。伸ばされたオールによって船が静かに進むとき、突き出た帆によって進むとき、我々は、自然に十字架のしるしを見る。軍事的な輓が外されるとき、そして、人が純粋な心で手を伸ばして神を崇めるとき、それは十字架のしるしである。」

フェリクスは、船とオールの関係、あるいは船と帆の関係の中に「十字架」を見ている。この両方の例えから推測できる「十字架」とは、やはり、伝統的な形態の十字架になる。

さらに、この記録は、「人が純粋な心で手を伸ばして神を崇める」姿の中に、十字架を見ている。筆者は、両手を広げて神を崇めるのを習慣としている友人をたくさん持っている。彼らの姿を想像したとき、一本の杭にはならない。これもまた、伝統的な十字架の形である。

10. 3 世紀後半の文献

協会は、コンスタンチヌスによって、異教のシンボルであった十字架が、キリスト教会に導入された、と説く。従って、協会の仮説を論破するには、4 世紀半ばまでの証言を含めることができる。しかし、このへんでやめておこう。

⁸³ "Answer to the Jews", Ante-Nicene Fathers, vol.3, p.165

というのは、協会は、自説を擁護するために、しばしば、バインの辞書を引き合いに出す。そのバインの辞書は、3世紀半ば頃までに、キリスト教の背教が起り、十字架のシンボルが導入されたかのように記している。この論述を受け入れるなら、3世紀半ばまでの証言には価値があるが、それ以降の証言には意味がない。

例えば、ラクタンティウス（西暦260-330年）は、「彼は十字架の上で手を伸ばされた。彼は彼の翼を、東そして西の方に伸ばされた。世界のどの側からであれ、すべての国民がその元に集められ、平静になる」⁸⁵と述べている。つまり、イエスが十字架の上で、東西に手を広げたことの中に、世界中の民を集める象徴的な姿を読み取っている。

あるいは、ラクタンティウスの文章の中には、サタンが十字架のしるしに対して逃げていくことを述べている箇所もある。

さらに、「ユダヤ人たちは、家の柱の横棒と柱に血を塗った。それは解放のしるしであり、十字架の形だった」⁸⁶と述べ、出エジプトの際に、ユダヤ人が横棒と柱に血を塗った行為を「十字架の象徴」と見なしている。

ラクタンティウスの以上のような論述が、イエスの刑具は一本の杭ではなく、伝統的な十字架だったことを証言していることは明らかである。しかも、ラクタンティウスは、西暦260年頃から330年ぐらいまで生きた教父である。ということは、3世紀後半から4世紀前半の人物ということになる。十字架導入をコンスタンチヌス時代とする協会の立場に立てば、ラクタンティウスのこれらの証言は、痛手である。しかし、バインの証言を重視するのであれば、ラクタンティウスの証言は、すでに背教が起こってからの発言として、拒否されてしまうかも知れない。

教父たちの証言は、これぐらいにしておくことにしよう。

筆者は、教会史の専門家ではない。従って、筆者が当たることのできた初代教会の文献は、ごくごく、僅かなものにすぎない。もし、教父たちの文献を、注意深くくまなく検証するなら、イエスの刑具が一本の棒ではなく、伝統的な十字架の形態であったことを示唆する記述を、他にもたくさん見出すことができると思う。それは、教会史の専門家に委ねることにする。

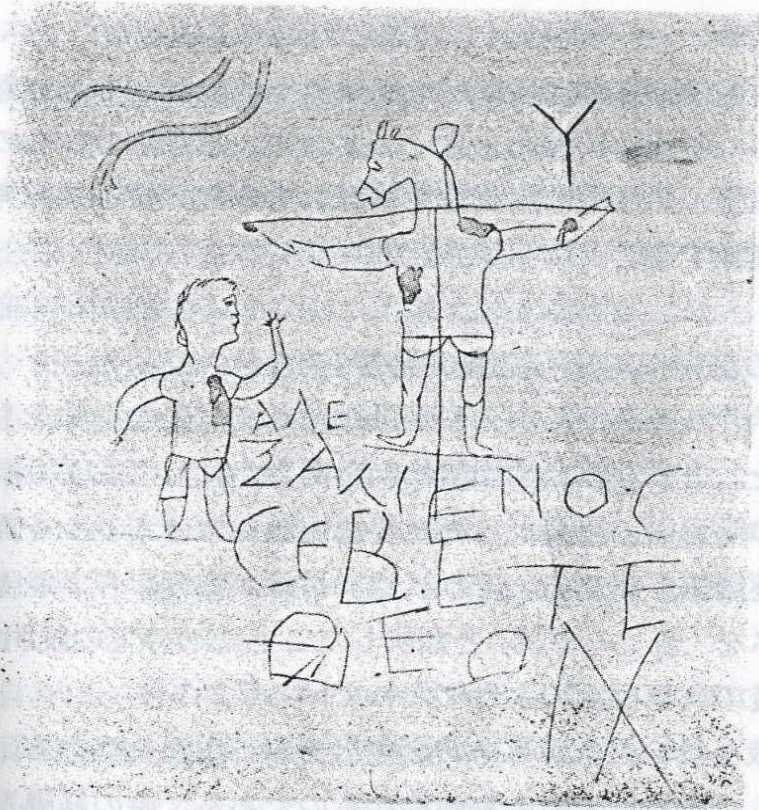
私たちが当面の問題に一応の結論を出すには、これくらいで十分ではないかと思うからである。

⁸⁴ The Octavius of Minucius Felix, Ch.29, Ante-Nicene Fathers, vol.4, p.191

⁸⁵ The Epitome of the Divine Institutes, Ch.51, Ante-Nicene Fathers, vol.7, p.243

⁸⁶ The Divine Institutes, Book 4, ch.26, Ante-Nicene Fathers, vol.7, P.129

新世界訳が、スタウロスを「苦しみの杭」と翻訳したことは、革命的なことである。そのような訳が正しいことは、今後、考古学の発見によって確認されることになる。スタウロスを十字架と翻訳した人は、それが伝統的な十字架であることを証明する責任がある。



124. 十字架の戯書

「十字架の戯書」ジャック・フィネガン著『古代文化の光』

(昭和41年、岩波書店) 354頁より

第四章 考古学の証拠

イエスが掛けられたのは、十字架だったのか、それとも杭だったのか、この問いに答えを見出すため、私たちは、ものみの塔協会の主張、初代教会の証言を検証してきた。続いて、考古学の証拠を検証することにしよう。

考古学の証拠に対する協会の発言

考古学の証拠が、イエスの刑具に対して重要な意味をもっていることを、まず、協会の出版物から明らかにしておこう。

筆者の手元に、協会が1969年に出版した『ギリシャ語聖書王国行間逐語訳』がある。それには、付録があり、ギリシャ語のスタウロスを「苦しみの杭」と翻訳したことについての説明がある。その最後の文章は次のようになっている⁸⁷。

「我々は、これが革命的な翻訳であることを認める。しかし、それはもっとも純粋なものである。時の経過と考古学的な発見は、確かに、そのことが正しいことを証明するだろう。現在であっても、イエスが一本の杭以上のものの上で死んだことを証明するという重荷は、宗教的伝統を主張するすべての人にある。」

この文章が言いたいことは、次のようなことである。

新世界訳が、スタウロスを「苦しみの杭」と翻訳したことは、革命的なことである。そのような訳が正しいことは、今後、考古学の発見によって確認されることになるだろう。スタウロスを十字架と翻訳したい人は、それが伝統的な十字架であったことを証明する責任がある。

ところで、筆者の手元には、改訂された『ギリシャ語聖書王国行間逐語訳』（1985年版）もある。その版の付録は、P・W・シュミットの研究を加えている他は、先の69年版と基本的にすべて同じである。ところが、もう一つだけ違いがある。前頁に引用した部分を、カットしているのである⁸⁸。

この部分が削除されたのは、たまたまの偶然によるものか、それとも、69年以降の考古学的発見の実状を知ってのことかは、知る由もない。ただ、他の部分が基本的に変わっていないのだから、前者ではありえない。やはり、意図的に削除された、と考えるべきであろう。とすれば、協会もまた、最近の考古学の発見が、協会の見解に不利に働いていることを認めざるをえなくなっている、ということである。

筆者自身は、その文章がカットされた背景は、本章に紹介する第五番目の証拠と関係があると推測している。しかし、それと関係があろうと、なかろうと、協会が85年版において、その部分を削除したのは賢明なことだった。考古学上の発見は、69年版が記述したこととは反対の方向に動いていることは確かだからである。

考古学上の証拠が少ない理由

ところで、1世紀前後の著述家たちは、十字架について記述することをためらったようである。十字架は、人類が考え出した最もむごい処刑方法だったのだから、彼らが避けたというのも、理解できないわけではない。しかし、そのような中であっても、考古学は、十字架の刑罰という問題を明るみに出しつつある。『新聖書辞典』は、その辺の事情を次のように解説している⁸⁹。

⁸⁷ 『ギリシャ語聖書王国行間逐語訳』（1969年）、1157頁。

⁸⁸ 『ギリシャ語聖書王国行間逐語訳』（1985年）、1151頁

⁸⁹ 『新聖書辞典』、253頁

「磔の方法については、ローマ帝国の場所によってさまざまに異なっている。当時の世俗の著述家たちは、この最も残忍な品位を落としてしまうような処刑方法については詳しい記録を残すことにしりごみしている。しかし、ユダヤにおける考古学的な作業によって、この問題に新しい光が投げかけられた。」

むろん、考古学的発見は、未だ、僅かなものでしかない。しかも、考古学的な発見は、いつでも不確かな要素を含んでいることをも認めておかねばならない。イエスがつけられた刑具そのものが発見されれば、私たちが扱っている問題は一挙に解決するのだが、そのような期待は現実的ではない。その時代の、その地域における考古学的な発見を忍耐深く探求することによって、イエス時代の十字架について推測する以外、今のところ方法はない。

では、イエスが杭ではなく、伝統的な形態の十字架にかけられたことを予測させる考古学的証拠を5つ挙げ、検証することにしよう。

1. 二百年祭の家

最初は、西暦 79 年に廃墟と化したポンペイの町跡の発掘からである。出土したある家から、金属の十字架の跡が発見された。この発見について、著名な考古学者ポール・マイヤーは、次のように述べている⁹⁰。

「信仰がナッブル湾近郊に広められたのは、この初期の会衆によるものだったかも知れない。というのは、それより少し後には、ヘリキュラネウムの近くにおいてはクリスチャンがいたからである。ベスピウス山の火山による埋葬から逃れたリゾートの町に建てられた一つの家は、はっきりとした金属の十字架の跡を示している。それは、二階の黒こげになった祈祷台の奥の壁に刻印されている。十字架は、魚と同じように古くからのキリスト教のシンボルだったのだ。」

マイヤーによれば、一世紀の半ばには、十字架がキリスト教の信仰のシンボルとして使われていたことになる。マイヤーは、続けて次のように述べている⁹¹。

「二階には、『200 年祭の家』と呼ばれた初期のクリスチャンの礼拝堂があった。白く漆喰が塗られたパネルは、大きな十字架の痕跡を示している。それはすでに取りのけられているが、印を押された寄贈財産として使われたのであろう。その前には、小さな木の祭壇の残存物がある。それはベスピウス山の爆発による溶岩によって黒こげになってしまったが。」

その家とは、クリスチャンの礼拝堂である。小さな木の祭壇とは、聖餐台か、説教台のことであろう。すると、初代教会の最初の頃から、現在の教会堂のように、十字架がシンボルとして掲げられていた、ということになる。

2. エルサレム近郊の納骨堂

次に、エルサレム近郊、オリーブ山のふもと近くにおいて、フランスの考古学者チャールス・クレアマン・ガンネアウが、1873 年に発見した 30 の遺体が葬られた納骨堂を紹介しよう。石でできた長方形の棺には、体の骨が埋葬品と共にそのまま残されていた。そこには、葬られた人の名前がヘブライ語とギリシャ語とで記されていたが、ある棺には、ユダという名前が録され、縦横の長さが等しい十字架が刻まれている。

さらに、イエスという名前が 3 回登場し、その中の 2 回は、十字架と結びけられている。ユダヤ人の第

⁹⁰ First Christians, First Harper & Row, New York, 1976, p.140

⁹¹ 前掲書、141 頁

二の反乱事件以降、この地域にユダヤ人が入ることは禁じられていたので、葬られた年代は、西暦 135 年以降ではありえない。従って、それは、西暦 70-135 年の間のものと推定される⁹²。

この考古学的発見も、1 世紀後半か、2 世紀初頭には、十字架がすでにキリスト教のシンボルとして採用されていたことを証言している。

3. 廃墟の壁画

3 番目は、イエズス会のガルチが、1856 年に、パレスチナの南側の斜面にあった建物の廃墟から発見した壁画である。それはキリスト教信仰をあざける目的で描かれたものである。その壁画は、本書 124 頁に載せてある。

一人の人が、T 型の十字架に結び付けられている。その十字架にかけられた人物の頭は、ろばとして描かれている。十字架の左側には、左手をあげ、崇拝の姿勢を示している一人の人物が描かれている。その右下には、「アレクサメノスは、彼の神を礼拝している」という文字が記されている。

その壁画は、現在、ローマのキルチェリアノ博物館に収められている。作成された年代は、西暦 217 年頃であったと思われる。

この壁画は、クリスチャンたちが、十字架につけられた方を「自分たちの神」として礼拝していたことを示唆している。しかも、その方がつけられた刑具は、T 字形の十字架だった。

この壁画に関し、フィネガンは次のように述べている⁹³。

「パラティヌスの南西側、キルクス・マクシムスの近くに、今日パイダゴギウムの名で知られている建物があるが、これは恐らく宮殿の役所の一つだったものと思われる。その部屋の中のあるものは、牢獄に用いられたものと考えられる。壁には今も、グラフィティ (graffiti) とよばれる、粗雑に書きなぐった絵や文章が一杯にかいてある。その一つで、ガルッチが 1856 年に発見し、現在ローマの教会博物館にあるものが、有名な『十字架の戯書』(図 124) である。この粗い落書き (グラフィティ) は驢馬の頭を持った一人の人間の、十字架上の姿を表している。両足は壇上に支えられ、伸ばした両腕は十字架の横木に縛られている。左手には子供あるいは若者のやや小さい姿が、片手を挙げて崇拝の態度を示している。文字は『アレクサメノスはその神を拝す』と記してある。恐らくこれは、宮殿内のある若いキリスト教徒に向けられた嘲弄を表しているものであろう。この落書きはパウロがローマにいた時より恐らく 150 年位後のもの、すなわち三世紀の初めのものであろうが、これは十字架の言がいかにも多くの者に愚かなものであったかを明瞭に示している (I コリント 1:18)。」

この壁画は、イエスが T 字形の十字架にかけられたこと、そして、イエスは神として崇拝されていたことを示唆している⁹⁴。十字架に掛けられた人物の頭が驢馬に描かれていることは、壁画が、キリスト教をあざけている人々によって描かれたことを示している。この壁画は、2 世紀後半から 3 世紀初頭にかけてのキリスト教信仰の内容が描写されている、と言えよう。

4. 家族の墓

1945 年、ヘブライ大学のユダヤ人考古学博物館の E. L. シュケーニック教授は、ある家族の墓を発見した。2 つの納骨堂には、ギリシャ語でイエスの名前がつけられていた。二番目の方には、4 つの大きな十字架も描かれていた。

⁹² この発見については、Ancient Times, Vol.3, No.1, July, 1958, p.3 に詳しく報告されている。

⁹³ 『古代文化の光』岩波書店、昭和 41 年、368 頁。

⁹⁴ この情報については、Buried History, vol.9, No.2, p.41 あるいは、Ancient Times, vol.5, No.3 March, 1961, p.12 に詳しく紹介されている。

Ancient Times は、次のように述べている⁹⁵。

「シュケーニック教授は、十字架は、『十字架につけよ』という叫びに等しい苦しみの表現かも知れない。どんなに遅く見積もっても、その刻印は、イエスの十字架から 20 年以内のものであろう。」

この墓は、出土した陶器、ランプ、文字の書体から、西暦前一世紀から、西暦後一世紀の半ばまでのものと推測されている。ということは、イエス時代のすぐ後に、キリスト者たちの墓には、十字架がシンボルとして使われていたことになる。

5. 釘の刺さった骨

5 番目は、ユダヤ人の考古学者バシリオ・ザフェリスに率いられたチームが、エルサレム近郊のギバット・ハーミブタル（ラス・エルーマサレフ）において発見した 4 つのユダヤ人の墓である。

その中の一つの納骨堂から、礫になった一人の若者の骨が出てきた。その年代は、そこから出土した土器から、西暦 7 年から 66 年の間のものと推定されている。そこには、イエホハナンという名前が彫り刻まれていた。

この発見に関し、『新聖書辞典』は、次のように解説している⁹⁶。

「その若者の腕（手ではなく）には、釘が横棒に打ちつけられていた。お尻のあたりには、横棒がつけられ、それによって体重が支えられていた。足は、揃えて曲げられ、釘づけられており、その一本の釘がかかとの骨にそのまま残されていた。その釘は 14 センチあり、2 センチのところまで折れ曲がっていた。釘とかかとの骨との間には、1.5~2 センチのアカシアかピスタチオの板がつけられていた。また、釘の折れ曲がった部分には、小さなオリーブの木片が発見された。以上のような証拠から、このケースにおいては、足は、縦棒に釘づけられたのではなく、その縦棒に横板がつけられ、その横板に釘づけられたように思われる。足の骨は、一本は、ひどい損傷を受けており、もう一本は、斧のような鋭い道具でたたかれ折られている。『折られた骨』(crura fracta) は、受刑者の死期を速めることになり、ローマでは、よく行われた（キケロ、Philippicae、13、12）。・・・手首の骨はほとんど損傷されていない。前腕の骨は傷ついているが、それは、十字架に釘づけられたことを意味するのか、それとも、縛られていたのかは決定的なことは言えない。」

協会の飛躍した論理

この発見について、『ものみの塔』は、特別頁を割いて、その研究成果を紹介している⁹⁷。しかし、残念ながら、『ものみの塔』誌は、その発見について正確な評価を下していない。むしろ、学問的に、非常に不正直な取り扱い方をしている。

どういうことか。同誌は、発見後すぐに発表されたハーン教授の試見と、その 15 年後に発表された二人の学者の試見との間に、意見の相違があることを指摘する。そして、学問的には絶対にしてはならないような結論を出してしまったのである。このことを詳しく説明しよう。まず、『ものみの塔』誌の結論部分を紹介する。

「では、ここからイエスの処刑について何がわかりますか。実際にはほとんど何もわかりません。例えば、23 ページで検討したように、イエスがいかなる横木も付いていない垂直の杭の上で処刑されたことはほぼ間違いありません。また、イエスの場合に使用された釘の数まで正確に分かる人は今日だ

⁹⁵ Ancient Times, vol.3, No.1 July, 1958, pp.3-5. また、同誌、vol.5, No.3, March, 1961, p.13 も参照。

⁹⁶ 『新聖書辞典』、253 頁。

⁹⁷ 『ものみの塔』1987 年 8 月 15 日号、28-29 頁参照。

れもいません。」

この記事は、まず、発掘された骨から、磔になった人は足を屈折させて磔になったのであろうという、1970年にニコ・ハース博士が発表した見解を紹介する。

そして、次に、足の骨と釘の長さや形状から、両足は柱をまたぐようなかたちで釘づけられたとする、1985年にジョセフ・ジーアスとエリィーザ・セケレスが発表した見解を紹介する。手に関して言えば、前者は、釘付けられたと発表したのが、後者は、縄で縛られた、と主張している。しかし、両者とも、刑具が伝統的な十字架の形であったことには異論がなかった。

以上のような二つの仮説を紹介した場合、どのような結論を出すのが穏当だろうか。むろん、答えは、最初の見解を支持するか、二番目の見解を支持するか、それとも、判断を留保するかの3つのうちのどれかである。この場合の留保とは、この処刑された人の手や足がどのように十字架に釘付けられたか（あるいは縄で縛られたか）という点については、独断的になるべきではない、という立場である。

ところが、この『ものみの塔』誌の結論は、まったく違う。二つの見解に違いがあるということは、考古学的な研究がいかにかげんなものであるかを示すものである。従って、紹介した二つの見解のどちらかではなく、しかも留保でもなく、協会が主張している一本の杭という見解こそ正しい、と主張しているのである。

信じられないような論理である。

正当な論理による思考を

実は、『ものみの塔』誌が紹介している二つの見解は、一本の杭ではなく、十字架であるという点では、一致している。従って、処刑の方法については、詳細な点で異論があるが、刑具が十字架だったことは、学会で広く認知されていることである、と結論づけなければならない。

しかも、ここで紹介されている研究者たちは、キリスト教世界の学者ではない。背教した（とエホバの証人が信じている）キリスト教世界とは無縁な、真摯なユダヤ教の考古学者たちなのである。彼らが、1世紀のユダヤにおいて、伝統的な形態の十字架を当然のこととして受けとめているという事実を無視すべきではない。

対立意見が存在するから、学問の世界は成り立つ。これは、まったくの常識である。自分とは違う意見を持つ人たちの間に対立意見があるので、結局自分の意見が正しいことになる、などと論じる人がいたなら、学者の間でも、一般社会でも、一笑に付されるであろう。笑われてすむどころか、以降、まったく相手にされなくなってしまうはずである。『ものみの塔』誌がしていることは、そのようなことである。

繰り返して言う。筆者は、ものみの塔協会だから、このような批判をしているのではない。もし、仲間の牧師や教え子がそのような論理を使うなら、直談判して撤回を迫る。彼らに恥をかかせたくないからである。

ただ実際問題として、筆者は、今日までそのようなことをする必要はなかった。過去40余年の間の牧師生活で、そのような友人にも、先輩にも、生徒にも、出会ったことはないからである。出会ったのは、ただ一つのグループ、ものみの塔だけであった。

ここで、筆者は、協会の出版物の執筆者たちと、エホバの証人の方々とを区別して考えている。筆者がこれまで接してきた証人の方々は、道理をわきまえない方々では決してない。ほとんどの方は、論理的で、判断力にも優れている。もし、正確な情報さえ伝えられるなら、ご自分の理性的能力を働かせ、事態を正確に把握できる方々ばかりである。

多くの人々は、マインド・コントロールが人格までを変容させてしまうもの、その人の思考力や判断能

力を奪ってしまうものである、と誤解している。そうではない。カルトのマインド・コントロールとは、ある一定の方向で考えるよう思考の枠組みを人に植え付け、あらゆる情報をその枠組みによって取り入れ、解釈させる、というものである。

従って、一人一人の証人の方々は、エホバの証人になっても、自ら考える力をもっているのであり、日常的な出来事においては自分で物事を判断し、決断している。では、何が問題なのか。組織が教えた事柄については、その教えが成り立つための思考の枠組みを証人たちの脳裏に刷り込み、一切の情報をその枠組みから見るように訓練する。その枠組みに矛盾するような情報には触れないようにしてその枠組みを守るとともに、その枠組みとは違う枠組みに対しては徹底した批判を展開する。しかも、証人たちは、常識的な論理によって思考する自由を与えられていないので、協会の教えが荒唐無稽な論理に基づいていることに気づいたり、抜け出たりすることができない。その思考の枠組みによって情報を解釈して読む限り、組織の教えを疑うことは不可能な仕組みになっているのである。

本書を読んでいるエホバの証人の方々が、組織の提供している思考の枠組みがいかに歪められたものであるかに、気づいてくださるように。

べている。きわめて細かいことだが、トマスが発言の中の「くさ」という言葉に注目していただきたい。釘を表わすギリシャ語「エーロス」は、ここでは単数形ではなく、「エーローン」と複数形になっている。これは、この十字架の両腕にそれぞれ以上の釘が打たれたことを明示している。

ローマの十字架刑の場合、腕は釘で打たれるより、縛られるケ...



Crucifixion

Franz Stuck

J.ラザフォード著『Reconciliation』（1928年）168頁より

第五章 聖書の証言

これまで、イエスの刑具が一本の杭だったのか、それとも、伝統的な十字架だったのかを、協会の出版物の主張、初代教父たちの文献、さらに考古学的発見から検証してきた。最後に、この点に関し、聖書の記述が何らかのヒントを与えていないか、考察してみることにしよう。

聖書こそ、キリスト教会にとっても、証人たちにとっても、もっとも重要な証言であることは論を待たない。

1. 釘の数

まず、ヨハネ 20 章 25 節をお開きいただきたい。新世界訳聖書で読んでみよう。

「そのためほかの弟子たちは、『わたしたちは主を見た！』と彼に言うのであった。しかし彼は言った、『その手に釘の跡を見、わたしの指を釘の跡に差し入れ、手をその脇腹に差し入れない限り、わたしは決して信じない。』」

ここで、イエスの弟子のトマスは、復活されたイエスに対し、「その手に釘の跡を見、わたしの指を釘の跡に差し入れ、手をその脇腹に差し入れない限り、わたしは決して信じない」と述べている。きわめて細かいことだが、トマスの発言の中の「釘」という言葉に注目していただきたい。釘を表わすギリシャ語「エーロス」は、ここでは単数形ではなく、「エーローン」と複数形になっている。ということは、イエスの手には、2 本以上の釘が打たれたことを明示している。

ローマの十字架刑の場合、腕は釘で打たれるより、縛られるケースの方が多かった。しかし、イエスの場合は、トマスの上記の証言から、釘で打たれたと考えるべきである。ルカ 24 章 39 節の証言もまた、この事実を裏書きしている。

ここで、「釘」と訳されている「スパイク」というギリシャ語は、どこにでもある小さな釘ではなく、大変大きなものを指す。そして、釘が複数であるのは、両方の手に一本ずつ、二本の釘が打たれたと解釈するのが一番自然である。ものみの塔の文献が掲載している「杭にかけられたイエスの絵」（本書 34 頁参照）をよく観察していただきたい。両手は合わせられ、その両手は、一本の釘で打たれている。とすると、トマスが証言した釘の数は、協会が主張する一本の杭より、伝統的な形態の十字架を示唆している、と言えるよう。

協会の弁明

協会出版物もこのような批判をよく知っており、次のような弁明を試みている⁹⁸。

「中にはヨハネ 20 章 25 節から、それぞれの手を刺し通すために一本ずつ、合計二本の釘が使われたと結論する人もいます。しかし、トマスが（釘の）複数形を使っているからといって、それをイエスの両方の手が別個の釘で刺し通されたことを示す明確な描写として理解しなければならないでしょうか。ルカ 24 章 39 節で、復活させられたイエスは、『わたしの手と足を見なさい。これはわたしです』と言われました。この言葉はキリストの足も釘付けにされたことを示唆しています。トマスは足の釘の跡については述べていないので、複数形の『釘』という語は、イエスを杭につける際に複数の釘が用いられたことに言及した漠然とした表現だったのかもしれませんが。」

⁹⁸ 『ものみの塔』、1985 年 2 月 1 日号、31 頁。

協会出版物は、自説を守るため、普通では思いもつかない理屈を並べる。上記の箇所もその典型的なものである。『ものみの塔』誌は、わざわざ、ルカ 24 章 39 節を引き合いに出し、トマスの複数の釘は、イエスの手と足に打たれた釘であろう（これもあいまいな表現になっているのだが）と弁解しているのである。

しかし、トマスの言葉のギリシャ語原文は、「彼の手（複数）の中に釘（複数）の跡を見、私の手を釘（複数）の跡に入れなければ」となっている。従って、複数の釘の跡は、あくまでも、イエスの手になければならない。足の釘までもち出すのは、自説を弁護するための苦し紛れの説明である。

2年後の『ものみの塔』もまた、同じような弁明をしているが、いくぶんかニュアンスを変えている⁹⁹。

「イエスの手や腕が縛られただけではなかったということは、後日トマスが『その手（複数）の跡を見・・・ない限り』と述べた言葉から確かに分かります。（ヨハネ 20:25）これは、釘が一本ずつそれぞれの手を刺し通していたという意味かもしれません。また、『釘』が複数であったということは、『イエスの手と足』にあった釘の跡を指していたのかもしれませんが。（ルカ 24:39 をご覧ください。）釘がイエスの手のどこかを刺し通したのは明らかであるとはいえ、その場所は正確には分かりません。」

この記事になると、足の釘という可能性にこだわりながらも、「釘が一本ずつそれぞれの手を刺し通していたという意味かもしれません」と両手（つまり杭ではなく、十字架の形態）の可能性をも認める。2年前の説明に比べ、いくぶんかトーンダウンしているのは、先の弁明があまりにおかしいことに気づき、軌道修正をはかった結果であろう。正確なところは、『ものみの塔』誌の編集者に聞いてみなければ分からないが。

2. 罪状書きの位置

次に、マタイ 27 章 37 節を読んでみよう。

「また彼らは、『これはユダヤ人の王イエス』と記した罪状を彼の頭上に掲げた」

ローマの処刑においては、犯罪人の罪状を人々に示すのが一般的だった。それは、多くの人々に対する見せしめ、という意味があったからである。その慣習に基づいて、イエスの場合は、『ユダヤ人の王イエス』という罪状がかけられた。

ところで、イエスの場合、その罪状書きはイエスの頭上に掲げられた。このことは、イエスの処刑の道具が十字架であったことを示唆する。なぜなら、もし、イエスが一本の杭にかけられたとすれば、罪状書きは、頭上ではなく、手の上になるからである。「イエスの頭上」という表現は、伝統的な十字架の形態を想定した方が、よりピッタリくる。

一本の杭の場合でも、イエスの頭の上に両手があって、その上に罪状書きがくるわけであるから、頭上という表現ができないわけではない。従って、この証言を、協会の「一本の杭」という主張に対する決定的な反証と見なすことはできない。しかし、証拠の一つとしてであれば考慮に値する。

なお、イエス時代の刑具には、T の字の形の十字架が使われることも多かったが、この聖書箇所は、イエスの十字架に限って言えば、そのような形ではなかったことを明らかにしているといえよう。

3. ペテロの死

さらに、ヨハネ 21 章 18 節を取り上げよう。

「きわめて真実にあなた方に言いますが、もっと若かった時、あなたはいつも自分で帯をして、自分

⁹⁹ 『ものみの塔』1987年8月15日号、29頁。

の欲する所を歩き回りました。しかし年を取ると、あなたは手を伸ばし、ほかの [人] があなたに帯をさせ、あなたの望まない所に連れて行くでしょう。」

このイエスの言葉は、次節から、ペテロがどのような死に方をするか、予告したものである。ここで、「手を伸ばす」と訳されたギリシャ語「エクテイノー」は、古代の文献においては、しばしば十字架刑の文脈で使われている。もし、そうであるとすれば、ペテロが手を伸ばす、帯をさせられる、望まない所に連れて行かれる、と言われているのは、それぞれ、ペテロが十字架の横棒の上に手を伸ばすこと、そしてその横棒に手が縛られること、それから処刑場まで連れて行かれること、という当時の十字架刑のプロセスが予告されていることになる¹⁰⁰。

なお、ギリシャ語「エクテイノー」は、新約聖書においても、手を横に伸ばす場合にのみ使われており¹⁰¹、手を上にあげるという意味では使われていない。

以上のことから、上記の聖句は、ペテロの処刑が、一本の棒ではなく、伝統的な十字架によってなされたことを明らかにしている。むしろ、イエスの刑具がペテロの刑具と同じ形態のものだったという保証はない。しかし、ペテロの殉教死はイエスの十字架死を模倣するものだったと解釈するのは自然である。

4. イエスの例え

イエスは、マタイ 10 章 38 節¹⁰²と、マタイ 16 章 24 節¹⁰³において、弟子たちに十字架を負って従うよう、励ましている。

この点について、『ものみの塔』誌も権威ある辞書としてしばしば引用する（正確に言えば、悪引用する）『国際標準聖書辞典』は、次のように説明している¹⁰⁴。

「十字架を負うということについては、さまざまな説明が提唱されているが（TDNT、VII、578-79 頁）、この例えは、罪ある人が自分をつけられる十字架の一部を処刑場に運んでいくというローマの習慣がベースになっている。しかしながら、イエスが十字架にかかれる前に、彼の聴衆がこの隠喩を把握できたかははっきりしない。」

『新聖書辞典』も、同じ解釈に立っているが聞き手の理解度に対しては、より積極的にとらえている¹⁰⁵。

「犯罪者が横棒を運ぶという恥ずべき姿はイエスの聴衆にはよく知られていることだったので、三度も十字架を負うという道について弟子たちに語られた（マタイ 10:38、マルコ 8:34、ルカ 14:27）。」

このイエスの例えは、受刑者が、自分がかげられることになる十字架の一部（横棒）を処刑場まで自らが運ぶ、というローマにおける十字架刑の方法を背景にして語られたものである。それは、プルタークが「それぞれの犯罪者は、自らの罰の一部として、自分の十字架を自らの背中に背負って運ぶ」と述べていることと同じである¹⁰⁶。つまり、イエスは、ローマ世界における十字架を例えに用いたということになる。その十字架が、縦棒と横棒とからなる二本の柱によって構成されていたことは言うまでもない。

5. 担われた横棒

マタイ 27 章 32 節、マルコ 15 章 21 節、ルカ 23 章 26 節は、イエスが十字架を背負って処刑場に行かれた

¹⁰⁰ D. A. Carson 著、The Gospel According to John, Wm. B. Eerdmans Publishing Co, 1991, p.679

¹⁰¹ マタイ 8:3、12:13、12:49、14:31、26:51、マルコ 1:41、3:5、ルカ 5:13、6:10、使徒 4:30、26:1 など参照。

¹⁰² 並行記事は、ルカ 14 章 27 節。

¹⁰³ 並行記事は、マルコ 8 章 34 節、ルカ 9 章 23 節。

¹⁰⁴ 『国際標準聖書辞典』、827 頁。

¹⁰⁵ 『新聖書辞典』、254 頁。

¹⁰⁶ Plutarch, The Divine Vengeance, 554 A/B

ことを記述している。その際、ローマの兵士は、イエスはその十字架を担いきれないのを見て、クレネ人シモンに手助けするよう命じている。通常、その十字架（ギリシャ語スタウロス）は、十字に組まれた十字架と考えられているが、厳密にはそうではなく、十字架を構成している横棒（ラテン語で、この横棒のことを patibulum と呼ぶ）のことである。

ヨハネ 19 章 16 節後半から 18 節にかけての書き方は、イエスが横棒を背負っていかれるようすを的確に表現している。まず、新世界訳を読んでみよう。

「そこで彼らはイエスの身を引き取った。そして、[イエス] は自分で苦しみの杭を負いつつ、いわゆる『どくろの場所』へと出て行かれた。そこはヘブライ語でゴルゴタと呼ばれる所である。そして、その所で彼らは [イエス] を杭につけた。またほかに二人の男を彼と共に [杭につけ]、一人をこちら側、一人を向こう側にし、イエスを真ん中にした。」

「彼ら」とは、24-25 節より、ローマの兵士を指す。「自分で」というギリシャ語「ヘアウト」の直訳は、「彼自身のための」である。それは、その十字架が、その人自身のために用意されたことを示唆している。ということは、処刑場にあらかじめ備えられている縦棒ではなく、犯罪者が処刑場まで背負っていく横棒のことである。

「負いつつ」というギリシャ語「バスタゾー」は、「背負う」が原義であるが、この言葉は、「十字架の横棒を背負って町中を見せしめとして歩かされる」という当時のローマ世界における十字架刑の習慣を暗示した言葉である。「杭につけた」というギリシャ語「エスタウローサン」は、イエスの両手を、背負ってきた横棒に釘打ちし、その横棒を処刑場においてあった縦棒と結び付け、立ちあげるまでの一連の出来事を指す¹⁰⁷。

以上のように、ヨハネの福音書の記録の一つ一つは、当時のローマ世界の十字架刑を背景に読むなら、すべてがぴったり一致する。もし、聖書そのものを当時の歴史的な背景を踏まえて読むなら、イエスの十字架の形態は、杭ではなく、十字架だったことが明らかになる。

最後に、新約聖書は、十字架が意味するところ、つまり贖いについては、たくさんのことを述べているが、その形態については、ほとんど関心を示していない。従って、私たちの検証作業においては、形態に関わりのありそうな聖句を探しながら、推測する以外にない。その結果、これまで言及したいくつかの聖書箇所から、イエスの刑具の形は伝統的な十字架だろうと推測できるが、杭だったことを示唆する聖句は一つもない。

¹⁰⁷ Carson 著、前掲書、608 頁。

第六章 十字架についての考察

本書が扱っているテーマは、イエスの刑具が杭だったのか、それとも十字架だったのか、ということである。これまで、その問題を、協会出版物、初代教会の教父の文献、考古学的発見物、そして聖書の記述から検証してきた。その結果、いずれの証拠に照らしても、杭ではなく、十字架であったことを確認した。

この最後の章においては、十字架にまつわるいくつかのことを書き加えておこう。イエスの十字架の背景、歴史上の意味合いについて、より深く知っていただければと思う。

1. ローマ以前の状況

ペルシャ帝国以前から

今日の古代史研究家は、磔刑はペルシャ帝国にはじまる、と考えている¹⁰⁸。ギリシャの歴史家ヘロドトス（西暦前 484-425 年）は、西暦前 6 世紀から 5 世紀に栄えたペルシャ帝国において、磔による処刑が数多く行われたことを記述している（1、128、2、3、125、3、132、2、159、1）。特に、西暦前 6 世紀終りに統治したダリウス王が、バビロンの住民 3、000 人を磔によって処刑したことは有名である（ヘロドトス、4、43、2 および 7、6、30、1、7、194、1f、ツキディデイス、1、110、1）。

しかし、磔の刑は、それ以前からいろいろな場所で実施されていた可能性がある。ギリシャやローマの著述家たちが、磔という野蛮な処刑方法は、未開の人々から継承された、と述べているからである。例えば、西暦前 1 世紀のディオドルス・シクルスは、インド（Bibliotheka、2、18、1）、アッシリヤ（同書、2、1、10）、スクテヤ（同書、2、44、2）、クリミア（同書、33、15、1）などの地方において、この処刑方法が実施されていたことを報じている。さらに、ケルト人の間では、犯罪者を磔によって神々に犠牲としてささげたとも言われている（同書、5、32、6）。むろん、今日、そのような記録の史実性を確認することはできない。しかし、磔の処刑方法は、相当昔から、いろいろな地域で実施されていた、と考えた方が事実に沿っていると思われる。

考古学上の発見

考古学的発見も、この推測を支持している。古代中近東、特にアッシリヤ帝国の為政者たちは、逃亡者、敵軍で捕虜になった人々、あるいは、反逆者などを、磔と関わりのある方法で処刑している¹⁰⁹。西暦前 7 世紀頃には、アテネの港において、海賊が同じように処刑されている¹¹⁰。

むろん、これらの考古学上の発見は、磔刑に関して、多くの謎を残したままである。例えば、それが、刺し通しの処刑だったか、それとも磔の処刑だったか、木につるされたときにはすでに死体になっていたのか、それとも生きてままであったのか、釘付けにされたのか、それとも縄で縛られたのか、などといった点に関しては、何のヒントも与えていない。

また、言葉の使い方は、時代や人によってかなり異なっており、磔刑に関して、言葉の面からたどろうとすると、不確かになってしまう。例えば、ヘロドトスは、生きている人を磔にする場合には、「アナスコロピゼイン」という言葉を使い、死体をさらして見せしめにする場合には、「アナスタウルーン」という別

¹⁰⁸ Theological Dictionary the New Testament, vol.VII, p.573

¹⁰⁹ Ancient Near Eastern Picture, pp.362, 368, 373

¹¹⁰ Raymond E. Brown, The Death of the Messiah, Doubleday, 1991, p.945

の言葉を使った。ところが、ヘロドトス以降になると、このような言葉の使い分けは見られない。西暦前400年頃のクテシアスは、その両者に対して、「アナスタウリゼイン」という用語を使用している。ユダヤの哲学者フィロン（西暦前20年-西暦50年）は「アナスコルピゼイン」のみを、一方、ユダヤの歴史家ヨセフス（西暦37-95年）は「アナスタウルーン」だけを使っている。言及されている事柄自体は同じであるにも関わらず、である。

ギリシャ世界においては、帝国の初期の頃においては、磔という処刑方法は典型的なものだった、とは言えない。しかし、帝国の後期になると、かなり一般化してくる。特に、アレクサンダー大王時代に、磔刑はヘレニズム世界において珍しいものではなくなる。アレクサンダー自身、ツロの砦を征服したとき、2,000人の敵軍を磔によって処刑している¹¹¹。

2. ローマ世界の状況

フェニキヤに由来する

古代の文献によれば、磔の刑は、北アフリカ地方のヌミディア人の間で (Sallust, *Bellum Iugurthinum* 14, 15, Caesar, *Bellum Africum* 66)、あるいは、カルタゴ人の間で (Polybius 1, 11, 5, 24, 6, 79, 4-5, 86, 4, Diodorus Siculus 25, 5, 2, 10, 2, 26, 23, 1, Livy 22, 13, 9, 28, 37, 2, 38, 48, 13, Valerius Maximus 2, 7 ext 1)、頻繁に実施されていた。多くの歴史研究者は、カルタゴ人はその処刑方法をフェニキヤ人から学んだ、さらに、カルタゴ人はそれをローマ人に伝えた、と考えている¹¹²。

磔刑は、その初期においては、一本の杭によってなされたと思われるが、確かなことは分かっていない。ヘロドトスは、アテネの人々が張り合わせた板に敵を磔にしたことを伝えている (9, 120)。ファレロンの墓地から発見された17人の受刑者は、首や手足が鎖に繋がれていたことが分かっている。それは、恐らく、磔刑に関わりがあったと思われる¹¹³。

さまざまな形の十字架

杭上での磔刑が、今日、普通に考えられる十字架のように変化していくのはいつ頃なのかを明確にすることはできない。古代史の研究者は、遅くとも、西暦前2世紀頃までには、いろいろな形態の磔の用具が存在した、と考えている。イエス時代のストア派哲学者セネカ（西暦前4年-西暦65年）は、次のように記述している¹¹⁴。

「私は、そこに、一つの形だけではなく、いろいろ違った形の十字架を見た。あるものは、犯罪者の頭が地面につくようになっており、他のものは、陰部を刺し通すようなものだった。さらに、他のものは、横棒に犯罪者の腕を広げるような形のものだった。」

このセネカによる十字架刑の描写は、私たちが想像している以上に、バラエティーに富んだ刑具が存在したことを示唆している。

ヨセフスもまた、将軍テトゥスのもとで、ローマ兵士が犯罪者をいろいろな姿勢で釘づけたことを報じている¹¹⁵。

¹¹¹ *Historia Alexandri* 4, 4, 17

¹¹² Brown 著、前掲書、946頁。

¹¹³ Martin Hengel, *Crucifixion*, Fort Press, p.70

¹¹⁴ *De consolatione ad Marcian*, 20, 3

¹¹⁵ 『ユダヤ戦記』5, 11, 1

以上のことから、少なくともローマ時代においては、さまざまな形の十字架が存在した、と結論付けて間違いない。これは協会が考えるより、何と 400～500 年以上も前のことである。

協会が権威ある辞書としてしばしば引用している『新国際新約聖書神学辞典』も、さまざまな形の十字架がローマ時代には使われていたと記述している¹¹⁶。

「この形の死刑執行はローマ人によってのみ執行された。スタウロスは、十字架の形において、横棒がつけられたことは大いにありうることである。一般の歴史の資料からは、十字架の正確な形が、同じ長さの棒からできた十字架 (crux immisa) だったのか、T字の十字架 (crux commissa) だったのかは明らかにできない。罪状書きを張りつけることが一般的であったわけではないので、十字架はいつも伝統的な十字の形 (crux immisa) をしていた、と考える必要はない。」

ローマ帝国における十字架刑について、最初に言及している人物は、ローマの喜劇作家プラウトスである (西暦前 254-184 年)。彼は、十字架につけられる犯罪人は太古の昔から、その反逆性のゆえに、十字架の苦しみを負う、と述べている¹¹⁷。しかし、ローマの風刺詩人ジュベナールは、しばしば、執政者の気まぐれゆえに、十字架を負わされることがあった、と述べている (Satires 4, 219-23)。

奴隷の犯罪者に対する刑具

ペルシャおよびカルタゴにおいては、磔刑は、主として、敵軍の政治的、あるいは軍事的な指導者に対するものだった¹¹⁸。ところが、ローマの政治的指導者は、帝国初期の頃から、その原則を変え、磔刑を奴隷の犯罪者に適用した。ローマの市民権をもつ者に対しては、あまりに残忍すぎる、と考えられたからである (キケロ、In Verrem 1, 5, 66)。

キケロは、ローマの市民権をもっている人が十字架刑にかけられないよう弁護し (In Verrem 2, 5, 9-13)、ローマ市民が十字架刑を受けることがどれほど恐怖に満ちたものか、と叫んでいる (In Verrem 2, 5, 63 および 66)。ローマの市民権をもっていた上層階級 (honestiores) は、下層階級 (humiliores) に比べ多くの特権を享受できたが¹¹⁹、十字架刑に遭わされないことも、その一つだった。市民権を持つ者は、もっと人間らしく扱われなければならない、と考えられていたからである。そのような背景から、タキトゥスは、十字架刑を「奴隷のタイプの刑罰」と呼んでいる¹²⁰。

なお、ローマにおいては古くから、裸の木 (arbor infelix) に反逆罪の人や重い罪を犯した人をかける、ということが行われていた。その場合にも、十字架刑同様、ごく例外的なものを除いて、ローマの市民権をもつ人々に適用されることはなかった。

その後、十字架刑は次第に、奴隷だけではなく外国人に、さらに、盗人や強盗に適用されるようになっていく。奴隷であった人々が強盗などと結びつきやすい状況に置かれていたことは容易に想像できるであろう。

十字架刑の効用

十字架刑は、最初、ローマを中心に実施されていた。しかし、次第に、地方においてもよく執行されるようになっていった。それは、ローマの政治的独裁者たちは、この十字架刑が、法と秩序の維持のため、

¹¹⁶ The New International Dictionary of New Testament Theology, The Paternoster Press, p.392

¹¹⁷ Hengel 著、前掲書、52 頁。

¹¹⁸ Hengel 著、前掲書、86-7 頁

¹¹⁹ パウロにおける事例が、使徒 16 章 38-39 節に見られる。

¹²⁰ 『歴史』2、72、1 および 2。

きわめて有効な手段であることを見抜いていたからである。そのため、ローマ政府は、支配下にあるさまざまな地方において、この処刑方法によって、権威に逆らう運動を鎮圧しようとした。ローマ帝国の確立・維持のためには、十字架刑はなくてはならないものだった、ということである。

キケロ（西暦前 106-43 年）は、「十字架という言葉自体、ローマ市民の体から、それだけではなく、その思いの中からも消えてしまえ」と叫んでいる（Pro Rabiro 5）。当時の著述家は、この処刑方法について「最も重い処刑法（*summum supplicium*）」（ユスチヌス、*Digest* 48、19、28）、「最も忌むべき処刑法」（ヨセフ著『ユダヤ戦記』7、6、4）、「最も残酷で嫌悪すべき罰」あるいは、「奴隷に対する極端で究極の罰」（キケロ、*In Verrem* 2、5、64、66）などと非難している（その他、タキトゥス、*Historia* 4、3、11 など参照）。十字架刑は、当時においても想像を絶するほど恐ろしいもの、と考えられていたのである。

ローマの修辞学者クイテリアン（西暦 35-95 年）は、十字架刑が犯罪者や煽動者を恐れさせるのに一番効果があること、そして、その犯罪者たちによって犠牲となった人々に大きな満足を与えることを理由に、十字架は町の一番にぎやかな大通りの四辻に立てられるべきだ、とさえ主張している¹²¹。ローマ世界において、受刑者が自分の架けられる十字架の一部 *patibulum*（横棒）を背負って町内を歩かされたことや、処刑が公開の広場でなされたことは、単に受刑者への刑罰という意味を持っていただけではなかった。それは同じに、他の人々の暴動に対する抑止機能として利用されていたのである。

西暦 200 年頃に活躍したローマの法律家ユリウス・パウルスは、十字架刑が、火あぶり、首切りとともに、一番重い刑罰（*summa supplicia*）である、と述べている。この法律家によれば、十字架刑は、逃亡者、秘密を漏らした裏切り者、国家転覆の煽動者、殺人者などに適用された。要するに、十字架刑は、国家に対する反逆罪のような、社会不安をもたらす重罪に対してのみ、課せられたということである。

3. 処刑方法

最も残忍な処刑方法

ローマ時代には、たくさんの歴史家、詩人、哲学者、作家といった著述家が輩出しているが、十字架刑に関する詳細な記録はほとんど残されていない。十字架刑が、広範、かつ普遍的に行われていた事実を考慮するなら、このことはきわめて特異な現象である。今日の歴史研究家は、十字架刑があまりに残忍な処刑方法だったので、著述家たちも意識的に、触れることを避けたのではないかと推測している。ヘンゲルは、次のように述べている¹²²。

「ローマ世界においては、すべての人が、磔は、恐ろしい、嫌悪感を催させる出来事だと思っていた。従って、碑文などにも言及されなかった。私が指摘できる唯一の例外は、『あなたが十字架に釘づけられますように』という敬虔な人の願いが記されているラテン語の碑文である。私が知る限り、皇帝の文書の中には、十字架（*crux*）や横棒（*patibulum*）という言葉は一切出てこない。それは、彼が磔を刑罰として用いなかったからではなく、その種のことを記録に留めておきたくなかったからである。」

「ルクレティウス（ローマの哲学者、西暦前 99-55 年）やヴァーギル（ローマの詩人、西暦前 70-19 年）、スタティウス（ローマの詩人、西暦 45-96 年）、若きプリニー、アウルス・ゲリウスなどの場合も同様であろう。ホーラス（ローマの詩人、西暦前 65-8 年）は、*Satires* と *Epistles* において、触

¹²¹ *Declamationes minores*, 274

¹²² Hengel 著、前掲書、37-8 頁。

れているだけである。タキトゥスは、少なくとも年代記においては、言及するのを控えている。全体としても、ゲルマン人やブリテン人がローマ人に課した極悪な行為として、述べるに留まっている。ヴァレリウス・マキシマス、セネカ（ローマの哲学者、西暦前4年-西暦65年）のような人々、あるいは、ペトロニウス（?-66年）やアプレウス（西暦2世紀）などの風刺作家たちも躊躇している。状況は、ギリシャ作家においても酷似している。ということは、古代において、磔に関する言及がほとんどないのは、歴史的な問題というより、文学の世界と関わりがある美学の問題である。ローマ時代は、磔刑は、広く、しばしば行われたのだが、教養ある文学の世界では、それと関わらず、沈黙を守るといのが一般的だったのである。」

十字架刑の処刑方法が、時と場所、犯罪の内容や処刑者によって相当違っていたことは当然である。例えば、戦場で敵軍の将校を処刑するのと、平時に政治的なクーデターを起こそうとした犯罪者を処刑するのとは、まったく違っていた。磔にする前に、受刑者を拷問することは、カルタゴにおいては半ば習慣化されていた¹²³。しかし、西暦前1世紀のデオニシウス（*Antiquitates Romanae* 5, 51, 3, 7, 69, 1-2）やディオドルス・シルクス（18, 16, 3）などの文献は、ローマにおいては、磔刑を受ける者が通らねばならないプロセスの一つとして位置づけている。実際、磔以前の、拷問の過程において死んでしまう人も少なくなかった¹²⁴。

十字架刑のプロセス

状況に応じて多少の違いがあっても、十字架による処刑方法には一般的なルールがあったこともまた、間違いない。そこで、ここでは、ごく一般的なプロセスを、歴史的資料から分かっている範囲で、紹介したいと思う。

まず、第一に、法的な裁きである。戦争のような特殊な状況下では、その裁きは戦場で行われ、処刑も同じ場所で実施されることが多かったので、法的な裁きは省略されたか、簡略に行われた。しかし、通常の場合は、ローマ政府のもとで、ローマ法に基づき、厳格な裁判が行われた。

裁判によって有罪が確定されると、処刑を執行するローマの兵士は、受刑者を拷問にかけた。受刑者を鞭で打つことは（これはカルタゴから受け継がれたものであるが）半ば慣習化していた。しかも、兵士は、受刑者から多くの血が流れ出るほど鞭で打ったので、受刑者はその死を速められるのが普通だった。つまり、拷問には、十字架上での苦しみを和らげる効果があった、ということである。

受刑者は、兵士から拷問を受けた後、自分がかげられることになる十字架の一部 *patibulum*（横棒）を背負わされた。横棒を背負って人々の見世物になるこのこと自体が大変な辱めであり、処刑の一部であった。その際、縄で簡単に縛られることもあった。それから、人々のさらし者にされ、嘲笑や罵倒を受けながら、処刑場までの道のりを歩んだ。

処刑場に着くと、受刑者は、背負ってきた十字架の横棒を、あらかじめ地面に立てられてある縦棒のところまで運んだ。その後、裸にされ、再び、鞭で打たれた。

そして、横棒が寝かされ、受刑者がその横棒につけられた。イエスの場合、両手は釘で打たれたが、釘で打ちつけられるのは、稀であった¹²⁵。多くの場合、ロープで縛られた。最近発掘されたケースやイエスの場合には、足もまた釘づけられた¹²⁶。しかし、いつでもそのようにされたかどうかは明らかではない。

¹²³ Hengel 著、前掲書、28頁。

¹²⁴ ユスチヌス、*Digest* 48, 19, 8, 3。

¹²⁵ ヘロドトス、9, 120, 4, 7, 33

¹²⁶ ルカ 24章 39節参照。

十字架を立てる方法には、二通りあった。一つは、処刑場において、あらかじめ組まれてあった十字架が、地面に倒されており、受刑者がその上に仰向けに寝かされ、十字架につけられ、その十字架が垂直に立てられる、という方法である。もう一つは、受刑者は横棒につけられ、あらかじめ建てられていた垂直の縦棒と結び付けられる、という方法である。立てるのが簡単だったこと、そして、奴隷が見せしめのため横棒を担いで歩かせたことなどから、ローマでは、後者の方が一般的であった。後者の場合でも、縦棒の上に、横棒をそのままのせて、T字形になる方法と (crux commissa)、縦棒の上の方に溝ができていて、その溝に当てはめて作る十字の形態のものがあった。T字形の方が、組みあわせるのにより簡単だったので、一般的だった。その十字架の高さは、一般には、2メートルより少し長めのものだったが、人間の背の高さとほとんど変わらないものも多かった¹²⁷。スエトニウスは、ローマ市民の場合は、他の人より、高い木が使われた、と証言している (Golba 9、1)。

場合によっては、その柱の中ほどに小さな木 (sedicula) をつけ、そこに腰を載せ、体の重みを支えさせた。それは、手に釘を打った場合、手が体の重みを支えきれず、はり裂けてしまわないようにする、という目的もあった。

犯罪人が十字架に固定されると、そのまま一人で放置されるのが普通だった。罵り、罵倒した群衆も、いつしか去ってゆき、受刑者は過酷な気候と闘わねばならなかった。激しい苦痛が体中を襲い、体力が消耗し、窒息して死んでいくケースが多かった。死体は、昆虫や動物の餌食になることもしばしばだった。死体は、そのまま放置されることが多かった。その場合、死肉を求める肉食動物やはげたかなどの格好の餌食となった。犯罪者の親戚や友人が、死体を引き受け、墓に葬ることもあった。特に、ユダヤ人社会では、死体が放置されることは不名誉だと見なされていたので、できる限り放置されないようにした¹²⁸。

4. ユダヤ世界において

旧約聖書の実例

旧約聖書には、磔の刑が出てくる。その最初は、ヨセフの時代のエジプトにおける出来事である。創世記 40 章 18-22 節は、王ファラオの料理管長が木に吊されたことを報じている。それは、処刑された後、死体を木に吊るしたと思われる。

ヨシュアは、アイの王を殺し、木にかけたが、夕方までに木から下ろした¹²⁹。その後、5 人の王に対しても同じようにしている¹³⁰。これらはいずれも、死体をみせしめのために木にかけたケースである。

サウルとその息子たちは、敵軍によって殺され、城壁に見せしめとしてさらされた¹³¹。これも、死体が人の前にさらされた、というケースである。西暦前 11 世紀の出来事である。

エステル記は、王の意思に反する者が木にかけられたことを記している¹³²。それは、ペルシャ時代、西暦前 5 世紀のことである。エステル記のケースは、死体をさらした、というより、生きている人を木にかけた、と思われる。

西暦前 2 世紀には、七十人訳ギリシャ語旧約聖書が翻訳された。その翻訳は、スタウロスという言葉

¹²⁷ Brown 著、前掲書、951 頁。

¹²⁸ 例えば、旧約聖書の外典の一つトビト書は、トビトがセナケリブ王の処刑した人々の遺体を葬ったことを、善行として伝えている (1 章 18-19 節)。

¹²⁹ ヨシュア記 8 章 29 節

¹³⁰ ヨシュア記 10 章 26 節

¹³¹ I サムエル 31 章 9-10 節

¹³² エステル記 5 章 14 節、6 章 4 節、7 章 9-10 節、9 章 13-14 節

用いていない。しかし、エステル記7章9節の「かける（ヘブライ語タラー）」や、8章12節（それに該当するヘブライ語はないので、訳者が補った）、さらに、哀歌5章12節において、動詞「スタウロー」を使っている。いずれも、未だ生きている人を処刑したケースとして理解していたかも知れない。

エズラ記6章11節に関しては曖昧で、そこから何かを言うことはできない。ヨシュア記8章29節のギリシャ語訳は、「木にかける」（エクレマセン・エピ・クシュルー）の後に、「ディデウムウー」（2つの）という言葉をつけ加えている。すると、2つの木ということになり、これは十字架を示唆するものかも知れない。

旧約聖書以降の状況

ラビの文献においても、同様である。彼らは、申命記21章22-23節を基にして、細かな規定を作った。すなわち、神を冒瀆した者は、石打ちの刑にしたが、その後で、法的な形式を整えるため、木にかけるということを行った。ある人が縛り、他の人が直ちに解くなどということをして、法的一貫性を保っているかのようにした¹³³。しかし、このような記述は、理想的な姿を表したもので、実際にいつでもそのように行われた、というわけではなかった。特に、西暦前1世紀の半ば頃からは、ユダヤ人の最高議会サンヒドリンにも、死刑執行の権限は与えられていなかった。

こういった状況にも関わらず、そのような理想的なことが議論されていたのは、パレスチナにおいても、ローマ政府によって、磔による死刑の方法が執行されていたからである。ユダヤ人たちは皆、その処刑方法に憎しみをもち、ローマ政府に反感を抱いていた。だから、磔の刑は、ユダヤ教の中では、刑罰のかたちとしては弁護されていたが、実際にはほとんど実施されなかった。

ユダヤ人社会においては、生きている犯罪者が磔によって処刑される、ということではなかったようである。偶像崇拝者、あるいは神を冒瀆する者は、石打ちの刑にされた。そして、死んで後、神に呪われた者として、死体を木の上にかけたようである（申命記21章23節）。しかも、その死体は、夜通しその木にかけっぱなしにしておくことは許されなかった。神が与えた地を汚してはならなかったからである。

ところが、パレスチナ一帯が外国の支配下に置かれるに及んで、ペルシャ、ギリシャ、ローマ世界の処刑方法であった磔刑が、ユダヤ人の間に導入されるようになった。特に、ヘレニズム時代のハスモン王朝の時代には、それが実施されたことが明らかになっている。例えば、アレクサンダーヤンナエウス（西暦前103-76年）は、反逆したバトメの町を攻略したとき、800人のパリサイ人を十字架刑によって処刑している¹³⁴。死海写本のナホム書1章7節の注解やヨセフスの書物は、この処刑に激しく抗議している¹³⁵。

ヘロデ大王の時代には、十字架刑については触れられていない。単に記録されていないだけかも知れない。又は、彼がハスモン王朝と距離を置こうとして、十字架刑を意図的に退けた結果なのかも知れない¹³⁶。

最後に、ヨセフスは、ローマ軍がエルサレムを包囲したとき、身の毛のよだつような十字架刑が執行されたことを証言している（『ユダヤ戦記』5、11、1）。それは、「もっとも悲惨な死」であった（同書、7、6、4）。なお、ヨセフスの書物には、地方においてさまざまな煽動活動を鎮静化させるため、十字架刑がきわめて多く用いられたことを伝えている¹³⁷。

¹³³ 『ストラックピラベック』1、1034-35

¹³⁴ 『ユダヤ戦記』1、4、6、『ユダヤ古代史』13、14、2と3。

¹³⁵ 『ユダヤ古代史』11、261、266f、17、295、20、102、129、161、『ユダヤ戦記』5、449以下参照。

¹³⁶ Hengel 著、前掲書、85頁。

¹³⁷ 『ユダヤ戦記』2、5、2、12、6、13、2、14、9、3、7、33、5、7、5、7、10、1、『ユダヤ古代史』17、10、10、

5. 十字架刑の廃止

この十字架刑が廃止されるのは、コンスタンチヌス大帝の時である。彼は、十字架刑がキリスト教にとって屈辱的なものであると考え、ローマ帝国において禁止したのである。協会も、その事実は認めている。『洞察』は、その辺の事情を次のように伝えている¹³⁸。

「ギリシャ人やローマ人は杭につけて処刑する慣行をフェニキア人から取り入れたと言われていますが、ようやくコンスタンチヌスの時代になってこの慣行は帝国内で廃止されました。ローマ市民が杭につけられるのは極めてまれなことでした。それは普通、最も卑しむべき奴隷や犯罪者に科された刑罰だったからです。人を杭につけて行なう処刑方法は、ユダヤ人からもローマ人からも、のろわれた者たちに被らせる屈辱や恥辱の象徴とみなされていました。申 21:23、ガラ 3:13、フィリ 2:8。」

その残酷さのゆえに、杭による処刑を廃止したコンスタンチヌス大帝が、なぜ、太陽崇拜を根拠に十字架を導入したのか、協会はその辺の事情を説明する責任がある。どのように説明がなされるのか、筆者には分からないが、とにかく、協会がこのような矛盾したことを信じていることだけは間違いない。

協会の解説の矛盾は別にして、コンスタンチヌス大帝以降、十字架による処刑は廃止され、十字架 (crux) という言葉が聖なる言葉となったことは確かである。法律文書では、十字架の代わりに、絞首台 (furca) という言葉が使われるようになった。受刑者は十字架の場合だと、死ぬまでの長い時間苦しまなければならなかったが、絞首台においては一瞬にして死ぬことができたのである。それゆえ、絞首台の方が、より人間的な思いやりのある処刑方法とされたのである。

6. スタウロスについて

最後に、ギリシャ語の「スタウロス」について、まとめておこう。言うまでもなく、この語は、本書の論議において中心的な位置を占めている。従って、折りにふれ言及してきた。一部重複するが、あらためて整理しておく。

スタウロスとは、もともと、一本のまっすぐな棒を指していた。例えば、西暦前7世紀のホーマーは、「フェンス」とか「柵」という意味で（『オディッセイア』14、11）、西暦前5世紀のツキディデスは、「土台」という意味で使っている（7、25、5）。

同義語の動詞「スタウロー」は、「アナ」という接頭辞をつけて「アナスタウロー」として、より頻繁に使われた。それは、「掲げる」とか、「突き刺す」を意味した「アナクレマニーミ」（ヘロドトス、3、125、3f、7、194、1f）、あるいは「アナスコロピゾー」（ヘロドトス、9、78、3）と交換可能な言葉であった。これらの動詞は「突き刺す」（ヘロドトス、7、238、1）、処刑あるいは見せしめのために「掲げる」（ヘロドトス、3、125、3f）、さらに「十字架につける」、「苦める」、などの意味で使われた。しかも、それらいずれもが、公衆の面前でなされた場合に使用されている¹³⁹。

言語の歴史的状況から言えば、「スタウロー」あるいは「アナスタウロー」といった動詞の方が、名詞「スタウロス」より、より一般的に使われていた。しかし、名詞「スタウロス」もまた、次第に、動詞に対応した意味を持つようになっていった。

磔の刑具に対し、「スタウロス」という言葉が使われるようになるが、西暦前3、4世紀の頃には、東と西ではその用い方に違いが見られるようである。東の方では、打ち首にされた犯罪人が、恥の上塗りをさせ

20、6、2。

¹³⁸ 『洞察』第一巻、782頁参照。

¹³⁹ これらの動詞の厳密な意味は、その言葉が使われている文献の場所や時代、そして前後の文脈から判断しなければならないので、一般化して論じることは無意味である。

られるため、死体を見せしめにされたが、そのとき用いられた刑具をスタウロスと呼んだ（ポリビウス、7、21、3）。しかし、西側ではそのようなことは許されず、実施されることもなかった（ヘロドトス、7、238、1f、9、78、3、9、79、1、プルターク『De Pericle、28、1）。スタウロスは、あくまでも、生きている犯罪人を死刑に処する刑具であった¹⁴⁰。

ローマ時代には、受刑者が十字架の一部（ラテン語で、この横棒のことを patibulum と呼ぶ）を持つことによって、人々の見せしめにされることが普通になった。このような習慣は、ギリシャおよびカルタゴにおいても実施されていたことが今日確認されている。多くの歴史学者は、ローマ人はこの方法をカルタゴから学んだと推測している。歴史的にそのことを確認することは難しいが、東方諸国においては、そのような方法が実行されることはなかった。

結局、ギリシャ語「スタウロス」は、罪人が掲げられる一本の棒（西暦前1世紀のデオドシウス・シックス、2、18、2）を指す場合もあったし、十字架の縦棒を指す場合も、横棒を指す場合もあった。そして、十字架全体を指す場合もあった。その他、受刑者を突き刺したり、絞め殺したりするために使われた棒を指すこともあった。

「スタウロス」の意味を決定するには、その文献が記された時代および場所をよく考慮しなければならない。むしろ、多くの場合、それだけでは決着がつかないので、前後の文脈から推測する必要がある。

言葉の意味は、前後の文脈から決定しなければならない。これは当り前のことである。分かりやすい例を一つだけ挙げておこう。ルカ7章24節には、「ヨハネの使い」という表現が出てくる。この「使い」という言葉は、ギリシャ語の「アンゲロス」である。言うまでもないが、通常、「天使」を意味する。しかし、この箇所は、「天使」では意味が通じない。前の19節から、ヨハネの二人の弟子を指していることは明白である。言語の意味は、文脈によって決定されなければならないことを示す典型的な例である。

新約聖書の「スタウロス」についてもまた、同じことが言える。このギリシャ語の語源をたどってみても、意味を確定できるわけではない。その言葉が使われている状況から、意味を決定する以外にない。つまり、イエスに関して言えば、ローマの総督ポンテオ・ピラトのもとで処刑されたのだから、ローマのその当時の処刑法の中で理解することこそ重要である。

7. イエスの死

ある証人の方が、イエスは聖い方であるから、異教を背景とする十字架によって処刑されるはずがない、と言われた。筆者は、そのような主張を、協会出版物によっては確認できなかったもので、それは、その方の個人的考えだったのかも知れない。その出所がどこであれ、そのような議論が愚かなことは論を待たない。イエスの刑具が、一本の杭であったとしても、イエスは、ローマ政府のもとで処刑された以上、異教徒が執行していた処刑器具によって処刑されたのである。器具だけではなく、裁判の法律も、裁判官も、処刑の手続きも、処刑執行人も、すべては異教的背景の中で行われたのである。

イエスの処刑のプロセス

歴史上の出来事としてのイエスの死については、マタイ27章1-2節、11-61節、マルコ15章1-47節、ルカ23章1-56節、ヨハネ18章28節-19章24節に記録されている。さらに、マタイ20章19節、26章2節、ルカ24章20節、使徒2章36節、4章10節、黙示録11章8節などにも言及されている。これらの記録を総合すると、次のようにまとめることができよう。マルコの福音書を中心に記しておく。

¹⁴⁰ ヘンゲルは、東と西の間に相違が見られるという見解に対して否定的である（前掲書、69頁参照）。

イエスは、ユダに率いられたユダヤの兵士によって逮捕された（14章43-46節）。

ユダヤの最高議会サンヒドリンが招集され、イエスを取り調べた（14章53-61節）。

議会は、イエスが神への冒瀆罪を犯したと判断し、死刑を決定した（14章62-64節）。

ユダヤ人たちは、イエスを愚弄した（14章65節）。

議会は、イエスをローマ総督ピラトに引き渡した（15章1節）。（イエス時代、ユダヤにおいては、十字架刑はローマ政府のみが行使することができた。）

ローマ総督ピラトは、イエスが「ユダヤ人の王」かどうか尋問した（15章5節）。（十字架刑は、ローマ政府に反逆するような大罪でなければ執行することはできなかった。）

ピラトは、沈黙を守るイエスを赦免しようと試みた（15章6-12節）。（ローマ法に照らした場合、イエスを有罪にするには不十分な状況だった。）

群衆は、イエスを十字架刑に処することを要求した（15章11-14節）。（イエスはローマの市民権を持っていないので、総督は、イエスを十字架刑に処することができた。）

総督は、イエスを鞭打ってから、十字架刑に処するため、ローマ兵士に引き渡した（15章15節）。（ローマ法によれば、犯罪人は、十字架にかけられる前、鞭で打たれることになっていた。）

刑を執行する兵士たちは、さまざまな嘲笑をあげ、イエスを辱めた（15章17-19節）。

イエスは、十字架の横棒を背負って、処刑場に向かった（15章20節）。（ローマ法によれば、受刑者は、人々への見せしめのため、十字架の横棒を背負って町を歩かねばならなかった。イエスがローマの慣習に従って、横棒を担がれたことは、イエスの刑具が一本の杭ではなかったことを示す。）

兵士は、イエスの十字架（横棒）をシモンに背負わせ、処刑場に連行した（15章21節）。（ローマ法から見ると、第三者が受刑者の十字架を背負うことは異常なことである。「横棒を運ぶ」ことは、受刑者が受けるべき罰の一部であったからである。イエスの場合、肉体の疲労が大きく、処刑場までもたないことを心配した死刑執行人の兵士が、その場で判断して対応したのであろう。）

イエスは、没薬を混ぜたぶどう酒を差し出されたが、飲まなかった（15章23節）。（没薬を混ぜたものは、痛みを和らげるためのもので、ユダヤ独特のものであった。）

イエスは、十字架につけられた（15章24節）。（シモンが背負った横棒の上に寝かされ、両手が釘で打たれ、その後、あらかじめ垂直に立てられていた縦棒にその横棒がつけられた。罪状書きがイエスの頭上に掲げられたのだから、イエスの十字架は、T字形より十字形であったと思われる。その場合は、縦棒の先の方に溝が掘られていて、その溝に横棒がはめられ、十字架が作られたと思われる。）

「ユダヤ人の王」という罪状書きが掲げられた（15章26節）。（イエスは、ローマ皇帝に反逆するユダヤ人の政治的煽動者として裁かれたことになる。）

イエスは、道行く人々や両脇の犯罪人から罵りを受けた（15章29節、32節）。（多くの人々が十字架の周りに集まり、犯罪者を嘲弄するのが、当時の一般的習わしであった。）

イエスは、酸いぶどう酒を含ませた海綿を差し出された（15章36節）。（葦の棒によって海綿が差し出されたことは、イエスの十字架はそれほど高いものではなく、イエスの足は地面から50ないし60センチ離れていたぐらいではないかと想像される。）

神殿の幕が上から下まで真二つに裂けた（15章38節）。（神殿の幕とは、聖所と至聖所とを隔てた幕のことで、幕が裂けたとは、聖所と至聖所の区別が必要なくなったことを意味する。つまり、イエスの死により、神との交流が自由にできるようになったことを暗示する。）

イエスは、息を引きとられた（15章39節）。

アリマタヤのヨセフは、ピラトからイエスのからだの下げ渡しを願い出た（15章43節）。（ユダヤにおい

ては、遺体を安息日にさらさないという習慣があった。ヨハネ 19 章 31 節)。

ローマ総督ピラトは、百人隊長によってイエスの死を確認し、イエスのからだを議会の議員ヨセフに与えた (15 章 45 節)。

ヨセフは、イエスの遺体を亜麻布で包み、彼自身のために用意した墓に納めた (15 章 46 節)。

以上が、イエスの逮捕から処刑に至るまでのプロセスである。それは確かに歴史的に重要な出来事であった。しかし、キリスト者にとって決して見過ごしてはいけないことがある。イエスの死が私たちにもたらしてくれたもの、また、そこに込められている神のメッセージこそ、十字架の意義なのである。

歴史的事実としての十字架

では、イエスと同じ時代に生きた初期クリスチャンたちの目には、キリストの十字架の死はどのように映ったのか。

使徒パウロは、当時のキリスト者たちのために、13 通の手紙を残した。その中で、彼は、キリスト教の信仰にとって大切なことをすべて書き残している。しかし、その彼が、歴史的出来事としてのイエスの死については、ほとんど触れていない。ただ、一箇所、I テサロニケ 2 章 15-16 節において、「[ユダヤ人] は主イエスをも預言者たちをも殺し、そしてわたしたちを迫害したのです」と、言及しているだけである。

パウロは、歴史上のイエスに対し関心を示さなかった。それだけでなく、もう一步進んで、次のように述べている。「かつては人間的な標準でキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方をしません」¹⁴¹。つまり、人間として行動された歴史上のイエスについては、知る必要がない、とまで言い切っているのである。

むろん、パウロはイエスの死の史実性を軽視したわけではない。パウロがここで述べたことの真意は、続く II コリント 5 章 18-20 節に述べられている。つまり、イエスの歴史上の死を、福音という視点からとらえなければならない、と言っているのである。

パウロおよび初代のキリスト者たちは、歴史上実際に起ったイエスの死を重要視した。それこそ、彼らが受け取り、また宣べ伝えた福音の中心的出来事だった。I コリント 15 章 3-4 節 (新世界訳) を引用しておこう。

「というのは、わたしは、最初の事柄の中で、[次の] ことをあなた方に伝えたからです。それは自分もまた受けたことなのですが、キリストが聖書にしたがってわたしたちの罪のために死んでくださった、ということです。そして、葬られたこと、そうです、聖書にしたがって三日目によみがえらされたこと、さらに、ケファに現われ、次いで十二人に [現われた] ことです。」

初代のキリスト者にとって、歴史の出来事としてのイエスの死は、福音という視点からのみ重要だった。イエスの磔のプロセス、そのときの肉体的・精神的苦痛、刑具の形態、そういったことは、彼らにとって本質的な問題ではなかった。

この初代のキリスト者たちの姿こそ、現代のキリスト者が学ばねばならないものである。たとえ、イエスの歴史的な死を正確にたどり、再現することさえできたとしても、イエスによる贖いの恵みを知るのとなければ、一切は空しいのである。

聖書は、イエスが磔にされた模様を詳細には描写していない。ただ、事実を淡々と記述しているにすぎない。肉体において経験された苦しみ、裁判に関わった人々の心理状態、イエスを取り巻く周囲の人々の反応、などについては、必要最小限に抑えられている。そのようなことは、イエスの贖いの業においては

¹⁴¹ II コリント 5 章 16 節

本質的なことではないからである。あるいは、贖いの本質的な意味からかえって人々の目をそらせてしまう危険性が高いので、意図的にそのような描写を避けたのかも知れない。

十字架が示す霊的意味

新約聖書においては、十字架と関わりのある言葉として、スタウロス、アナスタウロオー、スタウロオー、シスタウロオーなどの言葉が使われている。これらの言葉の使われ方は、大きく二つに分けられる。

一つは、イエスの処刑という歴史的な出来事に関わるものである。もう一つは、イエスの死がもたらした贖いと関わりのある神学的な意味である。新約聖書は、後者の意味をはるかに重視している。

パウロを例に取ってみよう。彼は、十字架に関わりのある言葉として、スタウロスを7回、スタウロオーを8回、シスタウロオーを2回、合計17回使っている。そのいずれもが、実際のイエスの受刑という歴史的出来事そのものに関わるものではなく、イエスの死がもたらした神学的な意味との関わりの中で使われている。

パウロは、「私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝える」(Iコリント1章23節)と宣言している。あるいは、「私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです」(Iコリント2章2節)と告白している。

加えて、十字架から目をそらしてしまうことは、信仰から迷い出ることになると警告している(ガラテヤ3章1節)。さらに、「私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです」とまで言い切っているのである(ガラテヤ6章14節)。

パウロにとって、福音(エウアングリオン)とは「十字架のことば」であり(Iコリント1章17-18節)、そのメッセージこそ、人々に救いをもたらすものであった(Iコリント1章21節)。十字架は、全人類の罪が清算されたところであり(コロサイ2章14節)、すべての被造物が服従させられたところでもある(コロサイ2章15節)。十字架は、民族間に平和をもたらした(エペソ2章14-16節)、万物との和解を可能にした(コロサイ1章20節)。

十字架は、イエスに死をもたらしたというだけに留まらなかった。それは、キリスト者に死をもたらすものでもあった(ローマ6章3-6節、ガラテヤ2章20節、コロサイ3章3節)。さらに、その死こそ、信じる者を律法主義から解放するものだった(ガラテヤ2章19節)。

この十字架は、ユダヤ人にとっては愚かなもの、つまずきであった(Iコリント1章23節、ガラテヤ5章11節)。多くの人に、敵対心をもたらすものでさえあった(ピリピ3章8節)。

結 論

十字架(それは、協会が主張するように、杭であっても一向にかまわないのだが)は、全人類の贖いというメッセージを象徴している。神の愛、神の知恵、神の力、神の赦し、神の恵み、罪の処罰、罪の力からの解放、サタンと死に対する勝利、民族の和解、万物の和解、人間の使命の回復、信仰の根本的基盤、キリスト者と世との関係などを指し示す。そのような一連のすばらしい恵みのしるしとして、キリスト者は、十字架を信仰のシンボルに据えるようになったのである。

聖書は、イエスがかけられた十字架の形態や十字架上での肉体の苦しみを問題にはしていない。むしろ、不思議なほど沈黙を守っている。考古学、歴史的な探求にすら、無頓着である。聖書が問題にしているのは、ただ一点、十字架が、神と私たちの関係において何をもたらしたか、ということにある。十字架を通してもたらされたもののすべてを、つまり神の測り知れない恵みを、キリスト教会は十字架によって

表してきたのである。

終わりに

本書のテーマは、イエスが処刑された道具が、十字架だったのか、それとも杭だったのか、ということである。これまでの検証を通して、歴史上の事実はどちらであったのかは明確になったと思う。

このテーマはなぜ重要なのか

実は、人類を贖うためのイエスの死においては、用いられた刑具がどのようなものであってもよいことだった。イエスが私たちの罪を背負って死なれたという歴史的事実こそ重要なのであって、その他のことはどうでもよい。

ではなぜ、本書はイエスの刑具の形に関し、このような論議を重ねてきたのか。それは、ものみの塔協会が、十字架は異教に起源をもつものであり、偶像崇拜に関わることで、神が是認されるものではない、と主張しているからである。キリスト教世界のキリスト者にとってはどうでもよいことなのだが、ものみの塔協会にとっては、十字架であってはならないのである。

自分が信じていることを、他の人から間違っていると指摘された場合、それが自分にとってはどうでもよいことであっても、その批判者の言い分をいつでも無視してよいわけではない。ときに、それに答える責任が生じる。

確かに、ある批判は、不当な非難中傷にすぎないので沈黙を守った方が賢明だ。しかし、その批判が誠実な思いでなされたものであるなら、それに答えないことは逆に不誠実である。エホバの証人が投げかけている「十字架か、杭か」という問題は、後者である、と筆者は判断したので、本書を執筆した。

執筆の理由

筆者は、協会が批判する「イエスの刑具は十字架だった」という教えを信じている。むろん、伝統的な形の十字架を信じない人は、キリスト教徒ではないとか、聖書を信じない不信仰者である、などと主張するつもりはさらさらない。十字架でも、杭でも、実のところ、どちらでもよいと思っている。ただ、ものみの塔協会が筆者の見解を批判する以上、筆者はそれに答える責任を負わされている。というのは、『ものみの塔』誌は、次のように述べているからである¹⁴²。

「その形状について聖書は何も述べてはおらず、聖書中のそのギリシャ語は、『十字架』ではなくて、『杭』『柱』もしくは『木』を意味する以上、キリストは、横木のついた柱につけられて死なれた、と唱える人は、その主張を立証する責任を負っています。」

「『十字架』ではなく、『杭』『柱』もしくは『木』を意味する」ギリシャ語とは、言うまでもなく「クシュロン」である。この引用文は、新約聖書が「クシュロン」という言葉をイエスの刑具に使っている以上、イエスの刑具が十字架だったことを実証する責任は、十字架を信じる者の側にある、と宣言しているわけである。

立証責任が、ものみの塔協会側にあるのか、それとも、キリスト教世界側にあるのか、このこと自体、とても興味深い問題である。しかし、今は、責任の所在については問わないことにしよう。とにかく、筆者は、「横木のついた柱につけられて死なれた、と唱える人」であるのだから、協会の考えによれば、イエスの刑具が十字架だったことを証明しなければならない立場に置かれたのだ。

¹⁴² 『ものみの塔』、1971年2月1日号、70頁。

繰り返すが、筆者自身にとっては、イエスが処刑された刑具の形態などは、どうでもよい。一本の杭であれ、伝統的な十字架の形であれ、イエスが私たちの罪を背負って死なれたという贖いの効果は、刑具の形態に影響されないからである。

聖書も、イエスの処刑の刑具がどのようなものであったかということの問題にしていない。もしそれが、神の目に重要なテーマの一つであるのなら、聖書記者は、当然、靈感によって、イエスの刑具の形態を明らかにしたであろう。しかし、靈感を受けた聖書記者は、そのことについて特別な言及をしていない。

筆者は、自分を批判する人に対しては、誠実でありたいと常々願ってきた。今日まで、できる限りそうしてきたつもりであるし、今後もそうしたいと願っている。また、他の人々にもそうするように教えてきた。そのような思いに動かされて、本書の執筆に取りかかったことを述べておきたい。

協会の求めに応じて、筆者は、イエスがかけられたのは一本の杭ではなく、十字架だった、と本書において論じてきた。本書の論議が完全なものであるとか、十分なものである、などと主張する気は毛頭ないが、通常のセンスで読んでいただくなら、協会が、杭と主張していることには、まったく根拠のないということをお納得していただけたのではないかと思う。

協会はどのように応答するのか

さて、今度は、ものみの塔協会の番である。協会は、当然、本書に対して反論する義務がある。投げかけられた問題に対して応答したのだから、それに対して賛成するなり、反論するなり、しなければならない。協会には、そうする責任がある。

協会のリーダーに申し上げたい。本書をサタン視したり、背教的な文書として切り捨てないでいただきたい。筆者の論じていることに對し、真正面から反論していただきたい。筆者は、どんな批判にも誠実に対応することをお約束する。

近年、ものみの塔協会は、自分たちがカルト教団呼ばわりされることを極度に警戒している。広報室を新設し、マスコミをはじめ一般社会に、自分たちがカルトではないことをアピールしようと躍起になっているのもそのためである。

兵役の代替措置を認めた¹⁴³。長いこと禁止してきた選挙も容認することにした¹⁴⁴。教団は、カルト色を払拭するため、一生懸命努力している。筆者にできえ、それはよく分かる。

あとは、輸血禁止の解除である。これは、エホバの証人を最も大きく特色づけてきたものなので、それほど簡単に取り下げのわけにはいかないであろう。しかし、統治体の成員にも、新しいメンバーが4人加わった。そろそろ、輸血解禁の決議においても、賛成多数を得られる状況が整いつつあるのではないか。

あるいは、まだ少々、時間がかかるかも知れない。まずは、自己血輸血はよいというところから始めて、管の中の流れが一時的に止まった血液であっても使ってよろしい、となるであろう。そのようにして、輸血禁止を、建前はどうかであれ、実質的に解除してしまえば、内部の動揺も少なくすむであろうし、社会との軋轢もさほど大きなものにならないで、何とかやり過ごすことができるだろう。協会は、これまでの強硬路線をあらゆる分野で柔軟化し、内部はともかく対外的には限りなく社会通念に近づいていくであろう。

これらのカルト的教義を一掃した場合、最後のネックになるのは、情報統制の問題である。組織にとっていかに都合の悪い情報であっても、信者が接触することを禁じない、ということになれば、ものみの塔

¹⁴³ 『ものみの塔』、1996年5月1日号、18-19頁。

¹⁴⁴ 『ものみの塔』、1999年11月1日号、28-29頁。

をカルト呼ばわりする人は少なくなる。

本書のような書物であっても、読みたいエホバの証人がいれば、自由に読ませればよいのである。組織が十分な反論文書を用意しておき、両方読ませて、証人たちに自ら判断させればよいのである。もし、組織が証人たちに、インターネットであれ、キリスト教の書物であれ、元証人たちとの接触であれ、あらゆる情報源を認めると言うのであればものみの塔がマインド・コントロールを使っているという批判は、その根拠を失うことになる。

都合が悪い情報に直面すると

残念ながら、現在の組織は、ものみの塔に対する批判や反論に対しては、厳しい言論統制をしている。協会は、本書のような書物を読ませないよう、神経をすり減らしている。最近のインターネットに対する警告は、その現れである¹⁴⁵。

実は、自分（自分たち、あるいは自分の組織）を批判する人々に誠実に対応することは、必ずしも容易なことではない。そうしなければと思う人も少ないわけではないが、そうしない人も結構多い。その場合、筆者の観察によれば、次の8つの反応のどれかを示す。

自分たちは絶対正しく、外部の人々は真理を持っていないという二元論的思考に立ち、批判を一切聞こうとしない。

批判している人の何らかの落ち度を探し出し、そのような人の批判は考慮に値しないと問題を摩り替える。批判に対してはどんな弁明も通用しないだろうと思うときは、批判自体がなかったかのように無視し、これまでの主張をただ反復する。

論点をぼかし、具体的な問題を一般論で片付けようとする。

批判されている問題と似ている問題を取り上げ、あるいは、論点がずれる例えなどを持ち出し、弁明したつもりになる。

批判する人の動機を批判することによって、批判されている問題に真正面から立ち向かわないことを正当化する。

批判されている問題に対する自説の賛同者を捜し、その権威に訴えて批判を封じる。

批判されている問題について、自分は無知、あるいは不完全な人間にすぎないと言い逃れをし、問題を直視しようとしめない。

協会の責任

人は、どのような意見を持とうと自由である。どのような学説であれ、信条であれ、それを標榜することは認められている。しかし、その意見、学説、信条をもつ自由には、必ず責任が伴う。それらに対する真摯な質問、批判には、誠実に答えるという責任である。この責任を放棄するなら、それは独断であり、独り言（モノローグ）になってしまう。

本書の読者の中には、現役のエホバの証人もいるであろう。キリスト教世界の人々も、あるいは、宗教とは無縁な方もおられるであろう。しかし、批判者に対してどのように対応するか、という点に限って言えば、当人の宗教的立場によって違ってくることは考えられない。どのような信仰を持っているとしても、誠実な批判に真正面から取り組むことは人としての義務である。それは一人の個人に当てはまるだけではない。意を同じくするグループにも、学風を共にする研究者集団にも、同一信条を信じる宗教団体にも

¹⁴⁵ 『私たちの王国宣教』1999年11月号、3-6頁参照。

しく当てはまる。

この点で、ものみの塔協会の指導者には、失望させられ続けてきた。筆者はこれまで、協会リーダーに10通に近い手紙を送ってきた。しかし、ただの一度も返事をいただけなかった。40年以上の牧師生活、50年のクリスチャン生活、70年に近い人生の中で、このような経験は初めてである。筆者の身の周りにいる証人の方々が誠実であるだけに、そのような対応は信じ難いことだった。仮に、意見を異にしていたとしても、手紙を受け取った、とのお返事ぐらいくださるのが礼儀ではないだろうか。

エホバの証人の方々へ

組織のリーダーは、リーダーとしての責任を負うべきである。といっても、個々の証人たちに何の責任もない、というわけではない。マインド・コントロールのもとにあるとはいえ、不都合な情報に耳を閉ざし、誠実に対応しないならば、やはり、その人の責任も皆無とはいえないからである。

あなたが、エホバの証人であるなら、本書のような書物を読む責任はあるし、読んだ内容に関して結果に対して個人的に判断をする必要がある。たとえエホバの証人であっても、あなた自身の理性を働かせて本書を読むなら、組織の判断、見解を仰がずとも、自ら結論を出せるはずである。その結論を大切に、第一歩を踏み出していただきたい。

しかし、もし、あなたがエホバの証人で、組織を絶対視しているなら、ここに紹介している資料を正當に評価できないであろう。資料は、十分に提供されているはずである。もし本書で述べた証拠で納得できないのであれば、教父の証言、考古学の資料、聖書の証言を、さらに5つずつ加えたとしても、あるいは10つずつ加えたとしても、納得できないだろう。要は、証拠の質と量にあるのではない。資料を読む側の判断基準にある。調べる前から、協会が正しいのだと決めてかかっているなら、本書の証拠を客観的に吟味、評価することはできない。結論は読む前から決まっているからである。

正直さは、真理の探究において不可欠である。筆者は、そのことを、特に証人の方々に求めたい。もし、イエスが伝統的な十字架にかけられたことを、本書に挙げた証拠から納得されるのであれば、「杭」という考えを捨て、「十字架」を受け入れていただきたい。これは、信仰の問題ではなく、事実の問題であり、歴史の問題である。そして、何よりも、人間としての誠実さの問題である。

そういう以上、筆者自身も、同じ心構えを求められている。もし、どなたかが本書に反論し、本書に挙げた証拠の一つ一つを否定されるなら、筆者自身は、イエスの刑具が一本の杭だったことを喜んで、即座に、認める。これは、人間として、当然のことである。

問題をいかにげんにしておいてはいけない。本書が述べていることを真剣に考慮していただきたい。もし、不明な点や疑問があれば、遠慮なく聞いていただきたい。筆者は、本書に記したすべての文章に責任をもつ。時間の許す限り個人的なご質問にもお答えする。ご連絡いただきたい。

本書を読んで、ものみの塔協会の見解や反証を必要とする方は、海老名の日本支部に問い合わせるとよい。もし、ものみの塔協会という宗教団体が誠実なグループであれば、送られてきた質問に必ず答えてくれるはずである。その答えを熟慮し、本書の資料や論述にあらためてご意見ご質問がある方は、ぜひ、ご連絡いただきたい。

もし、協会が、読者の真摯な質問に返事をしなかったり、ごまかして答えてくるようであったなら、あなたは、そのような組織に対する認識をあらためる必要がある。その組織は、あなたの人生のすべてを託すような組織ではない。組織から離れ、真理そのものである聖書に帰っていくべきである。

最後に聖書の言葉、ガラテヤ 3 章 1 節（新改訳）を読んで本書を閉じることにしよう。

「ああ愚かなガラテヤ人。十字架につけられたイエス・キリストが、あなたがたの目の前に、あんなにはっきり示されたのに、だれがあなたがたを迷わせたのですか。」

この聖句は、今、聖書の神があなたに語りかけているものではないだろうか。

中澤啓介（なかざわ けいすけ）

1942 年 8 月 21 日生

慶応大学哲学科博士課程終了

聖契神学校、ベテル神学校（ミネソタ州）卒業

「牧会書簡」「エレミヤ書」「主よお語りください」「輸血拒否の謎」「ものみの塔のアキレス腱」等の著者

現在、大野キリスト教会牧師

『十字架か、杭か』

著 者 中 澤 啓 介

発行日 1999 年 12 月 25 日発行

発 行 新世界訳研究会

〒228-0803 神奈川県南区相模原市相模大野 6-9-13

Tel. 042-743-5674

Fax. 042-748-1959